

妙宗六教篇

正

正

正

正

252
313

特

020184-000-6

特18-869

妙宗六教篇

田中 智学/著

M39.5

ABH-0399





日本國の宗旨

田中智學居士述

明治
39 5 25
内交

ののち
らなむ
ちひし
らむ
のちひし

ま

日本国
の
宗
旨

田中

日本國の宗旨

- ◎日本國の眞價 を光揚し
- ◎日本國の文明 を紹介し
- ◎日本國の皇獻 を根證し
- ◎日本國の民談 を開顯し
- ◎日本國の威力 を靈解し
- ◎日本國の深遠 を味傳し
- ◎日本國の雄大 を提示し
- ◎日本國の妙機 を自知せしむる要義なり

日本國の宗旨とは

何ぞや
利口なる國民の大多數は常に自ら無宗教を票榜して得たり彼等は時あつて宗教の迷信的なるを指彈して以て反文明の思想と爲す彼等の眼は不明なり彼等は其の誤られたる皮相の非眞實を認めて早計にも宗教そのもの眞價を問はざりし也淺近耶蘇教の如きと雖眞價は適かに彼等の知らざる所に存す況や深遠廣大の佛教をや吾人今之を驗さんとするに臨み先づ何人も首肯すべき國家の約束の上

宗教の先天的因縁

に立て
を明して有意義の解を與へんとするものなり天地間あらゆる事物の中間の存在に次ては國家の存立といふいふほど鮮明な意義のものなし一切の約束は殆どこれに結ばれて生起存
在す若しこの意義を度外にして建てられたる宗教倫理等は終に有名無實に歸すべし故に吾人は法界の眞理個人の道義と共に國家の實力を重認しこの三者の融合歸一を以て理論實行の圓滿境と爲す是れ眞に人生の
根本問題
なり然かも日本國の宗旨が日本それ自身の必要のみならずして殆ど世界の樞要問題たるは何ぞ蓋し日本の世界に於ける價值が既に日本の問題にあらざりて世界の問題なるが爲めなり日本と世界とは同時に各々
その自らの天職
を知りて靈の境に於て相一致すべく法性界の循環は恒機動しつゝある也迷悟の境邪正の決只この一途に在り然れども順序として日本國民先づ宇内民衆に先だつて目醒めざるべからず

特 18
869
日本國の宗旨

本化優婆塞 田中智學述

稽首大曼陀 別頭三寶尊 哀愍垂證加 令我長妙解
我今說妙義 正語正思惟 見聞起正信 皆共入妙道

日本魂だの愛國心だのと、口にばかり御大層に言つても、何が日本魂だか、如何すれば愛國の實が擧るかといふことを知らなければダメだ、それには日本國といふものを知らなければならず、随つて日本國の宗旨を知らなければならぬ。
一體國といふものは人を大きくしたもので、矢張人と同じく生きて居る、生きて居る以上は生命がある、何が國のいのちだと言へば、その國の人民の主義と性行が、その國のいのちである。死人は論外として、凡そ生きて居るものには、必ず宗旨がなくてはならぬ、宗旨が即ちその人

の第一の生命であつて、これが無ければ徒に生きて居るのである、偶々思慮や動作があるのは、生理的墮力の致す所に過ぎない、人よりも大きい國のいのちと一致して、互にいのちとなり心となり分別となり動作となりて、互にその生きて居るといふ面目を持つには、宗旨がなければならぬことである、人でも！國でも！

(四)

今の世は、人に宗旨がない、或は宗旨のないことを誇つて居る、詢にけしからぬ次第である、人の上でさい爾だから、國の宗旨などはオクビにも考へない、死人を以て充したる死國にならんとするのを、全く知らないで居る、國家累卵の危き、これに越したるはない、なんと是が慨かずに居られうか。

イデ我れ『日本國の宗旨』を明かして、一切世間の冥闇を除かう、人々また昭かにこの一大事を得心して、國と人とを死より救へよかしと念ずるのだ。

『日本國の宗旨』とは、日本國家が自國および世界人類に對して執るべき、千載萬世一定不變の主義といふことである、即ち此日本國が、建國の肇めより確乎として定つて在る一種の國本道

義を、正式の規矩によりて教法に仕立たものが、此國の宗旨といふのだ。

日本に生れたから日本人、九州生れたから九州人、乃至江戸に生れたから江戸子、神田出生だから神田兒といふのでは、とんと詰らない、己は神田子だぞ、乃公は江戸子だぞ、苟も九州男兒だなど、その生國を票し出して特に自らの依怙とし、特徴として誇るのには抑も何故である、九州に生れたから江戸に生れたからとばかりでは話しが済まない、畢竟おのゝその郷土の特徴と認むべき、一種の氣粹があるのを、我れもその郷人なるが故に、之を賦し得て備へて居るぞとの自信に由るのである、九州人は概して堅忍剽勁の風があるとか、江戸子兒は氣肌が奇麗で、義俠心があるとか、その内でも神田子兒は特に氣負ひで敗るのが嫌ひだとかいふ、その土地の氣粹風格を自覺して威張るが如く、我れ是れ日本國民であるぞといふ主張のあるは即ち其國に固有存在せる一種の特徴を意味して居るので、扱その特徴なるものが果して何なものであるかといふに、古來遺憾なく之を發見したものがないのである、偶々發見した處で、纔かに『和魂論』とか『日本魂』とか、『君子國』や『禮義の國』ぐらゐの話、扱ては近ごろの『國粹論』だ

(五)

の『日本主義』などか關の山である、そんな當分の主張では、世界に冠絶した國といふことは出來ない、日本に『日本魂』や『日本主義』があれば、佛蘭西にも『佛蘭西魂』があり、英吉利にも『英吉利主義』があるだらう、昔時の大名の國札で他領に通用せぬ様な、つまらぬものではそんなに珍重かるには及ばない、日本國の特徴といふのは、そんなダラシもない者でないのだ、今茲に『日本國の宗旨』といふのが爾だから、是より説明する所をよくく分別して合點するがよろしい、乃て先づ

宗 旨

といふことから話す、宗旨とは心の定めかた心の落着く處といふ意味である、心の置場所が定まれば、やがて思慮も動作も終始本末が明かに定つて筋目正しき萬物の靈長となることが出来るのである、故に宗旨のないのは、心の定らないのである、心の定らざるは即ち身の定まらないのである。

心も身も定まらぬとあれば、死人も同様である、人の上に爾ならば、家の上にも同じ事で、宗旨の定まらぬ家は人が住んで居ても空屋である、乃至國の上にも亦爾である、國の宗旨がなければ、即ちその國は野原も同様である。

よしや人にも家にも國の上にも、自ら信奉する宗旨がありとした處で、その宗旨が間違つた宗旨ならば、有つても効が無い、生きて居るやうに見えても、夫れは亡者に死物がした位のものだ。

さらば何なる宗旨が眞實の宗旨かといふことを釋ぬるのが、三度の食事よりも大切な事である、その大切の事を投遣にして置いて、平氣で澄して居るのが、即ち血の氣の澆くなつたる證據だ、

一點でも慈悲の心あるものが、これに騒がずには居られない。
● 宗旨を定めるといふ事は、一面からいふと大に六ヶ敷い、けれども一面から考へれば、是ほど易然ことはないのである、即ち教理の得失を判けて、宗旨の邪正を知るといふことは、古への達人も厭んだほどであるから、平凡のものには無論容易でないが、若しも他の一面即ち因縁の

上より推して、持たねばならぬ善の宗旨を持つのと知れば、是非の才覚に及ばずして、これに従ふのが順當である。譬へば山海萬里を隔てた旅の空にあって、往來容易ならずといふとも、自身の故郷自身の家ならば、否でも諾でも歸らなければならぬといふと同じことである、今ここに説かんとする宗旨は、即ちその『持たねばならぬ宗旨』のことである。

經文に『諸佛世尊は唯一大事因縁を以ての故に世に出現す』といふことがある。『一大事因縁』とはどんなことだか、世に出家在家とも佛法を學び佛法を信ずるといふ輩は、中々に多いことだが、善く能くこの『一大事因縁』を知つたものがあるか？、いくら佛だの法だのといふた處が、肝心の佛が世に出る因縁を知らぬでは、他人の寶を數へて自分には一錢の得益もないと同様である。

『一大事因縁』とは、佛が世に出現する理由、吾れ人の『持たねばならぬ宗旨』のわけがら、又佛は如何して人を導き世を救ふものといふこと、人はいか様に法を持ち道に入るべきものといふこと、國はその人とその宗法とに就ていかなる因縁關係のあるものといふこと、誰れが此世の救主で、何の法が眞實の宗旨で、いかに信じ、いかに利し、いかに始まり、いかに終るといふ事等、久遠の大昔から、ちゃんと定まつてある、その定つた次第に則りて教を垂れたのが、佛の『一大事因縁』、その定れる通りに歸着するのが、吾れ人の上の『一大事因縁』といふものである。

此事を具さに分別するには、法、佛、身、土、の四重の法門といふものを以て説き明かさねばならぬ、今此四重を綯交せて、わかりの善い様に述べるから、人々善く在來の肚の中の頑滯物を排ひ除けて、己れを虚うして味ツて貰ひたい、必らず眼の醒るほどのおもひがアツて、産れかはつた心地がするから。

先づ四重の中、一番近い様におもはれるのが身だ、夫から身に直接の關係あるのが土だ、故にこの身土の二つから説くが、實は身よりも土よりも猶近いのは佛だ又その佛よりも近いのは法だ、四重とも皆ひとしく近いから、果ては一ツになつて、四つ別々のものでないといふ道理がわかれば、それで人間もかれこれ佛に成つたのである。

本義を説く前に、四重の釋名をして置く

●法 とは天地の間にちやんと存在して、いつ始まるとなく、いつ終るとなく、誰れが造るとなく誰れが支配するとなく、天然に充ちわたりて、萬物の體とも用ともなりて、一切の法則因果の根元となるものにして、佛がこれを見出し、これを活現し、これと一如になり、よくこの法の性來に合したる智慧と思慮とより、無窮の大慈悲を起し、形にあらはし聲にあらはして、はじめて人間に指示せられたるものである。

●佛 とは前の法を悟りて法と一體になりたる、謂はゞ法の活きた手本であつて、法と人類との雙方より生み出した、一番尊い精靈ともいふべき不思議の聖人にして、人を救ふことのみを仕事にして居る、智慧と慈悲のかたまり。

●身 とは吾人の心より種々の業を造りて、その業の結晶して成あがつた、謂はゞ心の「よせもの」(寒天などのよせもの、如き)にして心の象といふても可き、作業受苦樂の當體である、心から造られて復た心を造るといふ、善悪苦樂の製造機械。

●土 とは國土といふことにて、身の置き處、又種々の仕事の仕所、身といふものを経て、心に善悪苦樂を注ぎ込む、仕事の原料と、その製造場といふが如きもの、前の法と佛と身との三を、形の上に包み持ちて居る依止所なるが故に、因縁果報の千狀萬態をすべて羅列包藏して在る置場と見てよろしい。

さてこの四つに就てどんな談道があるか、又いかなる不思議があるかは、これからだ……。釋尊一代五十年の説法、五千七千八千の經説は、畢竟何を説いたのだといふに、これは佛法を行ずるもの、一代の日記であるとして釋してある、乃ち佛法といふは、すべて身上の近い事を説いたものである、佛や淨土のはなしがあるから、ひどく遠いもの、様に思ふが、これは畢竟事に寄せて其徳を示すの趣向で、佛や淨土をかりて吾れ人の身上を説いたので、謂はゞ番附や筋書を以て芝居の次第を示す様なわけである、故に近く一身の上一國の上に、佛法の眞實活動を認めるのが、本筋の佛道修行といふものだ。

普賢だ観音だと、いろ／＼の佛や菩薩の名があるが、實は權兵衛如來や太郎兵衛菩薩の異名である、随ッて淨瑠璃世界も安養世界も、皆この娑婆の替名である、親しく言へば權兵衛太郎兵衛の本貫住居の地を指すのである、乃ち日本人としての日本國が、全く眞の極樂世界で、其國民が正眞正銘の佛なのである。

然るに自ら、佛なることを知らず、此國が極樂淨土なることを知らず、無理に佛を凡夫にし極樂を地獄にして、己れと卑しく苦しく穢くして居るのは、尤も馬鹿げたはなしで、是れが即ち迷ひといふのである、此迷ひを晴らすために、身、土、法、佛、の不思議常住清淨自在なることを明かにするが法門の詮である。

先づ我れは人間なり、我れは人間として殊に此日本國に生れ出でたり、我れは日本の民として此國に切ッても切れぬ父母だの先祖だの主君だの親族だの朋友兄弟だのを持ッて居る、即ち日本といふ國土に根が生へて居ッて、天然に此國と離れぬ約束が先より定ッてある身分だといふことを觀察しはじめ、扱て次には如何して此身を處置し、如何して此國を處置したら、身の

本務と國土の真相とが究竟し得られるであらうと考へだす、爾して人間といふものは全體どんなことを仕たら、その持前の役目が立つのである、又國と吾身との關係は如何ありて如何なるものだといふことを惟ひ出す、スルト始めて自分には重大なる先天の任務の備はりあることを發見することになる、爾なればソロ／＼血が循環して來て性根が注ぎはじめたといふものだ。身土法佛と四つあるが根本は心の一つである、心の深妙なるを佛と説き、心の廣大なるを法と説き、心の活動現象を身と説き、心の結果を土と説いた、是が法華經本門壽量品の法門である、文殊でも普賢でも觀音でも地藏でも、迦葉阿難龍樹天親も知らない又言へない無上の法門であるから、其已下の諸宗の祖師達などの夢にも知ること能はざる甚深の正義である、昔日釋尊嚴かに本眷屬の上首上行大士に付囑なされた秘法にして、末法は一切衆生を救はんが爲に、特に此日本國にこの法を宣傳して、日本乃至世界萬邦の最終歸着の宗本と定められたることである。

身といへば一人にはじまり、國といへば多人數の結合に名けた稱である、しかし人からいへば

人の國であるが、國からいへば國の人である、人が尊いか國が尊いかといふに、人は人の爲に尊いといふよりは寧ろ國の爲に尊く、國は國の爲に尊いといふよりは寧ろ人の爲に尊いのである、國を重んずる爲には人を大切にし、人を大切とおもへば國を大事にかけねばならぬ、是が人と國との本來の因縁といふものである。

人に宗旨が無てならぬ等ならば、やはり國にも宗旨がなくてはならぬ、人の宗旨はやがて國の宗旨、國の宗旨はやがて人の宗旨である、その國に自ら定つて符合した宗旨は、乃ちその國民の必ず持たねばならぬ宗旨であるいふことを合點せねばならぬ、扱そこで

吾人はいかなる宗旨を信ずべきや

といふに、無論日本人なれば日本の宗旨を信ずべしといふの外はない、シテ日本の宗旨とはいかなるものなりやといふに、夫は日本國に宛籍つた宗旨、即ち日本の特性に一致し、日本の天職に適合して、最尊最上の優等教理を持し、洪大無窮の教益を有したる宗旨でなければならず

具さにこの諸件を備へた宗旨は、さながら天の成せる國教にして、所謂「一大事因縁」より成れる國民の固有性ともいふべき宗旨である、それを明かにするには先づ

日本國とはいかなる國ぞや

といふことを知らねばならぬ、抑も日本國の國體といふは、世界萬邦の中に於て特にその靈元を占め、天の精氣は神靈と現はれてこの國を主宰し、地の精氣は瑞穂の秀美を國土の上に彰はし、山川河海の配置は天然に妙調の排列を存し、禽獸艸木の殷富、人情氣節の優高、文字言語技術工巧の圓融自在なる、風土氣候の平順、すべて偏纏を脱出して衆妙を究めたる、現見の實證は、何人も異論なき所、これぞ神工の靈德その上に顯はれて千世萬劫に朽ちざる尊貴の因縁を寓したる不思議の妙國たる現證である、さればこそ國といふ國の中にも、萬世一系の神裔を君主と戴くのみならず、神世の昔より色も替らぬ 天祖皇太神の大御心を傳紹し、皇室御代々の洪範と爲して、此國土に君臨垂治したまふといふに至りては、取りも直さず、天祖太神

まのあたり今日に生れまして親しく此民を撫育し給ふに異らぬ殊勝の國體である、古來この皇統連綿萬世一系上下分定り君臣家を世々にするといふ事を以て、萬國に勝れた國だといふ義は、何人も言奮るして耳にタコのイルほど聞いては居るが、只徒らに萬世一系ばかりで誇るのでは、やゝ偶然を崇ぶに似て、孔だ國體を重んぜざる平凡理屈に墮ちる、吾人が今こゝに尤も力を極めて宣説するのは、萬世一系ばかりの上では無い、正直仁慈萬德の圓滿根元たる神さまの、その神德の妙用を垂れて、この蒼生を救ひ治めたまへる德教が、御代々の血統に注入して、皇家永劫の御仕來りとなりて、一瓶の水を一瓶に傳ふるが如く、今に現に吾人の頭上に光り輝き渡つて居る、この神隨の道といふが、即ち天祖の御心なり御德光なり天皇は即ちその活現體に在ますといふが、眼の注け處であるといふのだ、爾いふ不思議な靈德に包まれて國家を爲した邦國は、廣い世界に外にないのだ、どこの國も皆人間が勝手に手前理屈で製造した國體ばかりである、つまり他人の所有を奪つて自分のものとしたのだから、體のよい盜賊である、湯武の如き義戰の結果より占めた帝位でも、篤く論ずれば他の富貴を奪つて己が

子孫に傳へたのであるから、初は公にして後は私なりと論斷して差支がない、况やはじめより私を看板にかけて、強きにまかせ弱きを倒して掠奪を恣にしたのは、金箔附きの國盜人である、たゞく國民が服従して居るのは、兵權に壓せらるゝのと、恩政私惠に忤れたのである、眞から底から有りがたいのでもななくてもない、夫故少し國政に弛みが出ればいつ何時轉覆へされるやも知れぬといふ、危険の意味が伴つて居る乃ち徹頭徹尾たゞ私の一點で國を建て國を爲し居るといふが、現在世界の境界である、その中にひとり卓然として徹頭徹尾たゞ公の一點で國を建て國を爲して居るといふは、此日本國の外にない、私の國は即ち凡國である、人に於ける凡夫に同じことである、吾が日本國は公の國だから即ち

聖國

である、凡夫に對する聖人といふに同じ、この聖國には、乃ち聖國の當然爲すべき職分がある、その職分が乃ち國の主義である、その主義を知るのが即ちその國を知つたのである。

(十八)
凡國は凡國相應の法が有ッて行はれて居る、即ち斬ッたり奪ッたり、猜忌恐怖の妄念に充たされ、夜も沈々寝られぬほどの情ない境界が、物質的の文明に頼まれて表面を裝飾して、わづかにボロを隠して居る、然るに聖國はこれに反し、表面は素朴で文華の見るべきものがない様でも、内には大正至公の神意を基とした、それこそ萬世不朽の王道を以て國是として居る、自らその公正を守るばかりでなく、終にはこの正道を普及して、彼の世界萬國の私情紛々たる修羅界をも一掃して、均しくこの大正至公の道光に照らし、残りなく天地間の蒼生を救はなければならぬといふ大任を以て居るのである、是が神の大御心で、即ちその徳性であるから是非がない這いふ尊貴の天職を保持しつゝある、吾皇室とこの日本國である、故にその國民たるものは苟も自國の天職自國の主義を知ッて、自らもその一分子であることを自覺せねばならぬ、これを覺悟し實行するのが、國の特性を發揮し、國の天職を完うするといふものだ、それを一筋に正しく指南開發して行くのが、國の特性に一致し國の天職に適合した所の日本固有天符の宗旨である、この

天符の宗旨

によりて如上の理由が分明に知れるのである、故にこれよりは正しくその宗旨を説明して、本論の要義を釋成するが、それに付て一々經文論釋の證據を擧げて言ふ筈だか、あまりに澤山だから意を得て文を略して置くから、若し詳しく知んとならば『妙宗雜誌』に就て追々研究するが佳し、吾人は固より自己の私情を述べるのではない、すべて經意佛意の幽玄を發いて、世間の倒惑を救ふのが趣意だから、無責任のことは決して言はない、但し今まで聞て居たことと違ふといふので愕くものが定めしあるだらうが、夫は今までのが皆間違ッて居たのだから、つまり澤山愕くほどよろしいのである。
何が日本國の宗旨だといふに、前にもいふ通り、國の性格に適ッて、而かも動かさない因縁の存して居る宗旨が即ち日本國の本教である隨ッて亦吾れ人の必ず持つべき宗旨である、如何してその事が知り得らるかといふに、眞實に

此國體を發見した人

は指し示されて始めて其の宗旨を知ることが出来る、其人とは何ぞや、これに二人あり、一は天竺に出現して側面より此日本國を宣示したまひし釋尊、一は正しく釋尊の教勅を奉じて事實の上に此日本國の靈威を指的せんが爲め、此日本國に出現して、正面より此國體を顯本したまひたる釋尊同體の大士、日蓮聖祖、この二人の照知照見したまへる處は、即ち同致一體にして、いづれも同じく此日本國の天祖と國體とを別頭に廣説明示して、名を正し義を明かにする爲の示現化導である、その法門は法華經二十八品に於て、文義意の三重に傳へられ、中にも其精要を壽量品と觀心本尊抄とに成立し判釋せられてある、これが日本國の宗旨である。天祖は徳化を此國に垂れたまひたが、その道の名と義とを説き明さない、それは天竺に天祖と同體の聖人が出て詳しく説くから、別に説く必要がない、後世只神隨の道といひ傳へたばかりで、經典の本據がない、時節到來すれば、その神隨の道の實體を説いた經典が、やはり説主

の身内から、此國へワザく持て出て來て後の始末は宜い様につけるからと言ふので、ワザとお説きにならない。

天祖(皇太神)は國體の主であつて、教祖(釋迦佛)は日本國の宗旨を定め、聖祖(日蓮大聖)は日本の國體と日本の宗旨との結合を司る役目と、聖々三祖の神壽が糸も紊れず定まつて居る、即ち三祖相依つて一道こゝに立つ。

大日本國教!

即ち是である、所で又釋尊上行の大聖が、その究竟の目的とする所ろ、たかが此一小國土の日本を説明するに止るとは、甚だ小サな話して往詰つた事のやうに思ふものがあるだらうが、談旨は乃所だテ、いま日本の邦土は、國界をいへば僅かに二萬七千〇六十二方里の面積、人口にしても四千五百餘萬、試みた世界の地圖を開けば、探がすに骨の折れるほど小サな國、そんな小サな國にばかり都合の善いやうな道が、なんて世界の公道といへるか、だれしも一時は

疑ふことだが、元來道といふものは邦國に局られて在るものでない、又理の正邪は邦土の大小に關るものでない、理性は天地よりも大なれども、芥子の中にも托る、猶天上の月はその形至て大だが、瀧のあらしに散る至て小すな水珠にまでも、正直にその全體を宿して居る様なもので、邦土の大小廣狹は、理や道の上には一向に關係すべきでない、小サけれども何故か此日本は、神が特に世界の首腦と定めて、一たび垂迹示現したまふのみならず、親しくその御血統を存し、その道統をも留めて、現前に世界萬邦の鎮となしたまひ、教祖また特にその道法を開示したまひ、聖祖また特に此國に示現して兩祖の洪謨を大成したまふ上は、争ひもなく是れ神聖侵すべからざる靈國である、而かも此國の斯の如く靈なる所以は、やがて世界萬邦を導きて、有道の國、有道の人たらしむべき、廣大の天職を固有具備せるが故にして、即ち世界の人類や萬物の爲めに、先づ靈ならざるを得ざる因縁ありて存するのである、例へば人間の身體中にも頭は小サけれども、一身の靈元にして四肢五體の元締なるが如く、此日本聖國は世界と人類萬物との爲に首腦靈元たるべき様に造られてあるものだから仕方がない。

かくも尊く微妙き國がらなるを知らずに居て、矢張彼の私の國がらと同様なるものと誤り、自ら侮り自ら卑めて、佛と同様なるべき衆生が、自ら凡夫と成り下りたると同じく、この聖國を凡國と爲して見るが故にその邪見より三毒の火を起して、炎々として火宅の趣を現し、その邪見より五濁の波を起して、蕩々として穢土の姿となるのである、この迷想邪見は源と顛倒の凡見より起りたるには相違なけれど、一つは外道の邪思惟やら、釋尊の本意を失へる謗法邪見の偽宗門どもの、種々に破佛法破國の因縁を醸し成して、この聖國の光輝を抑へんとする

魔の入智慧

に煽られて、かくも零落れて他の凡國同様……どころではない、却て凡國の後へに従ふやうな情けない境界になつたのである。
 何が魔だといへば、すべて此聖國固有の宗旨を遠けんとするものは即ち魔である。
 釋尊一代の説法、數々の法門經説ありといふとも、「一大事因縁」の經説法門といへば、法華經よ

り外はないのである、故に佛法といへば法華經の事だ、扱てその法華經には何なることを説いたかといふに、十界皆成といふて、聖人も凡夫も、人間も神仙も、善人も悪人も、男子も女子も、餓鬼でも畜生でも地獄でも、一切天地の間にあるとしあらゆるものは、元來同一體のものであるから、卑いものが高いいものになれないの、悪が善になれないのといふ道理はない、その末にばかり眼を着けて居るから、いつまでも悪は悪を長じ、邪は邪を増して、昇進還元することが出来ぬのである、一たび諸法一如の道理に基けば、法界は混然として一の寂滅無用の體であるとなつて、一切衆生頓に如來の覺位に入りて成佛する趣を説いたのが法華經の迹門といふのだ、夫から又次には十界久遠といふことを明かして、十界の衆生も國土も、皆唯一の本佛の功德より流れ出した、果徳顯現の相である、その本佛といふは、いつの昔と限りの知れぬ本時より、既に因の萬善と果の萬徳を圓滿成就して、常に限りなき智慧と限りなき慈悲とを以て毎も毎もこの一切衆生を救はんとして一日一時一刻一刹那も間斷なく、衆生を護念して離れない本有の佛である、十界の衆生は即ちその本佛の體内に存するのである、さればこの衆生も國

土も山も海も樹も草も、乃至空中の塵でも海邊の砂でも、一切この本佛の功德の充ちわたらざる所はない、佛と體徳を等しするが故に本覺の如來である、此旨を了知した時を始覺の成佛といひ、扱てこの始覺は即ち吾身の本覺なることを覺るのであつて、覺れば直爾本覺に還るから始覺即本覺となつたと説いた、是れが法華經本門の法門である、これを一念三千の妙義といふて、この法門がなければ、凡夫を佛にすることも、娑婆を極樂にすることも、乃至惡人を善人にし、惡人を智者にすることもすべて出来ないのである、法華經の外の經にこれを説いた經はない、この法門が無ければ脱殻の佛法だ、元來佛は衆生を成佛させたいといふより外に望みはない、されば成佛の出来ない經は、佛の本意ではないと争ふまでもない、その佛の本意でない經を基として、種々の理屈を構造して立てた宗旨は、無論佛の宗旨でない、成佛得道どころか、却て人を邪見愚妄に導く所の魔説である、すべて法華經を宗とせず、又法華經を宗とすることを拒み嫌ふ所の諸宗見は、佛の大慈を遮り、衆生の得道を妨げ、國土の成佛を押へんとする天魔の所爲である、元々惡氣がなくて遯焉爾いふ見を起したのなら、それは天魔に魂売たのである。

釋尊の滅後、天竺には龍樹菩薩天親菩薩、支那には天台大師及びその法脈の學匠、日本にては聖德太子と傳教大師、是だけの諸賢哲は兎に角佛の宗旨を知つて居たが、時が來らぬのと、其人てないのとて、判然と言ひ顯はすことが出來なかつた、又矢鱈の處ていふべき筈がない、此法門は必ず日本國に於て宣へはじめなければならぬ「一大事因縁」が存して居る、夫ゆゑ聖德太子も傳教大師も日本に御出現なされたことゆゑ、時節を待つてその下拵へだけをなされた、所謂聖德太子は世法と佛法の一致を爲すべき準備にとて、政治法制學術技藝の世法と佛法との調和を計つた上、神儒佛三道の本末關係を説て、ほゞ國體の概要を定め、傳教大師は佛法の上より諸宗見を一掃し、教法の統一を計つて一たび法門の統歸を明かにした、いづれも本化出現の前驅として、將來に起るべき眞の日本國教の下準備を爲したものである。

他の諸宗は、天竺、支那、日本、の各宗諸流數十ありといへども、いづれも法華經を度外視した旨法門であつて、全く此日本國及び將來の世界のためには、害ありて益なき邪見謗法の宗旨である。

各宗の間違ひ方を一々詮索するのは、中々に煩しいから一口に其非點を擧て詮を取ると、釋尊出世の本懷衆生成佛の正道たる法華經を用ひざるは、即ち釋尊の法義に違きたる異流にして、亦釋尊化導の「一大事因縁」を蔑如した暴戾の振舞なるが故に、佛法として見ることを得ざる次第である。

惡因縁によりてその邪惡の宗見に眩惑せられつゝある不幸なる國民は、日本人としてその本國の大因縁に背き、又佛弟子としてその本佛の大因縁に背いて居る、即ち經に所謂破佛法の因縁破國の因縁を日夜に造りつゝあるものである、これを救はずんば佛法も國家も遂に其甲斐なきに至ることである、依て聖祖この倒惑を憐み、本佛の加被を負ふて此國に光發したまひ、爾ちの本法を持てよ、爾ちの本佛を見よ、爾ちの身爾ちの土を知れよと

大悲折伏

の大化を垂れて、法華經が釋尊の本懷なる事、又日本國の魂魄なる事、天祖と釋尊と法

華經と日本國との一體なる事を、法門的に因縁的に、縦横反覆諄々切々として訓へられた、是
 が即ち日本國の眞の國教である。
 どの國でも國には必ず人が居る、人には必ず心がある、心があれば、色々な事を考へ出す、
 その考へには必ず動いて居る部分と、落着く部分との兩端がある、動いて居る方は工夫に屬し
 て是が諸種の學問となり、落着く方は歸着に屬して是が諸種の宗教となるのである、夫ゆゑど
 んな國にも何か學問や、又曲りなりにも宗教といふものが發生する、兎に角その宗教の發見者
 開創者たるものは、いくら常人に勝れて智慧なり德行なりの卓出した處があつて、やゝ聖賢
 に類して居る且その言ふ所や爲す所には、必ず幾點かの取柄があるには相違ない、けれども元
 來圓滿究竟の智徳と斷徳（智徳とは諸法の至理を徹見して誤らざる智慧、斷徳とは一切の心や
 身の煩惱を脱出して諸法に於て清淨自在なる徳をいふ）との上より出た知見でないから、その
 根本は正しくない、若しくは明了でない、故にその宗教の安心功用ともに不完全なるは言ふま
 でもない、所て此人類の進歩といふものは、暇々として停止なきものだから、段々と種々の因

縁に促されて、段々智識見解が進歩する、そこで世界の宗教觀も今までは此より上のものに出
 逢はぬから、是で善いとおもつて居たが、世にはそんな勝れた教法が有たかと心付けば、その
 卑さを捨て高きに就くは理の當然である、然かも宗教は人の精神を支配する上の最大勢力であ
 るから、人間世界の一番大きな事である、その大きな宗教の而かも世界に一番勝れて尊い
 釋尊の、而かも亦一番最上の教理を以て立てた大正法が、此日本國に開宣傳持せられてあると
 いふのだから、イヤとも世界最後の大宗教として、萬國の宗教心をここに集中し、宇内一致の
 信仰尊崇を引寄せせるのは、亦必然の勢である、乃てその世界の人心を一結攝取すべき大能力あ
 る宗旨が、此國の居候でなくて生坂の國教であるのだから、早晩この大正法に吸収せらるべき
 宇内人類の思想界は、法を崇ぶと共に亦この日本聖國をも崇ばなければならぬ、これが

宇内統一の約束

ある教國相關の「一大事因縁」といふのだ、天祖は治道の示現として日本國に神迹を垂れ玉ひ

たが、強ち日本一小土の爲ではない、特に此國を靈ならしめたのは即ち世界萬類の爲である。
故に天祖を以て單に日本の御先祖だとのみ考へて居るのは、神の德量妙用を知らぬのである、
人間の古いのを神と名けたのだと考へて居ては違ふ、神とは不思議といふ事で、萬德萬善の票
式といふ事だ、苟も萬德萬善といふ上は、因のない果や、又は果のない因は決してない、そ
の因果に付て權教には權因權果を説き、迹門には迹因迹果を説き、本門には本因本果を説い
たのが、釋尊の教説である、その中で權の因果は衆生の心を本として説き、迹の因果は衆生の
理を本として説いたから、いづれも佛意の正義でない、只本因本果の法門が即ち法華經の詮要
にして、釋尊の本意である、此本因本果の法門によらなければ、天祖の因行萬善の妙巧が顯は
れない、天祖の因善が證明出來なければ、隨てその果德も顯れない次第である、肝心の御先
祖の德因が分らぬとありてはその國體が立たずその國位の尊貴が知れず即ち國土が闇である
幸に教主釋尊これを説き、聖祖大士これを傳へて、遺憾なく王法佛法の本有常住を談ぜられ
たから、乃て日本の夜が曙けたのである。

以上述べた所を引まゝとめて、法佛身土の四重を明かにすると、先づ吾れ人ともに自身の成佛を
するといふが即ち國の成佛の初である、又國の成佛を顯はすといふが自身の成佛の終りを顯は
すのである、自分が成佛せざれば國も成佛せず、國が成佛せぬほどならば自分も全く成佛した
のではない法妙なるが故に人貴し人貴きが故に處貴し(智學云く是は迹門の意)と古人も言ッ
た、それを篤く論ずれば法妙なるが故に佛貴し、佛貴きが故に處貴し、處貴きが故に人貴し(是
は本門の意)といふ道理になる、即ち此宗旨によりて日本正しく聖國となり了つた!、此聖國
の民たる者は皆聖人でなければならぬ少くも聖人の心を心とし、聖人の業を業とせねばならぬ
何も堯舜や孔子を尋ねるに及ばず、また天竺の空屋を探がすにも及ばず、近く天祖の垂絶を
傳へて親り國土に光臨したまふ所の吾皇祖の無窮洪大なる、至公大正の治道を以て、千載不
磨の國是としたる此日本國の特質特性天職神謨と一致したる、天祖默示の大法一乘妙法蓮華經、
事の一念三千、本門の三大秘法を以て組立たる大宗旨、即ちこれ

日本國の精神

である、故に國民苟も此精神を持てば、任運に聖の事を行ふのである、世界悉くこの法を
持てば、世界皆聖國に轉ずるのである、こゝに至て始めて邪見仆れ、妄想散じ、惡念除き、毒
心去り、猜忌消し、鬨諍熄み、干戈收まり、迫害滅し、恐怖なく、怨恨なく、あらゆる煩惱的
現象亡して、たゞ正直、純潔、至善、至美、大公、妙樂、の充溢遍満したる極樂莊嚴の常寂
光土となる、これを世界の成佛といふのだ、この大法を管つて居る國であるから、日本を大切
な國だといふのだ、その大切な國の頭腦が、皇室で四肢五體が日本國民である、其わけがらを
知らせるのが、釋尊と上行大士の本意で、其主義を明かにし及び實行するのが、此日本國の宗
旨たる『本化妙宗』である。
同じ佛法でも、天竺の佛法もあれば日本の佛法もあるのだ、所謂脱殻の佛法が即ち天竺の佛法
だ、近世佛教の事を『印度哲學』と名稱して嬉しがって居るやからがあるが、それらが脱殻崇拜

の連中である、又人類といふことを主として、國家といふことを知らずに、盲滅法に宗教を造
り立たのは、理屈を祟ふことを知つて、因縁の大切なることを忘れたのである、因縁を離れた
理屈は、血を亡つた身體である、平等主義といへば大きい様だか、夫れは惡平等である、邪平
等である、佛法といふものはそんな者ではない。
理屈などいふものは、大なり小なり何れの國何れの人にも、似寄つた見當の着くものだ、基
督の『愛』、孔子の『仁』、老子の『道』、佛教の『慈』、幾分かは似た邊もある、又基督の謹厚、孔
子の端正、いづれも凡地を抜くこと數倍である、哲人として見るに大した過不足はない、論語
の『意なく必なく固なく我なし』も、考へ様で『苦、不淨、無常、無我』にも似通へば『常、樂、
我、淨』にも彷彿として居る、其他『鸞飛て天にいたる』も、『われは點に與みせん』も『浩然の
氣』も『天國は近けり』も、『冲玄虛無』も『逍遙遊』も『知行合一』も『主一無適』も、概觀の點に於て
は、ほとんど『眞如』にも『實相』にも『極樂』にも『見性』にも如同した處があつて、宛も佛教諦理
の縮圖とも見らるゝことがないでもない、たゞ偏圓の差、眞妄の違ひがあるから、他人の空宵

に過ぎないのである、華嚴宗の法界觀に十玄六相を建立したり、眞言宗の六大四曼三密の上に成佛を論じたり、各々堅義こそ少々の違目はあれ、どこかに天台の一念三千の法門に活描しの點がある、それ以後から出來た方が幾分か器用の様だ、然るに一念三千の法門といふのは、諸經の中ひとり法華經の所詮であつて華嚴經や大日經などの未顯眞實の經々に跡を削つた法門だが、そこは所謂「理屈は付け様」の譯で、法藏、澄觀、不空、弘法、いづれも才覺のある人たちが、だから、理屈の拵へ様が奥床しくて味い、「震旦の大師争て醍醐を盗む」など、澄して居ても、何方が盗んだのかは常人には知れない、おまけに「第三戲論」とまで輕侮されながら、慈覺、智證、などの徒輩は、その師祖傳教大師が見る所あつて、特に宗の字を削つて置た眞言に降參して、貸した庇から火を出して母屋を焼いた、自分が弘法の門に這入たならまだしも、一味の醍醐に毒を混じて、終に佛敎統一の洪業を誤り、謂はゞ奸夫の兒に相續させた様な情けない境界になつた、そこで後になるほど人は追々と智慧の付くもので、この光景に氣が注いで、理屈のあまり頼りたくないことを知つたのが、法然、親鸞、道元、圓爾などの人たちが、一切に理屈の

煩しいのを脱け出して、なんでも手ツ取り早く用の足りるのが勝だと、扱ては念佛往生の安賣主義、禪宗頓悟の即席料理などをはじめた、是とても羔に懲りて膾を吹くの趣があるが、畢竟は理屈の無益が多くて、實用に疎いといふことを感付いたからである、諺に「盗人にも三つの理がある」といふことがある、實に理屈は付け様で如何でもなるものだ、いくら智者でも學者でも、佛を除て外のものには、よしや等覺の菩薩でも、佛の肚の中は判らないものと極つて居る、その判らず屋連中が何ほど騒いでも、結句小田原評定に過ぎない、小田原評定でこの洪大無窮の佛法や世の中の事を捏ねられては、いつ果てしの付くことか知れない、その内には地體がやゝともすると間違ひたがる凡夫の事だから、遠慮なく違つた方角へ思ひくに出掛けて仕舞うから、いつても闇の世間でいつ迄も光明に接することがなくて了る、そんな頼りないことを的にして、此國家や人類が何なるものか、馬鹿馬鹿しい、佛はそんな無詮ことをせよと指圖はなさらぬ、必ず持つべき教法といふものは

人の上にも國の上にも

先天的に定つて居るから、それさへ如法に信受奉行すればよろしいと嚴明に教令されてある、

それが『一大事因縁』といふのだ。畢竟するに世の諸宗は、此大切な因縁を度外視して、手製の理屈で押し通さうとするから、その理屈は空理屈になつて、その害だけは跡に毒をのこすことになつたのである、故に苟もこの教法の混亂を出て、この國家の昏醉を救ふには、どうしても教法と國家と佛と人類との上の『一大事因縁』を明かにせねばならないのである、六百年も経つて未だ氣が付かぬとは、あまりに耳が遠すぎる！

然らば『一大事因縁』とはどんなことかといふに、此妙法蓮華經の宗旨といふものは、久遠の本法にして、吾れ人の心身に具有した、切つても切れぬ本理妙道である、それを自ら味らまして我れと遠ざかつたのであるから、今にもあれ『是れ我が法なり』と氣が着けば、いつても自身の

法であつて、その法に具せる一切の徳用力作は、その儘自らの妙徳妙用として、慈悲にても智慧にても、神通にても安樂にても、なんでも自ら思ふ通りに出したり入れたりする自在の身となつて、法と一體の境界になるのである、それを爾させたいと毎に念ふて刹那の間も忘れないのが本佛である、故にこの本佛は固有の大慈悲力によりて、久遠劫來數限りも知れぬ大むかしから、種々様々と一切衆生を教化する爲に、法を説いたり、形を現したり、或は佛となりて導き、又は菩薩となり、天人となり、人間となり、神となり、畜生とでも、地獄の獄卒とでも、乃至は山海國土の身をも現し、艸木金石にも變じ、鬼とも蛇ともなり、身方とも敵ともなり、日月の大、昆虫の小、いづれの方面形色なりとも、この衆生の迷想を覺し、その本法に歸り入らせる方便とあれば、何を爲しても厭はじと、三世常恒いつの世いかなる時にも、只この衆生を慈念して、一時も早く無上の妙道に入せたいといふより外に佛の念願はない、即ちこの憐れと思ほす衆生と、入らせたいと思ほす無上道の本法と、これが切つても切れぬ釋尊の上に就て廻る本有の因縁である、久遠のむかし一たびこの本法の種を一切衆生に下した、それが熟し

て得脱したのもあるし、退大取小といふて、一旦植系は植系だが、やがてつまらぬ偏邪の教にだまされて悪道に墮たものが中々に多い、それを色々と護り奨めて正路に引戻さんと勤めた佛の慈教が功を奏して、成佛得脱の大果を得たのが今日の釋尊現身の説法華經壽量品の會座である、初め本法の種を下したのを「下種益」といひ、中間に獎護誘引したのを「熟益」といひ最後に法華會上に成佛の眞詮を究竟したのを「脱益」といひ、是を種熟脱の三益と言つて、佛法の尤も大切な談道だ、即ち本法の米の種を衆生の心田に下し（種益）執見煩惱の艸をvari、法門三昧の水を灌ぎて熟養し（熟益）やがて成佛の果成りて取り入れをする（脱益）といふ譬によせた名稱である、これが一佛化導の始終といふ法門で、佛といへば釋尊より外にない、佛の名は彌陀だの藥師だのと、限りなくあるが皆すべて釋尊の假りに示現し或は假りに名を設けた權佛である、法といへば妙法蓮華經より外はない、華嚴、阿含、方等、般若の諸經千萬億々の經典法理があつても、皆すべて妙法蓮華經の附屬物である道具である、彌陀でも藥師でも、華嚴でも般若でも、夫々用があつて説いたのだから、無用なものではないが、宗旨とすることは

出来ぬ、譬へば此等の佛や經は、法華經の米を培養長熟する爲の肥料や水や農具の様なものて成熟するまでは一種の入用があつたに違ひないが、これが即ち米の種である米の實であるといふことは出来ない、それを混淆して居るから世の諸宗は、佛意を失つたものだといふのである。かくて一番の種熟脱が濟めば、亦後番の化益が起つて來る、夫は佛在世脱益の時にも、猶未だ縁のないものが有つて、釋尊將さに法華の正法を説かんとする時、「そんな事は聞きたくない」と、無禮にも座を起つたものや、其後深大の法門を開くに當つて、縁がなくて他土に移されたものどもがあつて、その流類が追々と繁殖して、後の世に權門邪教の相傳者となつたのである。夫故今日は又候ふ久遠の大むかしと同じく、釋尊同體の大導師、此世に天降つて後番の下種を行はなければならぬことゝなつた、故に末法の今日は即ち第二の久遠である、久遠の昔にもやはり今日の末法が有つたのである、是が本化の菩薩、本佛の冥加によりて吾れ人に布きたまひたる、本法下種の大化導といふ次第である。

今日の 聖祖は、即ち久遠の 釋尊である、今日の日本國は即ち

久遠本時の娑婆世界

である、此本國土妙の「日本聖國」と、本佛と本法と吾等とは、源と一條の連絡絶えざる大因縁の存して居ること斯の如くである、爾いふ仕細があればこそ、釋尊も此日本國を指したまひ、本化聖祖も此日本國に出現したまひ、天祖皇太神も迹佛已前すてに此日本國に出現したまひて、鏡と璧と劍との三器を傳へて、暗に本門の三寶と三大秘法とを形益示現し、後ち聖武天皇の勅使に對し、實相眞如の日輪は生死長夜の闇を照らし、本有常住の月輪は無明煩惱の雲を攘ふとの神教を告勅したまひたことである、されば聖祖また立宗開教の時節來れるを察して、國家に宣告示教する前、先づ太廟に至りて、恭しく開教を奏したまへるが如き、聖々一揆のおん計ひと仰ぐの外はないことである、而かも宇内の最終歸着たるべき、無上正かゝる大因縁の存した、此國固有の、宗旨があつて、而かも宇内の最終歸着たるべき、無上正法なるにも拘らず、それを知らざるはまたしも、中にはかれこれと文句を付けて妨げるものが

あるのは、恰も吾が父母が氣に入らぬからといふて、親を取替えたといふ無法と同じことだ、そんなシダラのない考へて居る人間が多いから、いつまで経ても此日本が光らないのだ。釋尊も既に法華に於て、開權顯實といふて今迄の方便權教を開會して、是れは皆一實の妙法を説んが爲に假りに設けた教であると、その本懷を明かして眞實を顯し、而してその權を廢してたゞ實のみを立て、滅後の指南となされた、それでも楔が弛むと縁が逆るの虞れがあるからといふので、佛や法や道や人やのすべての迹を開してその本地を示し、やがて又その迹見を排ひ除けて、只唯一本門の無上妙法に還へして、一代五十年の説法はあるか、過去久遠劫來一切三世のあらゆる佛法から、乃至億々無量の聖人賢人の説かれた種々の理法行道より、森羅萬物の各々具有せる諸法、十界三千の色心依正にいたるまで、すべて久遠本佛の一當體一妙用に攝し、その固有の行道として、久遠本法の唯一妙法を以て、一切世間の佛種と爲し、故らに本化の菩薩に付屬して此日本國に應生示現の大益を垂れ、此佛(本果妙)此法(本因妙)此國(本國土妙)を人類及び教法道義の中心として、末法萬年の闇を照らし、一閻浮提の一切衆生を教化

すべく設けられたのが、この本化妙宗の『一大事因縁』である。

故に日本國は自らの爲の日本國でなくて、世界萬邦の爲の日本國である、即ち菩薩や佛が自ら
の事よりも他を救うのを仕事にして居ると同じく、皇天私なく后土偏なき大正至公の國是に由
りて建創せられたる、佛國であると知るのが、國土の顯本を成じたので、即ち國の成佛であ
る、而かも理具の成佛でなく、事上活現の成佛である、國の成佛を以て人の成佛を顯はすのが、
身の上の顯本である、身の成佛を心の成佛とするのが、妙宗事觀の的旨である、本佛に歸し本
法を持って國土を嚴淨し即身成佛するといふが、身、土、法、佛、四重の『一大事因縁』といふて
とである。

今を距ること六百有餘年の前、この驚くべく喜ぶべく最大妙義は、『我日本の柱とならん我日本
の眼目とならん我日本の大船とならん』と名乗れる、日蓮聖祖に由て此國に傳へられたのだ
が、不思議にも日本國民は今にいたるまで安心して居た、夫れは此國民が國を念ふの心が未だ
深くないので、此大寶を見出すほどの運が向ひて來ないので、天魔の斥候が周密で離間妨害の

運動が劇いのと、本化妙宗の相傳者が、多く天魔の賄賂に誑されて變節したので、此妙旨を言
ひ顯はし行ひ顯はすものが少かつたからである。

今や 聖天子の神徳によりて、國光漸く宇内に輝かんとする時となつて、國の宗旨もいよいよ
よますく入用の正時節が來たのだから、先づ國民たるものが最先に眼を覺して置かなければ
ならぬ、内地雜居ぐらゐは左ほど騒ぐ必要もないが、將來此方から踏出して外國を教化しに行
かなければならぬ役目のある、吾が國民ではないか、いつまで赤子では居られない、内地雜居

は即ち彼國々から、出迎ひに來たものと考へて至急に準備を爲さねばならぬ。
然るに吾國今日の光景は奈何だ、役人でも議員でも、學者でも僧侶でも農家でも商人でも、誠
に自身と國と一體だといふ觀念で居るものは皆無に俾しい、それだから種々の沒規矩の妄想愚
作が熾んであつて、國家の性命が暢達しない、活た人間が居て國を殺すとは、なんと情ない話
してはないか、所詮無宗旨の人間が多いからである、國の宗旨どころではない、自身の宗旨さ
へ無いほどである、それどころでは無い、『宗旨』の無いのを自慢にするほどの風俗である、偶

ま宗教心のあるものは妄信邪信、行はれて居る宗教はといへば、活て居るものをワザ／＼縊り殺すやうな念佛宗だの、欲ばり主義の偽法華宗だの、腐った水に酔って踊り狂って居る偽神道だの、類に過ぎない、慨いても慨き切れない始末である。

日本國の宗旨とは、姑らく日本國民に就て言ふからの名である、實は世界の人から言へば世界の宗旨、天地法界から言へば、即ち天地法界の宗旨である、唯日本國といふものを、世界の柱であるとする時が、日本も世界も祝砲で六反震動する時であるのだ、その日本國を知るのには、世界中で日本國民が第一番先に知るべき天然の義務があるのだといふことを合點すれば、即て宗旨といふものが知れるのである。

此旨を悉しく知りたいと念ふものは、予が毎月發行する『妙宗』といふ雜誌に就て研究するが宜い、本篇に次で一讀せざるべからざる者は、『末法の太導師』なる論篇である。

日本國の宗旨畢

末法の大導師

田中智學居士述

末法之大導師序

予嚮著日本國之宗旨、說身土法佛之法門、以示妙宗之教體、夫國爲法之所依而法爲國之能依、故若不明國土之常住、則三身常住之義廢矣、三身若無常則土亦無常焉耳、身土之不相離、猶如體與神、是故次以末法之大導師、二書併讀而後得宗義全解、夫聖祖之於國、不啻立教開宗之恩化、無窮之慈智恒護念群生、舉法界爲其一身、久遠劫來不曾渝、豈時之云乎哉、豈處之云乎哉、其曰日本曰末法者、乃約因緣及感應故也、聖祖嘗曰日本國之一切衆生受異苦悉是日蓮一人之苦也、吾國家、不可須臾忘斯天恩者也矣、

明治三十三年三月九日

妙宗隱士

某

叙

注 意

◎此「末法の大導師」を読む人々は、必ず前きに「日本國の宗旨」を讀みて、先づ教義の大體をあきらめ置くを要す。

◎さて後にこの書をよみて、法界の元氣性命たる、本因妙種の大導師、末法の時機に感應して、此日本國にあらはれ出て、遂に人類のすべてを、救済すべき大恩教を垂れたまへる旨を領知せば、又復立ちかへりて「日本國の宗旨」を讀味して讀まるべし、かくして此れをよみては彼をよみ、彼をよみては此をよむこと、數十百遍する時は、八萬の法藏を究めたるよりも敏活簡明に眞の佛法を知ることを得べし。

◎法は貴べども、人をばいやしむが別けて當今の大概なり、凡そ物のつかさとなり、世の長となることは、なみくの因縁にあらず、從者の主をあなづり、學生の教師を輕むる、總じて下として上をしのぐ所の惡風氣は、將さに吾國の固疾とならんとする今日の姿ならずや、君を輕んじ國を賣るの大逆も、此邊より發生するものなるを想へば、身毛林立すべきのみ。

◎此書は人類の必ず歸依すべき大導師ある旨を、嚴格精密なる理論より説破し、人心の歸敬所を示したるものなれば、世人善くこれを熟讀して時代の大弊を醫せんことを望むもの也。

明治三十三年三月再訂の時

著者しるす

末法の大導師

本化優婆塞 田中智學述

稽首大曼陀

末法大導師

慈念常護世

慧光長照土

是法界氣命

是世間日月

我今說斯義

諸人乃領解

世間の人の氣樂なものには驚く、此日本國の今の有様から、往末のいかに成り行くかを考へたら、少しはツカツカしては居られぬといふことが判りそうなものだ、色々の機械や便利は開けて、大きに調法するのはありがたいが、その替りに人間の大事な精神氣魄を失つて仕舞つたのは、差引大損耗である、士大夫の身分あるものが、金で節操を賣つたり、腕力で權利や名譽を保護したり遂げたりするのは、吾國ひらけて始めて、下層人民の遊惰怯弱になつたり、詐偽放逸になるのは、上から推して來る潮勢で是非がない、嚴しく言へば國家は日夜に破滅の因を植

て居るのである。

諸君、ナゼ吾國はこんな情けない姿になつたのであらう、そも是には種々の原因があらう、故にこれを對治するには、先づ其原因から考へて掛らなければならぬ、乃て今試に世の識者と共に、通途に思ひ當る原因を數へて見ると。

▲維新已後西洋主義が蔓つて日本在來の美風を破壊したといふ事

▲餘りに金錢を尊くした爲めに節義の心を殺ぎ去つたといふ事

▲武育を賤んで文育を崇んだからといふ事

▲功利主義の流毒だといふ事

▲士農工商の秩序をやめて人民平等の制を取つた爲だといふ事

▲學校教育が給金教育で教師が學問賣捌人となり生徒が學問買入の客となつた爲だといふ事

▲耶蘇教などが這入つて來たからだといふ事

其外まだいろ／＼のコマ／＼した原因がある、果して此等が原因であらうか？ イヤ／＼こんな事はなんでもない、よし多少かの原因とはなつたに相違なからうが、どうしてどうして夫どころでは無い、ズンと深く大きな原因がある、これは日本國中にだれも知つたものがない、博

士でも學士でも新聞屋でも議員でも坊さんでも神官でも決して這大原因を知つたものがない、それだから國家はますます／＼亂亡になるのだ。

然らばそれを知つたものは誰で、又その大原因といふのはなんだかといふに、吾等も實は知らないが、此日本にたつた一人、それを善く知つて、而もその亡國の原因を除く大秘法を傳たものがある。

國がこんなに汚濁になつたのは、その淵源外ではない

宗教の間違

から起つたのである、取分け佛法の弘め損ひがその禍原であるのだ、なんと駭いたらう、ソコデ大抵な人は、不思議に思つて「佛教諸宗各々立義こそ違へ、いづれも夫々の機類に適合つた教で、みな分々に功能がある筈ではないか、それが如何して國の禍の本だ」といふ疑ひが起る、遮莫國家の最大事を曉すのだから、随分と眼の玉の飛び出るほど驚くが宜い、藥瞑眩せず

んば其疾差すの道理だから、所詮多大おどろく程の事には、必ず深く感心すべき事が潜んで居るものと思ふが宜い。

(六)

扱て、所謂「宗教の間違」とは、どんな事だかといふに、折角ながら自分では佛を尊み世を救ふ存心で居ても、佛の本意がいかなる所にあるかを知らず、ウカと見當違ひの邪見を起し、自分では天晴立派な法門道義のつもりで、知らず知らず佛法を失ひ世間を誤るやうに成行く誤解を一たび我執の宗見としたのが、次第く膠り着て積ても動かぬ始末となつた、それが佛の聲色を遣ひ、佛の衣服を着て、世の人には寸分邪惡のあるものと見えなくて、日夜に大害を造りつつ世間人類を斃殺して居るので、夫はなんだといふと、佛の本意を失つた現在の諸宗である。

これはけしからん諸宗がなぜ佛の本意を失つて居るのだと訝る人があるだらう、されば言てさかせる、佛の本意とは一代經中ひとり法華經のみである、それが佛の主義だ、それを用ゐないのは即ち佛の意に違ひた異端であるのだ。

佛敎は五十年の釋尊の説法で、其經典幾千と多くあるが、どれも一つものだと思つて違ふ、外の經々は互に水火ほどの違ひをもつて居ても、佛の本懷を説かない方便虛妄の敎だといふ丈は同じである、法華經も諸經も同じ者と見たのは眼が腐つて居るので、又法華經を他の經より劣つたものと見たのは青盲も同様であるのだ、國家の氣命、人類智徳の淵源と爲すための宗教が、かくも間違つたものであらば、イヤとも人を誤り國を亂すは當然ではないか、而かも是は世の人に中々氣が附かない、釋尊が出て論しても受とりかねるかといふほどの難問題だ、けれども一たび其原因を發見した己上、人が驚くから騒ぐからと捨て置けるものでない、因てこれを言ひ出すには、名譽だの利養だの逸樂だのといふ事は、すつかり思ひ切らねばならぬ、身方を造るの勢力を扶植するのどころではない、一先づ一國全躰の人を(彼等が醉がさめる迄は)敵にうけるのだから、どうせ頸が飛ぶか五躰を離されるかの、一大覺悟はせねばならぬ、つまり佛の本懷の正法を説くのだから、佛と寸分違はぬ慈悲心を起さなければならぬ、國に呑れる様な小サな膽ではならぬ、一國を吞了して國よりも大きい人でなければ言ひ出すこと

(七)

が出來ぬ、唐にも天竺にも三千年來、釋尊の外には曾てない、其の大聖人が末法の大導師として日本に出た：それは誰だ、先づ左の梵音をさけ：

(八)

夫レ教主釋尊ハ娑婆世界第一ノ聖人也、天台傳教ノ二人ハ聖賢ニ通ズベシ、馬鳴龍樹無著天親等老子孔子等ハ、或ハ小乘或ハ權大乘或ハ外典ノ聖賢ナリ、法華經ノ聖賢ニハ非ズ、イマ日蓮ハ聖ニモ賢ニモ非ズ持戒ニモ無戒ニモ有智ニモ當ラズ、然レドモ法華經ノ題目ノ流布スベキ、後五百歳二千二百二十餘年ノ時ニ生レテ、近クハ日本國遠クハ月氏漢土ノ諸宗ノ人々唱ヘ始メザル先キニ、南無妙法蓮華經ト高聲ニ喚デ二十餘年ヲフル間、或ハ罵ウタレ、或ハ疵ヲ被リ、流罪二度、死罪一度ニ定ラレヌ、其外ノ大難數ヲシラズ、譬ヘバ大湯ニ豆ヲ漬シ小水ニ大魚ノアルガ如シ、經ニ云ク、而モ此經ハ如來ノ現在スラ猶怨嫉多シ況ヤ滅度ノ後ヤ、又云ク一切世間怨多クシテ信シ難シ、又云ク諸ノ無智ノ人ノ惡口罵詈スル有ラン、或ハ云フ刀杖瓦石ヲ加ヘラレン、或ハ數々擲出セラレン等云々、此等ノ經文ハ日蓮日本國ニ生ゼズンバ、但佛ノ御言ノミ有テ其義空シカルベシ、譬ヘバ花サキテ菓ナラズ雷ナリテ雨ノフ

ラザルガ如シ、佛ノ金言空シクシテ正直ノ御經ニ大妄語ヲ雜エタルナルベシ、此等ヲ以テ思フニハ、天台傳教ノ聖人ニモ及ブベシ、老子孔子ヲシモ下シヌベシ、日本國ノ中ニ但一人、南無妙法蓮華經ト唱ヘタリ、コレ須彌山ノ始ノ一塵、大海ノ始ノ一露也。

扱この上は、何故に法華經てなければ世が治まらぬかといふ事と、夫から法華經を除き捨て、他の宗見を立てたのは、何故に

國家人類の害

てあるかを研究せねばならぬ、乃所が聞どころ此點が話處だ。
聖人だの賢人だの英雄だの豪傑だのといふものは、大抵は人間並より勝れた、智慧德行又は事業効績のあるものを、天下後世から推稱して崇めたもので、勿論尊いものには相違ない、が、而し、同じ此等の人の中でも、普通秀群の人といふのみでなく、いかさま天の成せる大偉人、命世の豪傑として、とりわけ尊くあはれるものもある、堯舜孔子、聖徳太子などの類、た

(九)

この秀群とばかりでは無い様である、その一代に施設した事績より、其生存中の言行などを推して考ふるに、正しく或る一個の大事を顯はすべく、何物かの代表者として天降つたらしい、乃て孔子を人間の中の勝れた人だと考へる世間的學見よりも、これは菩薩の世を救う爲め、支那へ生れ出て、其時代の最急務たる、人倫道德の教を垂れたのだといふ佛教談の方が、其人も道も俱に尊くおもはれる、聖徳太子なども爾うだ、宗教の扶植、學問の普及、國政典禮の制定等、種々なる國家的施設の、此日本國に起さねばならぬ役目があるので、日本の 帝室に托生し國家開導の導師として天降つた菩薩であるといふのが、佛教の本地垂迹談で、これは無理に爾う説いて、ありがたみを附けたといふ譯ではない、さういふ道理があるのを、佛教にては透徹して知るのである。

活動消長の原機

となるので、人の身體は形の上では、いかめかしく込入つた種々の姿があるが、若しも心の原動力がなければ、滅亡退化の死力のみで、活動進化の妙用を作ることが出来ないと同じで、畢竟心は純然たる理の代表力を持つて居て、すべての事物に現身するのである、故に佛は「心」と佛と衆生とは三差別なしと仰せられた。

法性の至理より絶大の妙化力を發動して、眞理自らが、眞理そのもの、保護や説明に任ずるのが、佛菩薩である、而かもその用に大小淺深の等差があるから、佛や菩薩にも隨て大小淺深の差別がある（是は應化身に約していふ）又その妙化力は自在無礙なるものであるから、どの處どの時にどうして出るとばかり極つては居らぬ、いつの世いかなる時に、どんな處にどんなものになつて現れるかは、推測の及ぶ處でない、或は聖人となり、或は學者となり、或は神となり、或は仙人となり、或は龍畜鬼神となり、或は天地大の身ともなり、或は芥子の如き小身

ともなり、十年百年説法して世を教ふることもあり、一日一時の示現もあり、善人として正面より示導し、悪人として側面より懲戒し、種々の變現、出沒はまりなくして物に應ずるが、而かもいかなる場合でも、その目的は必ず一つである、乃ち經に

「毎に自ら是念を作す、何を以てか衆生をして、無上道に入りて、速かに佛身を成就することを得せしめんと」

這いはれてある、但し目的は一つでも、その順序としては、時ありて變則の垂教もあり、局部の化導もある、乃ち教にも大小廣狹正偏權實の違目がある所以である。

此大眞理の最大眞正なる至極究竟の作用なるものは、少しの間物なく、些しの差排のない、正眞全大の無上道を、ありのまゝに世に現説して、全然世間の人の一切色心を整理すべき、固有本面目の大道をば、側面ならずして正面より、局部ならずして全部を、變則ならずして正式に、世に宣布し人を濟度する所の一大事因縁をいふのである。

同じ種々なる役目を負ふて世に現はれる聖者の中に於ても、尤も正しく尤も大なる役目を帯び

たのが、即ち最重至大の開導者である。

孔子老子等の聖賢は、人倫道德の開導者として、眞理の一局部を示したものは相違ないが、未だ世の導師とは謂はれない、世間の一番大なる心の迷悟に關した教が分明でないから、又は

ありても缺けて居るから……。

世間でこの上もなく大きい事といふのは、人心を究めて

天地法界と同化する事

だ、それも究め様が違式ツて居たり、又は天地法界の眞正なる妙境を失ツて、邪惡の部分のみを本尊としたのでは、畢竟邪惡法の標準である。

世間と人類とに對ツて、一番大きい正しい道を教へられたのは、いふまでも無く釋迦大世尊である。

釋尊は五十年の示現化導だが、其實ば久遠の大昔から、盡未來際の後々も、常に一道を説き、

一道を行じ、一道を護り、一道を讀して、凡夫の寝て居る間も、斷えず不睡の番をして、世を救ふ計らひのみを、心と爲したまふのである、それを

久遠の本佛

といふのだ、その本佛が、或は半身を現はし、或は十分一の身、百分一の身、千分一の身、萬分一、萬々分一、億萬阿僧祇分の一等、些の隙もなく、三世常恒の化益を垂れたまふ中に、自然と折目切目があつて、時には全身を現はし、正眞全面の資格を公表して、道の整理を計りたまふ事がある、昔天竺に出現なされたのは、何の爲だといふと、本懷正眞の大道たる法華經を説く爲であつて、その外には何にも用がないのだと、自ら仰せられた。
久遠本佛の法とは、法華經だとあるから乃ち、此妙法蓮華經は、

久遠の本法

である。既に久遠の本法とあれば、人々新たに知るべく入るべきではなく、固より知るべく住すべき法ではないか、然るをいつとなく自ら迷ひ出し、又は他の誘惑に陥入り、段々と遠退りて邪に狂れ惡に沈み、その結句が却て己れの本分の道たる正法をば嫌だの諾だのと横議したり、輕んじたり、憎んだりする様な、恐しい罰中りになつて、それで平氣な心持で居る、これまで迷ひ去れば最う極度だ、本佛の大慈光明は斷えず之を照らして、其邪惡を感み救ふが故に、教に服従したものは得脱の時節が到來して、本佛開顯の席に預ることが出來て、一たび本法に還元歸入することを得た、それが成佛といふので、その譯を公示するために、如來の出現と説法が無くてならぬ次第なので、畢竟出現といひ説法といへば、いつでも其本法たる法華經の事であるのだ。
乃てまた在世五十年の説法示現は、單にそののみでなく、正しくは後の世（即ち釋尊からいふ後の世）の一切衆生を救ふためである、又その後の世の内でも、正法時代一千年よりは、後の像法一千年の方が重く、又その像法よりも後の末法萬年の方が大切であると仰せられてある。

何故だといへば、末法（即ち今時の世）は人が弊惡多く、曠濁詭曲にして邪見が熾んである、即ち例の本法に甚く遠ざかつて、全て忘れて仕舞つた時代である處へ、世に言ふ「弱り目に祟り目」の格で種々の學者や智者が、奥床しく尊とさうに裝ふて、人を欺き誘ては邪惡の途に招き込む、而かも佛の假聲をつかひ、佛菩薩の假面をかぶり、佛敎佛説の名の下に、その邪惡の見を建立して……

いと迷ひ易い世の人は、甘きこと蜜の如き言論に欺れて、いよく本法に背て、全く邪見謗法のものとなつた、是に於て本佛化導の一大節を生ずるのである、即ち本佛二たび示現して、此大事を回復せざるを得ない、而かも此事は釋尊の佛眼には、寸毫の相違なく知れて居る、故に末法くと格別に仰せられ、特にその時代の導師を豫言せられ、その時を以て一切衆生に開示すべき、純正無垢の正式言敎として、此本法の名字と眞理を傳へ置れたことである。

果せる哉末法に入て、百七十一年、時も處も人も違はず、その宣傳の法、その化導の式、周圍の光景、その言動、露も違はず豫言に適中して、本佛の大慈光に加被せられ、十方迹佛の證

明曷采に送迎せられたる、靈山戀瞞大法負擔の全權大使、經文によりて其本名特に世界に轟さわたれる、本化の上首上行菩薩は

本法所持の大菩薩！

世界の中軸たる日本國の柱！

世界の導師たる日本國の眼目！

世界の濟度者たる日本國の大船！

本佛果海の光發たる本因妙の大行者！

凡身に票現せる本佛！

世界宗教の最後判決者！

世界學問の最後歸着處！

世界政道最後の光明者！

世界道徳の最後圓滿處！

活きたる法華經！

として、靈山三佛の豫言に送られて、末法三類の閻魔に迎へられて、我が日本國に天降つて、

末法の大導師と名乗つた。

那底人が世界の眞理を究めて一點の睽差がないかといふ詮索は、釋尊を奉戴する我等には、その必要を認めない、唯信じて釋尊の御意に従ふの外はない。

釋尊の一言一行は直に眞理である、釋尊の自ら尤も重きを置かれたる處は、尤も眞理中の眞理

として：無限の敬虔を捧げて、信服せねばならぬ。

眞理は法理である、法理は證らねば解らぬ、凡夫は解り得ない、いさゝか解つた所があるとしても、畢竟圓滿の證了でないから、高にいたると那邊に算違ひが屹度ある、それをウカとして可い氣になつて居るのは、愚と慢との遺傳病である。

智慧の一番大きいのは、我れは愚にして釋尊は智者なりと知ることである。

徳の一番大きいのは、釋尊を信ずることの圓滿具足したる、尤も清淨なる金剛信である。

世間の人は釋尊を信じないやうである、佛敎家も釋尊を信じないやうである、若しも信ずるといふなら、釋尊の本懐の通りに服従しなければならぬ、今一般世間は姑く置て、佛敎を奉ずるもの、多くは、釋尊の本意を奉體しない、或ひは釋尊よりも勝れた人たちなのか知らん、世間の多くは之を訝るものさへない、世に此位の不思議はあるまい。

釋尊は既に圓滿の智慧を以て法理を徹見せられ、乃ち妄妄なる一切衆生に教へんが爲め（知らせんが爲め、悟らせんが爲め、入らせんが爲め、住せせんが爲め、行はせんが爲め、護らせんが爲め）、微妙の梵音と尊嚴の妙身とによりて、形聲の二益を垂れて（形とは身を現し所作に示して法を説く事聲とは音聲言語を以て法を説く事）、教法といふものを授けた、これが佛法とも佛敎とも佛道ともいふもので、釋尊一代五十年の經教をいふのである。

さて其の一代の聖敎に付て、種々の敎相がある、佛にありては、いづれも衆生を導くに入用の次第ありて、宜しきに適ひ縁に應じて説かれたるものである、而かも其のすべての經教を總括して分類すると、

隨自意教と隨他意教

の二つとなる、隨他意教といふものは、その時その場合に應ずるため、人の意思を斟酌して説いた經教で、佛の自意を明かさないう方便の教である、隨自意教とは、人の思慮に貪着なく、佛の自意のままに眞理を直爾に道破した眞實教である、隨他意教は佛の外、説くことも用ゆることも出来ぬものと定めた、例へば毒藥は醫師の外、素人などに用ゐさせぬやうなものである、隨自意教は元來佛の世に出現なさる根本の目的で、千劫万劫にも増減變易のない常住不動の眞理眞道であるから、いかなる時でも何なる人でも、すべて之を用ゐなければならぬ事と定つてある、(佛が一たび説いた後は)、此二つの差異を等閑にしては、いくら經教を習ひ讀んでも、いかほど佛の前に平身低頭しても、決して佛教を信じた釋尊を信じたといふことは出来ない。釋尊の隨自意教は、やがて三世十方一切の佛の本懷である、凡そ佛といふものは、總て内證の同一なるものであつて、凡夫のやうに流義などは無い、故に釋尊に背いたと定まれば、阿彌陀

佛でも藥師如來でも、すべて此ものには同情を寄せない約束になつて居る。

一代聖教の中に、何が隨自意教であるといふことは、固より我等の臆斷でいふべきでない、釋尊既に自ら懇ろに訓示せられた、乃ち無量義經に、

『四十餘年未顯眞實』(說法品)

とありて成道已來四十餘年の間には、方便隨他意の教のみで、いまだ隨自意眞實を顯はさないところある、それから件の無量義經を説き了りて、直に無量義處三昧に入りて、まばらく無言の間に、四花六瑞といふて様々の瑞相があつた、むかしから斯る瑞相は吾も人も見たことがない、定めし前代未聞の法が顯はれることであらうと感付いたのは、彌勒菩薩である、それも今がた無量義經の會座で『四十餘年未顯眞實』のお斷があつたから推量したのであるけれど、何なる經法を説きたまふかは彌勒には解らぬといふので、一座の中の古顏が文殊師利菩薩だから、これに聞いたら知れるだらうと見當を着けて尋ねると、果せる哉文殊は之に答へて、是は法華經といふ出世本懷隨自意の大法を説く瑞相であると答へた、一座の人々さてはと合點して待設け

て居ると、佛はやがて三昧より起たせたまひて、先づ舍利弗を呼び出して略開三顯一の説法があつた、乃て舍利弗すかさず佛にその廣説を請願する、佛は度々制止する舍利弗は度々懇願する、ト釋尊これを許したまひて、あはや出世の本懐隨自意の大法、如來の金唇より漏れ出でんとする一刹那！、何想ひけん五千人の僧俗、「そんな事は聴きたくない」と言はぬばかり、佛に軽く一禮して座を起て出て往た、一座のものも、あれよトばかり驚いたが、佛は默然として彼等の爲すにまかせて止めない、しばらくあつて、佛は、心配さうな舍利弗に向ひたまひ

我今此衆無ニ復枝葉ニ純有ニ眞實ニ、舍利弗如レ是増上慢人、退亦佳矣。

と仰せられた「これで邪魔になるものが無くなつて、あとは純ら實のあるものばかりに成つた、舍利弗よそんなに心配するな、かゝる増上慢のもの等は、退散したのが結句都合であるぞよ」との事である、此邊てよく心を把住て考へて見なければならぬ、佛はいかなるものでも、又いかなる方便をめぐらしても、漏さず救はんと意なればこそ、方便隨他意の教もこれ迄數かぎりなくお説きなされた譯である、しかるを今この五千人の去るのを、言説にも神通にも之を

遮ることはなさらずして、却てその退去を歡ぶといふは、甚だ平素に似ざる次第である、こゝが即ち實教開説の尋常ならざる所である、既に隨自意の眞法を説くのであるから、衆生の心に順ふ必要がない、のみならず此點では衆生の心を定規とすることは大の禁物である、隨自意の教法は、實に万世不變の大道を立て、佛の眞面目を光顯するものであるから、一時の進退の爲に、万世の大道を犠牲にすることは出来ぬ、爾前四十餘年の經教は、一切隨他意なるが故に、一時の作用化益は有つたに相違ないが、決して万世の法といふことは出来ぬ。

増上慢とは那物かといふに、未だ得ざるを得たりとおもひ、未だ證せざるを證せりと謂ふ所の没平準をいふのだとある、這いふやからは何の世にも澤山あるのだ、末法の今日は尤も繁殖して居る、定めし此五千人が産擧げたのであらう、必ず正法を聞くまいとする、必ず正法を妨げやうとする、「而かも此經は如來の現在すら猶怨嫉多し况や滅度の後をや」といふ經文(法師品)に準ずれば後の世ほど多いといふことが解る、いま隨自意の正法が顯はれる矢先きに、此尋常ならざる事が起つて、先づ其法の尋常でないことを證據立てた、佛のお辭も隨つて嚴い、退

亦佳矣……二十八品中「矣」の字を置いた處は此所ばかりだ、羅什三藏も大に考へたものと見える。

迷つたもの、團結が世間で、悟つたもの、靈塊が佛だとすれば、無論何事にもソリの合はぬ筈だ、その佛の眞面目といへば、全く凡夫の思慮と正反對にして、水火の相異なるが故、兎角衝突は免れないのである。

法華經所詮の眞理と、その能詮の經教とは、明確に佛の自白によりて、隨自眞實の教法である。と定つた、後世のものが、いくら不服でも仕方がない、それが嫌なら佛法外に立つべきである。苟も佛を奉ずるといふほどの者が、此點に彼是はない筈である。

既に隨自眞面目の教法とあるからは、勿論凡夫の情は少しも問ぜない、ナゼ問ぜない？、といへば、凡夫を佛にする法だからである、四十餘年の諸經が、隨他意の方面に立教して、徃々凡夫の情を斟酌して説いたのは、未だ人を佛にするどころでなく、凡夫的習慣（即ち煩惱）の種々なる方面を攻撃する必要があるから、權謀を以て凡夫的感想の或る點を利用して、種々の

變則悟道を開示したのである、所謂神を拜する代りに佛を拜させ、天國を信する代りに極樂を示すが如き、皆毒を以て毒を制する活手段であつて、所詮は永久的又は正式的立教ではない、故に隨他意教といひ、未顯眞實といひ、無得道といひ、永不成佛といふのだ、夫を爾前の諸經が無得道といふのを聞いて、不思議に思ひ居る世の佛教學者は、根本から、釋尊を馬鹿にして居るのである、這な人に佛敎の大部分を持続せられて居るのだから、佛法も眞の直打を發揮することが何時までも出來ず、國家人類は無殘にも救はるべき佛敎に却て害せられて居るのだ、想

ひ到るごとに寒心せざるを得ざることである。凡夫の情に應合して説くのは、結局それを正反對の方面に誘致する準備にして、一種の手段に過ぎないから、方々に眞面目を彰はすべき時を得た曉は、之を打破して眞敎に向はしむるは當然の事で、隨つて未熟不了の少部分のものには、自然氣に入らぬ點があるも是非がない事である、人情に違ふからといふて、それを恐れて居ては、いつまでも眞實の法敎を説くことが出來ない、爾すると佛はたゞ虚妄をつきに世に出現したばかりのものとなつて、何の功能もないのみ

ならず、人を誑かす罪と、法を悖む罪を得て、惡道に墮つることであると、釋尊自ら仰せられた、經に

「若し小乘を以て化すること乃至一人に於てもせば我は則ち慳貪に墮ちなん、この事はさだめて不可なり」

とある、小乗とは法華經以外の未顯眞實の方便經をすべていふのである、慳貪とは惡道の業因である、不可とは地獄の異名なりと釋されてある。

前々もいふ通り、釋尊の本意は、萬世不變の眞理を開示して、一切群類を救濟すべき、唯一の正準を建て、後世の一切人類万物を導くにあるのだから、實に佛在世よりも後の世が大切だ、その中にも正法時代の千年よりも像法、また像法時代の千年よりも末法、末法時代の中にも末の末ほど佛の心を注ぐ所であつて、今は末法に入つて八百年も經つて居て、五箇の五百歳の豫記さへ過ぎ去つた今日の事ゆゑ、いよ／＼ますます佛の純正教法たる、佛教々理の中心たる、唯一救世の妙道たる、本法の妙義でなければ、世も人も救ふことが出來ないのである、篤くい

へば釋尊の出世開教も、即ち遠く今日の爲であるといふべきで、その本法たる法華經の法門が時節到來して出現するか、天然作用で出るか、人爲的作用で現はれるか、根があつて出るのか、偶然に出るのか、問題なのである。

法華經の文字はむかしからある、天竺の貝多羅葉に傳へられ、山から山、海から海と、所々方々へと傳はつて、西洋にも入込めば、支那にも入つて、諸國の言語文字につゞられて在る、すでに天竺にも法華經を論解した人が、龍樹、天親等の論師をはじめとして、すべて五十人もあるといふてある、支那には不幸にして天親菩薩の『法華論』だけしか傳はらぬけれど、一般大乘學者が重きを置たといふのは事實である、支那にいたりては尤も盛んに賞用したことがある、然るに是等は、すべて未だ法華經の眞意を得て居ない、一言にいへば、文字の法華經又は理屈の法華經であつて、意の法華經でない、實物の法華經でない、夫れといふのも、未だ眞の法華經の入用の正時節が來らぬゆゑである。

眞の法華經とは何なるものだ？

法華經の經文に異りはないが、魂ひが違ふ！即ち佛の魂ひを入れて見た法華經と、その見る人たちの魂を入れて見た法華經との大相違がある、佛の意の通りに見るといふのが、法華經の文底秘沈の正義である、それは理屈や文字の考へばかりで澄して居る連中には金輪際判らない。至大なる眞理は、至大なる慈悲と同化する事、眞理たるものは、思念言説の上で果て了へば、一種の空想的理境に過ぎない、これが恰當の慈善力と同消同化した上から發した、絶大無限の勢力といふものに成つたとすれば、何ものかに現れ出て、臭ひがするとか、聲がするとかせんければならぬ、死んだ理屈ではいつまでたつても人を救ふことが出来ない、生きて働くものになつて、天地法界の理法道教の活標準となり、原動力となり、中心勢力とならなければならぬ、爾なるのが眞理そのもの、性分でもあるし、又その時機でもあるし、さては末法の世に、末法の人を救ふ爲めにとて、佛の特に説き出したまひたる法華經が、末法の救世主として

特に降せる大菩薩によりて、文字、理解、紛諍、模索の、分域をはなれ、直爾に久遠の天音をもらして、此日本國に應生した、これが法華經である、いまだ見たことも聞いたこともない眞正銘の

活きた法華經

である、それを「末法の大導師」といふのである、勝れた人傑が現れ出て一の教宗を弘めたものだらゝに考へては大違ひ、この末法の大導師の尊とさが知れて來ると、國も人も夜が曉ける、一分は一分、一寸は一寸だけ、その知れて來る度合の大きくなるだけ世界も明るくなるのである。

乃て「末法の大導師」といふ名稱に付て、一通り解釋を施して置かう。

末法とは時の名

である、即ち滅後の三時といふて、正法千年、像法千年、末法万年、といふ其の末法のことだ、正法時代とは佛在世の直次であるから、佛法も満足に修行するものがあつて、かたの如く證人もあるのて正法といふのである、像法時代とは、又其次の千年間をいふので、その正法が衰えて来て、外形ばかりが現存して居るといふので像法と名けたのである、末法の時代とはその次であつて、いよいよ像も類れ作法も變じ、修行する人も證人もなくなつて、只教ばかりが空しく世に残つて居る時であるから、末法といふので、末とは微とも無ともいふて、衰滅を意味したる言辭である、初て三時の中、末法が一番悪い時代で、人氣も類れ、機根も劣り、人情も輕薄になり、諸の病は殖えて来る、身體までも衰へて或は病身或は短小、天地萬物悉く惡因縁の方針に傾注して居る、至て危険な惡世である、故に教法も一通りの事では、とても効がない、それゆゑ末法の時代に適合した最上無類の教法を選んで、是て末法を救へよと留め置れた經法が、即ち比びなき末法の名教であつて、その經法に依て世を救ふ教主が即ち「末法の大導師」である、大導師とはこの險惡の路を案内して、大安樂淨妙の境界に連て往く人とい

ふとである、末法の時代を通じて、後にも前にも只一人より外に無いのである。

末法といふ時代は既に險惡なる時世で、人に病が多いのであるから、先づその病を考て見なければならぬ事である。

病とは常を失したことである、有るべき通りに無い、爲すべき通りに爲さないのは皆病である、心の病は八万四千、身の病は四百四病といふ事がある、追々繁殖して来るから、身心ともに幾ら増加するか判らない、その中で身の病よりも、心の病の方が厄介が多い。

心の病とは煩惱である、煩惱とは本心を昏まし煩はして、いろ／＼の惱みを生ずる病といふことである、是には種々の階級分別があるが、其の本は無明といふのである、無明とは天地法界と同一化すること能はずして自ら別のものと思ひ初める迷ひをいふので、その無明の惑元ともいふべき最大根本を、元品の無明といふて、本法に違ふ心で、これが即ち謗法罪の根元である、

その「元品の無明」が一つ生ずると、恰かもコレヲ病の微菌の如く、いつとなく忽ちに殖えて、限りなく猛勢を逞くする、それからといふものは、あれにもこれにもと支流分張して、種々様

々の迷となりて、八面黒闇の煩惱園中に陥るのである。

煩惱は時代を問はない、また人物を問はない、いかなる時でも又いかなる人にも有る、が、世が末になると煩惱的勢力が強大になる、トイふは、見るもの、聞くもの、寄るもの、觸るもの、例すべて煩惱に便利の宜いやうになつて居る、社會の現象もすべて煩惱化して居るのである、例へば同じ武器でも、弓矢はどこか君子的であるが、鐵砲と來ては全く殘忍の極である、是れ煩惱的進歩の現象である、しかし世界中が大砲小銃であるのに、我れのみ獨り弓矢で通すといふことは出来ないから、こちらも此と匹敵し又は超過する工夫をせなければ、身を護ることも國を護ることも出来ぬ、世間の惡に靡かぬ側のもの迄が、この世に立つかぎりには、心になくとも矢張世間の

煩惱的進歩の潮流

に順はねばならぬことであるから、まして惡を本分とも心得て居る族は、いかにもして作惡の

工夫を練ることである、故に學術工藝の進歩は、一方に國利民用を興すと同時に、一方には常にあまたの惡事に便利を與へて居る、畢竟煩惱的勢力の強大なるが爲め、諸種の勢力を併呑して、皆この煩惱に消化して仕舞うのである、古昔は政を爲すに徳を以てするといふたのが、今では各國ともに、政を爲すに私を以てするといふ傾向になつた、内治でも外交でも、つまりが他人に不便不利でも、己れに便益あるとの爲には替えられぬ、己の勝手の宜い事になると、公德も公義も義理も人情も顧みない、神だの教だのといふた處が、夫は天氣の佳い日曜日だけで、喰ふと喰はぬの境になれば、神も天もあつたものではない、况や神の子や孫などは都合によれば夜食の菜にもする、宗教でも政治でも學問でも技術でも、煩惱界に生れ出たるものは、總て煩惱の一族である、煩惱の爲に忠實を竭さんとするは是非に及ばぬ事である、その煩惱の全盛時代を指して、末法といふのだから夫で考へられもする筈だ。

經文に五濁の惡世といふことがある、劫濁、煩惱濁、衆生濁、見濁、命濁の、五ツである、この五ツの尤も盛んなる時が即ち末法だ、今假りにその中の煩惱濁の一を擧て話したのであ

斯る濁亂の時代には、抑いかなる教を布き、いかなる化導を行ふて宜きやを研究して見ると、到底普通の平凡療治や、平凡薬では効能が無い、必ずや起死回生の大良薬、明鍊善治の大良醫で無ればならぬ、所謂病輕ければ凡薬、病重ければ仙薬を要するの譯である。

既に末法は煩惱全盛時代であるとすれば、この煩惱をいかゞ處置したら可いかゞ問題である。煩惱を亡くして了う乎、煩惱を壓へつけて了う乎、將た煩惱を轉化するか、利用するか、此考案一つで一切經の用捨も、やがては定まるのである。

夫れから煩惱を處するには、煩惱を研究することが深到でなければならぬ、煩惱の取扱ひが下手ならば、つまり煩惱に降參するやうなことが出来る、譬へば醫師が藥理療法を知ると同時に病理をも究めねばならぬと同じことである。

物には本末がある、いくら末に詳しくても、本が明了でなければ理りが付かない、煩惱にも本末がある、其本を押へなければ、どうする事も出来ない、本とは前にも言ふた無明である、無

明の中にも元品の無明といふが、究竟の本である、その又本の本ともいふべきは何だといふと、その相手の本法である、その本法に外れ始めたのが(謗法)迷ひの發端、一切煩惱の根元だとすれば、その所迷の體こそ根元中の根元で、これさへ捕らへて仕舞へば、一切埒が明くのである。

本法とは妙法である、即ち妙法に同くと異くとて、迷ひと悟りの途が分れ、善と惡との界が立つのである、して見れば、妙法の大教を以て煩惱を處置せざれば、いつまでも煩惱の始末が付かぬわけである、されば佛在世にも、未だ妙法をお説きなされぬ間の事を、「是故に衆生の得道差別して、疾く無上菩提を成ずることを得ず」と仰せられたことがある、即ち煩惱の眞處置が付かぬからである。

後の世の末法今日でも、無得道の教法では所詮何の効もない、否、末法今日は殊更爾である、正法、像法、時代には、たとひ無得道の教法でも、徳本が銘々に幾分かづゝあるから、教法を肥料ぐらゐの効にしても、ずん／＼持前の佛種を育て、往く邊もあつたが、末法となつては、

佛種が劈頭で無いのである、新たに佛種を植えなければならぬ始末だから、種を吟味しなければならぬ、肥料は種でない、犁鋤は種でない、夫を種といふ大事を忘れて、只耕せば農事だとのみおもふ愚人は、百年たつても千年たつても收穫のある筈がない、夫と同じことで、教法でさへあれば、佛經でさへあれば、何んでも同じだと心得て居るやうな迂濶者流が、世間一般に多いのだから、日本國の光輝も、佛法の眞實義もいつまでも彰れない筈だ。

末法應時といふ事のいかほど尊重なる問題なりやは、今日の佛敎家に忘れられて居るのである、少く末法といふ事に眼を注げたのは、眞宗の一派である、けれども、是は時世に重きを置いて、佛敎を時代の犠牲にしてしまったのである、即ち時代にさへ適當すれば、佛の本意は何でも宜いといふのだ、それだから困る。

世が末になつたといふのは、道法理義の正面から見えていふ事であつて、一面から觀察すれば、衰微どころではない、却て進歩して居るくらゐのものだ、それが證據には、善でも、惡でも、むかしよりは巧みにやる、盜賊も詐僞もむかしよりは器用になつたし、又慈善などもむかしよ

りは進歩した邊がある、たとへば赤十字事業の如き、各種災害の救濟運動の如き、皆むかしに立勝つた振舞もある、夫はどういうものかといふと、畢竟、むかしは萬事が率直でむきだしてある、今日は萬事理屈の篩にかけて、體裁をよくする風がある、それといふが時世の積累につれて、各國ともに種々の智識を増殖し交換して來た上に、自他の經驗が長じて、無論古人よりは利巧になつて居るに相違ない、處てその利巧になるに就ては、大分資本が入つて居る、その資本の入れ方が太だ剩過して、差引大損耗をしたのが即ち末法であるから、悪い世の中と判ずるの己むを得ざるに至つたのである。

資本とは、人間の本性眞情である、古人は實に羨しい、讀む書物の數も少い、研究すべき歴史もまだ長々しくない、すべて社會の事物が、今のやうに複雑繁紛を極めて居らぬから、少々の學問で濟んで仕舞う、それゆゑアトの全力は一切工夫と實行の方へ向けることであつて、學問や社會の爲めに、痛く性情を害することがなくてすむのだから、性も全うし得る上、情もなだらかに、こせくせず、よろづ寛厚純朴である筈サ。

今の時世で見ると読む書物ばかりでも、日一日と殖えて来る、末になればなるほど、歴史は累重して来る、研究すべき事項は山の如く海の如くあつて、到底一生涯に始末のつかぬ位なのを、左やら右やらして眼鼻を明けなければ世間が通用しないから、兎の河渡りほどにも耳にか目にか入れて置く、その内には社會的業務が四方八面より、瀛車に乗って責めかけて来る、新聞が舞ひ込む、郵便が来る、電信だ、電話だ、火事だ、ポンプだ、金庫の鍵を亡した、符號を忘れ、記憶術の本を煎じて飲め、飲み過ぎたら失念術の本で撫ろ、親父が死んだ、保険金の分配で苦情が出た、裁判をする、新聞に廣告を出す、いもりの黒焼と隣り合つた、乳母が腰を抜かした、小兒が目を眩はした、大砲が鳴つた、ソラ號外だ、朝鮮がどうした、餉がシナびた、大根オロシヤで水になつた、膠州灣が破れた、威海衛へお鉢が廻つた、税を取りに来た、撰擧を頼みに来た、賄賂だ、喧嘩だ、イヤもう實に千狀万態、身體は段々小さくなつて弱くなる、空氣は濁る、風雨は多くなる根氣は薄くなる、壽命は減る、地味は磯くなる、收穫は少くなる、人は殖えて来る、地面は給りなくなる、根性は陋しくなる、物貨は昇くなる、沈靜て考へた日

には、中々やりきれない、是では性も掛じ情も蕩けるわけである。

單純な生活をして居るものは、卒直で淳朴で、どことなく性が澄んで情が篤い、極々邊鄙の田舎の人などには往々ある、然るに複雑の度が高いほど、人は性を汚し情が磯くなる、多く人に接するものは薄情だといふのも同じ例である、なんと末の世といふものは、生れ出たもの、迷惑極まる時代ではあるまいか。

此中での世の始末をつける所の教法、およびその化導法なるものは、先づ深く此時代の弱點を按じ、更らにまた時代的長所を見出して、之を利導することを旨とせんければならぬ。

所謂煩惱的進歩の時代たる末法の世に於て、その眼目となり、橋梁となり、船筏となり、柱となりて、一切世間を根本より救うといふには、その煩惱の本躰に向つて、直爾に開顯を下した最眞至實の教でなければならぬ、煩惱を怖畏してそれを厭離せんとのみつとむる權教では、とても此處置がつけきれない、のみならず煩惱を破壊すれば、國家も人類も共に破壊しなければならぬ、國家も人類も一切煩惱で持つて居るので、煩惱を除けば、國も人もなくなる、それどこ

ろてはない、極樂も佛もなくするのである。

何となく出来た天才や偉人を、後から崇めて肩書を付けたのとは違ふ、まだ世に出ない二千年も前から、末法には爾々の者が出て、かくくの法を弘めて、かやうくの閻歴があると、明々白白々斷言豫證して有る處へ、その時代は来た、その人は出た、その法を弘めたその閻歴も符合した、即ち隠もない『末法の大導師』、昭かに此世に出現して、正しくこの煩惱界を處置すべき大秘法を授けられた。

然かも末法的人間が、今日の時代を辨へずして、無理に非末法の教法に稽首するのは、甚だ氣の利かぬことである、又末法的人間がその長所を利用すべき活路があるのに、わざとくその弱點を長養して、おのれと害悪のふかみへ陥入りつゝある世の光景は、なんとした、迂濶千萬な事であらう。

さて末法の名教を服膺せんが爲め、末法の大導師に歸依するのは、やがて人類の本分と、時代の本色と、世界の運命とを、圓滿に自覺昭了することの出来て、國家も人類も最後の問題を

決着すべき運に向いたのである。

時代の依怙

は、即ち國土人生の總ての歸依處である、内にしては圓滿なる理想の準的、外にしては完全なる實行の摸範と成つて、統一的に人類の思想行爲を善導すべき、最高道義の標準、最上原力の樞軸、それが時代の唯一依怙、今の時世にては即ち『末法の大導師』といふものだ。

真軸の無い車は轉らない、主人の無い家は理らない、日月の無い天地、魂魄の無い人間が有つたら如何だ、時代時代て世の中の人情風俗より、理想學見までが異う、隨つて好尚も異へば癖までが異つて来る、いつも千篇一律の紋切型では通らない、しかし理性は千古不變のものだから、古昔の火は冷やかで、今の水は熱いといふ道理は無いが、理性發見の程度、及びその應用にいたりては、いつも同一とはいはれぬ、例へば火力で人造氷を製したり、水液で電氣を起したりするのは、作用の擴張である、知識は新たなる學術を起し、學術は新たなる知識を生

み、互に相幫けて各々その範圍を擴大して行く、それに伴れて病も煩惱も色々に姿を變へ頭を殖やして來るから、ひかしの人は夢にも知らぬ種々なる出來事が發生する、たとへば鐵道が出來た爲め、道中は廢る、旅店は食へなくなる、山の横腹へは穴が明く、火の粉が屋根へ蜚ぶ、あまり便利で國が狭く成つた様な感がある、鐵道往生がはじまる、いろく不都合があるかと思ふと、時間を節し、身軀が樂で、用は早く給りる、入費が減じて經濟を助ける、親の死際に逢へて孝道を補ふなどの便益がある、かやうの利害は、昔時の人の、夢にだも想到し得ざる變遷である、すべて萬事の推移消長に亘りて、無限の活動あるのが世界である。

この世界が結構だと思ふのも迷つた考、厭だと思ふのも迷つた考、只迷ひ方の行途こそ違へ、やはり正當本眞の見地で無いのは一つ、彼の病める厭世主義、浮ける樂天主義、讀ン同士、書ン同士、どちらも恃むに足らぬ。

大破了の後に來る大建立に由て活きた世界でなくては、常住の性命あるものとは謂はれない、煩惱から生れて煩惱を食物として生長した人生は、その根元なり本軀なりの煩惱を餘所事に見

て居るやうな、放心ボンヤリ連中には、到底處置が附かない。

藥は健躰の所用にあらずして、疾の爲に須要なるものであるといふ例から推せば、病熾んなるほど、藥の必要が多いのと同じく、佛は佛法は藥の如く、佛は醫の如し、の藥は、煩惱(衆生は病人の如く、煩惱は病の如し)の病に對して、その多く熾んなるだけ入用の秋であるのだ。

して見れば、佛は末法の爲に出で、佛法は末法惡世の爲に説れたるものである、即ち末法は佛法の正味が、その固有の妙効を奏すべき秋である。

その儘で言へば、末法は無論甚だ悪い時であるが、末法の與に結構なる法があるものと考ふれば、實は仕合せの好いのである。

末法の名教として、唯一正法の妙經を留め、末法の大導師として、妙經の靈氣を行實にせし本化の大士を簡派したる、吾等の大祖、釋迦牟尼世尊は、佛敎を結説するに左の宣言を以てせられた

爾時に佛、上行等の菩薩大衆に告げたまはく、諸佛の神力は是の如く無量無邊不可思議な

り、若し我是神力を以て、無量無邊百千萬億阿僧祇劫に於て、屬累の爲の故に、此經の功德を説くに猶盡すこと能はじ、要を以て之を言はじ、如來の一切の所有の法、如來の一切の自在神力、如來の一切の秘要の藏、如來の一切の甚深の事、皆此經に於て宣示顯説す、是故に汝等、如來の滅後に於て、應當に一心に受持し讀誦し解説し書寫して、説の如く修行すべし。是は釋尊が一代の群經を結局して、妙經の一要に留め、はや此上は末法の大導師を信敬して、その手より、まことの佛法を得よとの叫びである。

滅後と指した其中でも末法！、閻浮提と指した其中でも日本！、佛教の中にも特に妙經！、本化の中にも特に上行！、その人と法と國と時と、一厘でも尺度の狂はない處で、道理と文證と現證との三つが具備して、人、法、時、國、同躰一致の上に成立つのが、人天の眼目、國家の精神たる、「末法の大導師」である。

末法の大導師の大福音を宣傳するのが妙宗である、是れが日本國の宗旨、やがては全世界の宗旨として、人類の最後結局に同歸遵奉すべき、天地間唯一の宗教である。(竟)

世界統一の天業

田中智學居士述

世界統一の天業

(宣勅皇天武神)

(經華法)

(判妙聖大迹日)

皇祖皇考乃神乃聖積慶重嘔多歷年所自天神降跡以逮于今一百七十
九万二千四百七十餘歲……昔負日神之威隨影歷躡如此則曾不血
刃必自敗矣……上則答乾靈授國之德下則弘皇孫養正之心然後
兼六合以開都掩八紘而爲宇不亦可乎……以恢弘天業光宅天下

強力轉輪聖王欲
以威勢降伏諸國

月は西より出て東を照し日は東より出て西を照す佛法又以て是の
如し正像には四より東に向ひ末法には東より西に往く……天竺
國をば月氏國と申す佛の出現したまふべき名也扶桑國を日本國と
申す豈聖人出たまはざらんや……一闍浮提第一ノ本尊可レ立此國

(11)

天地一字
人道無貳
積功維聖
累德維神
一貫三才
光宅六合
肇國立德
萬世一君
神統養正
靈武摧邪
惠日重暉
衆罪露消

序 言

人類究竟の平和は世界統一に在り。先王古聖、之を理想として、人道の歸着を教ふ。然るに、世の澆漓となるに隨ひて、人心いよいよ輕浮となり、深く思ひ篤く索るの志なく、淺薄虛街、天下風を爲して、滔々邪渦に入る。此時に譬りて、苟くも世を濟ひ生を利せんとせば、高く道の木根を掲げ、深く理の醇要を罄して、以て直爾に人心の底本を拓き、思想を精化して、其本を覺知せしむるより急なるは莫し。人生究極の幸福は、此土をして諸の禍患より離脱せしめて、事理俱に安穩常樂の境と爲すに在り。大日本の帝業は、事實の上より、これが端を啓きて、人類省覺の時を待てり。此大理想を醇化し、法界圓融婆娑即寂光の真理を人生に縮寫して、宇内統一の教旨を建て、以て日本建國の天業に入眼したるものは、末法の大導師日蓮偉聖これ也。あゝ神武聖帝、戈を以てこの大猷を地に播きてより、茲に二千五百有餘歳。日蓮聖師、筆を以て宇内統一を大虚に印してより、既に六百有餘年。明治の昭世は、寔に斯れ日本建業の眞意を世界に發揮すべきの秋なり矣。宇内の民庶それ疾く醒めよ。日本國民それ大に奮へよ。天統の聖主、威容儼としていま地上に立ち、聖師の梵音風く既に天空に震へり、光明必ず是處より發せん。

明治三十七年四月廿一日

著者誌す

世界統一の天業

田中智學述

予は日本人である、然れども偶々此論述を爲すに當りて、みづからの日本人であるのを遺憾とするのである、故に是より暫し日本人たるの資格を離れ、世界人類の一員として、世界人類の最終希望を代表して、人類究極の幸福の爲に、一の大福音を宣傳しようとおもふ。

(一) 危険の世をいかにせむ

人々よ、世界は大いといふものゝ、無限の天象空虛より見れば、その中の一粟粒塊ではないか、その一小塊の中に、煩はしくも多数の國があつて、各々その存在の爲めに利害の衝突を來し、朝に十露盤の上で争ひ、夕に砲を磨き劍を研ぎ、只の一日も奥底なく肝膽相照しての睦を爲すと能はざる、地上列國競争怖畏の状態は何事ぞ、山に劃られ海に隔てられた小さな區分の中に

(11)

蝸牛角上の小天地を占め、その一小部分の姑息的平和を求めて、姑息的に安堵を得ても、あの
れを載せた地續きが、何時破裂するか知れぬといふ危険の塊であつたならば、結局人は
大不安の状態に坐して居るので、譬へば今にも頹れ裂けんとする噴火鳴動の山に、一刹那の静
止を貪つて居るにも似た、危うき運命に坐して居るようなものでは無いか。

斯の如き世は、いつまで吾人々類の忍耐し得べきものであらうか、人は平安を欲するといふこ
とは、殆ど天然の性であるにも拘らず、一方には猜忌攻伐の猛火斷えざるはいかん、蓋しその
欲する平安といふものが、單に利害の標準より打算し來つたものであつて、人道とか正義とか
天理とか至徳とかいふような處から割出したものでないから、口では平和とか幸福とか、互に
紋切形のように、表面を裝飾して、これに文明と命名して、果敢なくも無主義の御座なり理屈
を交換して居ても、その内面には轉々なら食はう、どころてなく、機會があらば突飛ばしても
食はうといふ、恐ろしい、禍心を包藏して居るのである。

今の地上に、若し平和があり道理がありとすれば、それは眞に平和や道理が成立安住したので
はなく、貪慾蠻行のしほし休止した間をいふのである、不道理世界の息繼に道理の合の手を
用ゐたぐらゐの事である、やはり世は依然として、鬪諍猜忌の噴火口頭に据えられてゐるので
ある。

世界といふものは、どこまでも是れて終るのであらう乎、それなら眞に情けない極みである。
それとも天然にか人爲にか、さういふ病患を除き去て、人類はすべて人類の道に一致し、相
敬し相樂みて、永久諍ひ責むることなき、眞の平和光榮の中に止息することの出来るものであ
らう乎、若しありとすれば、吾人は吾が生と共に、之を樂ひ望みて、其處に達すべき途を求め
ねばなるまじ。

(二) 須らく根底ある平和を要めよ

世界の平和よりは、先づ一身の幸福をいふか、一身の幸福にも根がなくてはつまるまい、世
界に平和の常なければ、一身の安寧幸福は根底より成立たない、姑息的幸福は、つまり一種の
禍である、禍の上に立て、その禍を自覺しないのは、眞に危険の大なるものである、それ

(四)

(五)

を苦にしなすのは、つまり「辛さを蓼葉に習ひ、臭さを糞厠に忘れた」のである。
人として最終安全の幸福が當然必要であると共に、世界としての真相から言っても、永久なる
平和に到着すべきが當然である、よし世界は亂れのみが天然であるとしても、人類が意味す
る世界は、人類の望むようでありたい、又あらせたいのである。

(三) 世界はたゞ一國なるべし(世界統一)

扱て然らば、いかにして、世界に永久の平和が成立し得るかといふに、それは外でもない、世
界を打て一つの國とするのである、元來世界の不安は、國と國との衝突から起るのである、故
に平和を保つには、先づ衝突の原因を除かねばならぬ、さうするには國と國との區別を拂はね
ばならぬ、各國個々の自立存在は、即ち區々利害の存在である、利害は互に一致しないから、
やがて衝突となる、衝突又衝突、不安又不安となるのであるから、眞以て平和を望むには、
先づ平和を齎すべき危殆の因を除くのが順當である、さうするには、諍の原因たる國の區々存
在を拂ひ、世界を打て一つの國家と爲すより外に術はない、……然し、それは果して出来る

であるか否か、ひかしより左様の考を抱いたものは、いくらも有るようだが、事實出来ない、
歴史は今にその不可能を證して居る、つまり言ふべくして行ふべからざることではないかとい
ふ、あやふみが、誰にもあるとおもふ、處が決してさうでない、必ず出来ることで、尤も爲
し易いことで、しかも然か爲すべく、事實の端緒はすでに開かれて居て、一步一步とそれに進
み行きつゝあるのである、世界は世界自身の運命として、おのづから世界統一の準備を整へて、
人類のこれに對する研究と實行とを待て居るのである、要するに人類みづからが、その天數を
覺知せずに居るから、誤想失計相續して現れ、我れと患を醸し、禍を造り、恐れを生みて、自ら
傷つけつゝあるのである。

(四) 世界統一の實行者と指導者

若し天の歴數、既に早く世界統一の方針に向ひつゝあるといふことを知つた時、人類は即ち統
一事業の執行者たるの一員であつて、その大綱則の下に歩調を整へて進み行かねばならぬので
ある、天然は既に天然の實行者を産したから、人類をしてそれを覺知せしむべき指導者がなく

てはならぬ、乃神の實行者と、乃聖の指導者と相呼應して、天理人道の靈活なる一致の下に、始めて強大の力を造り、その契合は理想となり、その理想は事實の牽引力となり、やがて事實の實現となりて、遂に天運人道の究竟に至るのである、その指導者とは何ぞ、文冠したる聖人である、その實行者とは何ぞ、武装したる聖人である。

(五) 天意より出でたる統一主義

若し世界の統一といふことを以て、『強いものが弱いものを壓し、他の利福を奪て、おのれ一己の幸福とするの謂である』と解しては、大騒動である、世界はいつも爾いふ考の上に立て居るので、諍ひが絶えないのである。

今予がいふ所の、世界統一といふのは、人慾の勝手から打算しての統一でなくして、天意から來つた統一である。

天はみづから統一を行ふに就て、天意を全ふすべきやうの、順序方法に於て、統一の途を立て、故に人類は天意を體し天意に服従する心の起つた時、即ち天然に於ける統一を人類の

事實とすることが出来るのである、即ち利害思想を離れた、高い潔い堅い根底の上に立てられた、道義的統一である。

(六) 道義的統一の要旨

道義的統一とは、どんなことかといふに、公明正大、天の私なきが如き、神聖なる道念を標準として、その光明の中に人生を安住せしめ、その威力の下に人類を善化して、知らず識らず帝の則に従ふといふような工合に、世界を擧げて一の巨大なる公人として、天の高大と、地の巨大とに配し、天地と共に運行して、理に安んじ、義に依り、道を行ひ、諸の禍害危険より脱離して、永遠不朽なる平和と光明とを、地上に現出し様といふのである、この大標準の下に歸し集りて、彼の區々紛々たる思想が蕩然として拂はれ、人類のすべてが、この光に浴し、この力に服する時、正しく世界は靈的に統一せられる、これを道義的統一といふのである。

而してこれが實現に付いては、元來人類は平和の希望者ではあるが、希望者其みづからが類を殖して、遂に一致するといふことは、容易に出来ない、人間の壽命がそれまでないから、その

内に種々の障害に遭遇して、目的を貫くことが出来ずに了らう、故に天は先づその實行者を生じて、人類の趨歸すべき目票とした、實行者は即ち天に代りてこの福音を首唱したものである、けれども皮相からのみ視ては、充分に覺知しがたいから、實行者に次いで、その指導者（即ち宣傳者、解決者、説明者、教訓者）を生じた、然る上は結局人類は一齊にこの實行者指導者の下に趨歸して、これに同化して行くのが、人類幸福の最大方針と定つた。

(十)

(七) 世界統一の實行者とは誰ぞや
世界統一の實行者とは、日本國に王統を垂られた、神武天皇である、神武天皇の洪猷は、世界各國の王者の中に於て、特に秀でた、尤も鮮明なる主張によつて、國を建て統を垂れたのに在る、而して常に理想の深淵廣大なるのみに非ずして、實行上に於ても世界唯一の成功を立證して居る。

遠の累徳」といふ基礎の上に立ちて、「永遠の積功」といふ活動を意味したのである、「重暉」は天の徳で、天象の第一顯著なるものは「日」であるから、「日の理想」を以て明德を表現して、祖神を「日神」と爲し、國を「日の本」といひ、男を「日子（彦）」といひ、女を「日女（姫）」といひ、日に向て統を垂れ、日を負ひて敵を征する等、すべて「日」を表式とするのである、又「養正」は、地の徳で、地の顯著なるものは「山」であるから、山の理想を以て含養長養の功を表現して、國を「やまと」といひ、名を「神日本磐余彦」といひ、遂に日本の字を「やまと」とさへ訓ずるに至つたのである、後世の思想にも、「日出國」といひ、富士の名山を國の姿と渴仰するがごとき、自然と「養正、重暉」の國粹を味解しての國傳である、「重暉」の意と「養正」の心を調和した上の活動は、斷である、正である、理である、治である、即ち天の徳と地の徳とを一身の上に躰達した人である、器で表すれば「劍」である、天は「鏡」で、地は「玉」である、三種の神器は、この理想の表式である、この天と地の中和を人と爲して、こゝに法界の大文は織成されて居る、故に天地人を貫て一道と爲すべく率先實行して世界經營の票準となるものを「王」といふので、

(十一)

夫れは道を以ていふ王である、只一國の主権者を王といふのは、全く意義を異にして居る、道の實行者として認められたる主権者といふことである、故に王の字も三を縦に一貫した形になつて居る、「三才を貫くを王といふ」と訓へられてある、上の一は天で、下の一は地で、中の一は人である、それを縦に一貫して、この三つが離れくにならぬように融合一致せしめて、一の大なる道徳的主力となるのが、三才調和の實行者たる王といふのである。

(十二)

天
王
地

中央を貫きたる一は、神(神とは道の体现者)

横に長さものは「廣」を意味し、縦に長さものは「深」を意味す

「廣」は大也、博也、昧也、物也、世也、

(横とは一、縦とは一)

「深」は遠也、久也、徳也、力也、位也、

若し試みに上の一と下の一を除けば、中間は十字の形を爲す、十字形は、是れ交叉相渉の義である、調和の姿である、相入相持の意である、即ち人中の主力として有道の君を要し、以て天地の徳に一致すべく建てられたものである。

十字は満數を意味して、具足の義である、數の終てあつて、亦始である、終が始に還つた數の形である、實數は九で終るのであるから、九を「きはまる」と訓むのである、それより復の一となつたのを十といふ、十は「かさなる」の義である、百も千も萬も億も、皆すべて十の層複したものである、故に萬法具足して缺減なきの相として、佛は卍字を表徳とする、卍(萬字)は即ち十である、十の運動した姿である。

直張形



その運動形



直垂形



その運動形



(十三)

右の①と③は理である、②と④は事である、事は現象の事實であるから、活動の相を示したもので、この活動相が、即ち卍字である、即ち具足充實萬法活動の姿である。

(十四)

卍字構成



卍字圓觀相



卍字方觀相



圓觀したものは、融の相て方觀したものは、正の相である、正は止、融は動。

即ち⑤の構成が、その端に於て、おの／＼趨進の勢を示して居るのは、進取活動の相、向背相接し、進行至り究るの極終に一圓形を爲す、即ち⑥の圓觀相となる、これは天の象で隨緣眞如の表式である、若し其の趨進を休止すれば、⑦の方觀相となる、これは地の象で不變眞如の表式である、畢竟圓中の方あり、方中に圓ありて、觀察の票準次第で、いづれの面をも見得るの謂である、要は方正至大の理と、その圓滿活運の事とが、一相に具して居ることを曉らむるに在る、これは「十」を中心から見たのである、若しこれを外端から見れば、四方となる、即ち

上下左右の四である、日の中心に望めて、東西南北といふので、更に之を層複すれば八方となる天にも八方あり、地にも八方あるが故、これを交層すれば十六方を生じて、上下の八方歛滅なくして、終に内周外圓の相を成ずるのである、今試みに圖して見ると

十字重複八方を生ず

十字四複十六方を生ず

全上運動形卍字四複



四方四維



天地八方



天坤の運動

(寶輪)

(草菊六十)

⑧は方の正と潤とを併せ數へた姿で、四方と四維との八で八方となる、周易の八卦などは、この形から推して、事物の理を究めようとしたものである、更に天地の交映相成から、地にも八方があれば、天にも八方がある、苟くも物象のある處は、必ず方角を生ずるのである、而してその方相は、亦必ず對位がある、今天と地とは正對位であつて、象々相對し、性理相通じて居

(十五)

るから、之を天地の中心太靈より見れば、天地同一體である、故に之を一具して、十六方の形を成する、即ち⑨の輪寶形である、是れ天地と同躰一致したる、徳の圓滿によりて、功用力用の發揮したる姿である、多角多面なるは、すべて力の表式である、⑩は、⑨の運動形で、即ち

(十六)

卍字を四つ重ねた姿で、やはり輪寶の様式である。卍字を四つ重ねた姿で、やはり輪寶の様式である、輪寶は轉輪聖王の表章である、轉輪聖王は世界統一の無上王である、日本帝室の紋章に十六菊形を用ゐるのは、恐らく轉輪聖王家の輪寶を花に見立てたものであらう。

卍字の元は、十字である、十字は人と神との交叉である、即ち神人調和の形である、神人調和して始めて靈となる、以て天と地とを接合するから、天地和順し日月晴明に、萬物おのゝ其

所を得て、法界圓滿の大安樂相を成するのである、それが王の字の形に寓した深意である。佛が卍字を表章とし、轉輪聖王が輪寶を表章とするは、いづれも神人の調和、物と靈の調和といふことを意匠としたものである、その功と徳とが、事實に現れて、力となつたものを、世界

統一の王者といふのである。

耶蘇教では十字を表して、教祖遺難の礎柱として居るが、或は偶合ではあるまいか、恐らく印度傳來の卍字を變形した宗教的表章の訛略したもので、偶々それがキリスト十字架の著明なる事實と一混して、その本源を忘失したのであるまいか、若しこの思考にして當れりとするれば十字は即ち卍字と、その表式の源を同うし、又佛相及び輪王の輪寶と同源である。

(八) 轉輪聖王の垂統(日本國に在り)

日本帝室の紋章が、十六の菊であるといふのは、形から比況した見立て、菊花そのものが、日本の風土にも帝室にも特殊の縁故ありとは思はれない、これは印度思想の傳來から出たので、恐らくは古くよりの傳へてあらうとおもはれる、扱てその印度思想といふのは、何かといふにこの人類社會には、太古から世界統一の王家があると想像されてある、それで印度は文物開明の最古國であるから、その事に付ての談話も、比較的印度に發達したのである、それは轉輪聖王といふものが、この世界を統一する王種で、その家系も太古より極つて居て、且つその主義

(十七)

も必ず道德的に世を治めて、非常なる大威力があつて、人類道義の保護者として、王中の王たるものとしてある、その家柄が釋迦種族で印度に存在し、その中から轉輪聖王が出るか、如來が出るかするものとなつて居る、然るに此種族は他種族と違つて、あらゆる人類種族中、最も高潔なる種族で、道義的血性を承けた神聖なるものとしてある、勿論印度に限つたわけではなく太古已來この世界のいづれにか存在するといふ思想である、ところで日本國の祖先は太古印度地方より日本の地に王統を垂れたものだといふことは、種々の方面から立證し得ることゝなつて居るのみならず、現に印度にも釋迦の滅後に最高種族の一團が東方へ移住したといふことが傳説されて居るといふことだ、且つ日本の理想が、すべてに「日」といふことを離れないのと、日に就ての言語が印度と同じであるのと、日を祖神として居るのとは、全く此邊の消息を通じて居ることゝおもはれる。

天照太神の名が、「大日靈貴」といふ古言であるのは、印度語の日を「毘樓」(Vishnu)といふのと同じで、日の神を祖先とするのは、釋迦氏即ち轉輪聖王家の名を「日種氏」といふのと、日本の祖神と符合して居る(此外種々の考證あれども別論に譲る)

即ち轉輪聖王家の垂統が、現に王者として、この世界のいづれにか在るものといふことは、當然の想像である、而してその轉輪聖王の威徳は、輪寶を以て表示されて居る、輪寶とは、一の車輪形の寶珠である、一たび此寶を放てば、大千世界の山河大地は一瞬間に平らかに均らされて、土石高低穢惡の諸形を一掃するといふ、非常なる威徳力あるものといふことを意味されて居る、故に轉輪聖王家では、この輪寶を表章とすること、猶佛陀の輪寶相と同じで、佛陀は出世間的に大徳を表し、轉輪王は世間的に大徳の票榜とし、その内容意匠は、一の正しき道に、威力を意味した相である。

正しき道の實行者として、人類に君臨し、萬物をして各各その所を得せしむるといふことは、取りも直さず神の意である聖の業である、この神たり聖たる徳行者が、人類を主宰し國土を經營するといふことを形て言うて見れば、人の上に神を加へたのである、即ち神人調和の相である、して見れば天と地との間にある人の一へ、神統聖業の一を縦に上から貫いた「十字形」の交

又點が、即ち神人一如、天下に王たるの姿、隨て天地を調へて人を天地の靈主と化したる妙形である、その妙形の示す所、即ちその妙義の伏在する所である、天は地と相隣り、人は天地と相背きて、互にその徳を交換し發揚することが無かつたならば、天ありといふとも、地ありといふとも、人ありといふとも、それは只雜然としてこの空間に無意義の存在を爲すといふに過ぎない、斯の如くにして天は災を降し、地は常を失し、人は只天に壓され地に苦しめられ、天地中間の一獄囚たるに過ぎざるものとなつて、此世ながら、地獄修羅の惡境界と化するのである、此に於て天地を調和し神人を感通せしむべき救世者があつて、天地法界の眞如的本能を發揮する必要が法爾的に存し、事實的に出來する、それを神聖といふので、神聖の中にも實行を主とするのが王者で、所謂轉輪聖王で、指導を主とするのが佛陀で、即ち釋迦佛である、而してこの神聖は、根源同系で、一の道義的血性より出て來るものであると定つて居る、一は實行を以て歸する所を定め、一は教法を以て歸する所を知らしめるといふ役目で、その歸着點といふのは無上の眞理正法である。

天地に對して意義を賦與するものは人である、この意味に於て、人は萬物の靈である、天地自然の意義を解するのは、やがて人それ自身の意義を解する所以である、若し人にして無意義に歸し了らば、天地も亦人の前には常に無意義となる、無意義の物と無意義の人と、何の標準も目的もなく、たゞ空々然として存在を貪つて居るからして、思惟動作の萬端、觸向對面の事物が、一齊に眞に背き正に反して、邪惡盛に興り、猜忌、排擠、反撥、鬭諍、劫略、侵害を究極の業と爲すような慘境に陥つたものである、此邪曲を匡して、天地人類を擧げて惡道苦界より救ひ出さうといふのが、道の爲めに立つた王者である。

以上の敘述で、この世界には必ず有道的統一者のあるべきこと、而してその王統は、轉輪聖王家なるべきことの大躰は、略ぼ解き得たともふ、それに付て、日本國の王統が此神統であつて、世界統一の天命を負ふて居るものじやといふことは、蓋し吾々世界人類の頭上に於ける、尤も大なる問題である。

世界のいづれかに、世界を統一すべき、天運の歸したものがあつて、人類の最大歸着と、事實

の上に表示すべき、世界統一の時節は何時か来るものであるとすれば、それは必ず侵略劫伐の盜賊的統一でなくて、道義的統一であらねばならぬ、但それが世界東方の一角に、小サな嶋國の王統によりて爲されると聞いては、少し意外の感があるかも知れないが、今世界を見渡すに統一の使命を帯びて、四海に君臨すべき資質を十分に具へて居るものは、日本帝統の外には決してないから仕方がない。

(二十三)

(九) 國慾主義的統一論の誤謬

道義的統一といへば、侵略的統一でないといふ意味になる、然らば一向に干戈の力は假らないかといふに、決して爾でない、正義を護持する爲めには大に干戈を要するのである、これ即ち神武である、然るに侵略主義の國でも、まさか露出に斬取強盜を票榜しては居ない、表面には文明だとか平和の使命だとか、甚しきは「神より命ぜられて世界を統一すべき職を行ひつゝある」などト言て居るのがある、即ちロシアの如きは、明かに領土擴張によりて世界統一を遂げんと夢想を有して居る、それは世界の爲めに世界を統一するのでなくて、ロシアの爲め

に世界を統一するのである、予は之を「國慾」と名ける、國慾は即ち私慾である、個人の私慾の

大きく強く結合したものである、甚だ危険至極のものといふはねばならぬ。

此外にも、獨逸主義の、帝國主義のと、愚にも付かぬ統一的梦想を有して居るものが、その主張を開けば、あさはかにも、基督教的文明とか、白人主義とかいふ、手前味噌の腐った、世間見ずの自惚れ頭から割出し來た夢想であつて、根底ある道義の觀念から發生した統一主義でない、謂はゞロシア主義の一段幼稚な不鮮明なのに過ぎない。

若しも世界統一といふことは、只考へるだけのこととて、決して行うことの出来ないものであるといふものがあるかも知れない、それは統一の目的と、その方法いかに因る、統一の目的が、高潔なる道義の上に立ッて居らぬものは、決して成就しない、一時は統一的小成功を爲しても、必ず遂に失敗する、利慾の爲に他を壓倒して得たものは、また他からも壓倒される時が來るに相違ない、朝に東方を略して、夕べには西から侵され、既に西に復讐すれば隨て東から復讐される、一興一廢、一起一伏、いたちこつこ鼠こつこで、先さまお代り、天下は巡り持

(二十三)

の原則に漏れず、世はいつも一つ事で繰返されて、残るのは怨に刻まれた枯骨と、血脈の歴史ばかり、斯ういふ有害危険な統一主義が世に存在して居るといふに於ては、世界も随分剣呑なはなしてはいないか、世界統一にして果して斯の如きものならば、予は世人と共に統一主義の全滅を祈らなければならぬ。

今こゝにいふ、道義的統一なるものは、そんな不精確なものでなくて、理義至正、主義高明にして、凡そ人たるものゝ、必ず趨歸せねばならぬ公義であるのみならず、その遂行に就ても、安全にして且つ精確である、この主義の認められ行はれて行くこと、一寸擴がれば一寸だけ、それだけ光明の分域に入り、安全平和が確保せられるのであるから、私慾より生ずる私怨を結ぶ患がない、尤も一方が正しくても、隻手が解らぬものである時は、私慾私怨はこちらに無くても、彼れにはあるのだが、雙方私慾より出て、互に私怨を醸成するのと違つて、結んで解けないといふような悪因縁を固定せしむることが無て済む、仁者に敵なし、一時は反抗しても、こちらが正しいから、自然勝を占めて、他の慾心もいつか化せられ、私慾も任運に散じて了う

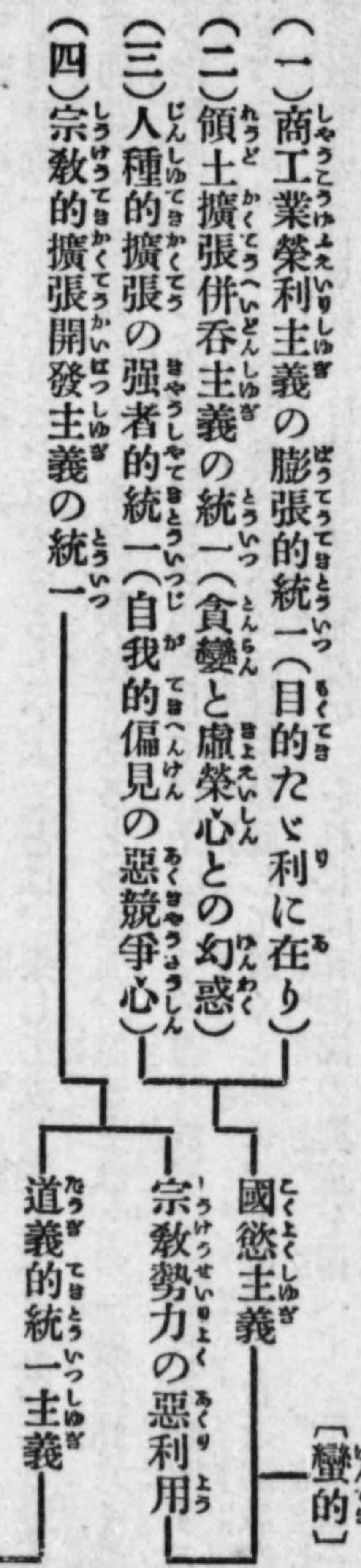
早い例が、前年日本が清國を征伐したのは、正義公道の爲に戦つたのであるから、敗けた清國も怨むといふよりは、懼れるといふ意味で屈伏し、續て日本の真意義が解つて来てから、大に日本に信頼して、その啓發に頼らうといふ好意を持つようになった、これ即ち徳の感化である所謂「王者の師、征ありて戦なし」の理で、箠食壺漿して王の師を迎へる場に至るのである、况や干戈を主とせず、徳教を主とするのであるから、凡そこの徳光に觸れたものは、屈伏でなくして信服し、屈從でなくて歸依するのであるから、主従の關係の上に、父子の關係あり、又その上に師弟の關係ありて、切ても切れない、突ても頼れない、楨でも動かない所の、堅固不朽の親愛が成立して、永久この愛念は滅せずして、其愛念の上に微妙莊嚴の道德思想が植多付けられ、根が張り枝が榮えて、世は光明平和の寂光土となる、これは決して頼れもしなければ、退轉もしない、この勢力は過去の淵源が甚遠であるから、未來の發榮も亦永遠である、かゝる勢力こそ、眞の統一力といふべきであらう。

(一〇) 統一の各種目的

詐力とか、暴力とか、反道義的の勢力を以て、統一の要素と爲して居る今の吞噬主義が、地上に蟠窟して居る間は、道義的統一者も亦已むを得ず干戈を執らねばならぬ、而して詐力暴力の終に成立し得ざることを教訓しなければならぬ、大抵今の統一思想といふものは、富の力とか武力とかを、往止りの理想として居る、富や武力は、正しさものに在りて始めて始めて有用のもの、道義の代表者ならざるものに在りては、全く邪を長じ悪を増す所の誘惑の具たるに過ぎぬ世間の多くが統一の力として認むるものに、種々あるが、概して左の四點に歸するようだ。

- (一) 平和的統一として……商工業的占領を主とするもの
 - (二) 武力的統一として……領土擴張を主とするもの
 - (三) 強者の統一として……人種の勢力を旨とするもの
 - (四) 文明的統一として……宗教勢力を扶殖するもの
- 商工業も可なり宗教も可なりである、領土も人種も主意に由つてはである、單に利益をのみ主として商工業の勢力地を擴げようといふのは、即ち一種の私慾的闘争である、宗教、人種、領

土、いづれも然りである、前の四を分解すると



以上四件の中、前の三は無論私慾的統一で、純道義性の見地より觀る時は、野蠻思想である、縱令文明と稱しても、それは全く假面である、第四の宗教主義に付ては、あのづから二個の相違があつて、一は尤も狡猾なる、偽善的扮装の侵略主義で、宗教を利用して、先づ他國の民心

を溺らし、その機會に乗じて、おのれの慾を遂げようといふ、甚だ憎むべき併呑主義である、たとひ間違ひながらも、宗教に對する觀念が眞面目なら、宗教は邪でも、其心根は惡意でないとして諒察する邊がないでもないが、慾心が主で宗教が従であるから、國敵ばかりでなく、既に彼れ自らの宗教にも罪を獲て居るのである、即ち變的思想の尤も入念なものである、一は眞面目な宗教的觀念より出て、全く私慾的觀念より離れた、一種高尚の道念で、尊むべき思想であるが、只その所謂宗教そのものが問題である、いかなる宗教を以て世界を統一すべきか、又現世界を統一するに宗教を以てするといふことは、果して成し能ふべきものなりや否やも、大切な問題である、然しそれも宗教次第であるとおもふ、然る上はこの一義は姑らく移して純然たる宗教學的研究に附托すべきものとして、予は今この書に於ては、これを論究するの餘裕を有せざるが故に、宗教的統一といふ總躰を是認して置くと共に、耶蘇教や普通佛教などの健全な教では、世界統一は決して出來ない、それには釋迦佛の眞意を傳へて、世界統一の根本義を遺憾なく具備した教がある、それが終に統一主義の實行者と一躰になりて、人類最終の光明を與へるものとして、既に已に宣傳公布せられてあること、併せてそれが末法の名教たる本

化妙宗日蓮主義なることを言明して置く。

(二一) 日蓮主義の世界統一的指導

日を其名としたのは、天照太神と、釋迦佛である、日を理想としたのは、神武天皇と、日蓮上人である、神武天皇は賊を討ずるに特に日を脊負ひて戦ひ、日蓮上人は宗旨建立に、特に旭日に向て題目を唱へ始めた、その名と理想との一致する所、則ち躰徳功用の一致する所で、この四者、いづれも靈的統一主義であるに於て一致して居る。

日蓮上人の世界統一的宣教は、組織雄大、理義嚴密、もとより堂々たる大哲學又大宗教としての宣布であるから、此一小冊子の得て盡す所でない、故にこれは別論に譲り、一言以て其要を擧ぐれば、日蓮主義の骨子は、三大秘法の宗要より成立して居る、この三秘の一たる本門の本尊は、みづから世界統一の票式として建立されたもので、日本の祖神を以て、妙法眞理の奉行者と定め、且つ實行的世界統一者として、本尊の中柱に置かれてある、本門の題目は、世界一

同の思想統一として、一天四海皆歸妙法の大福音と定められてある、本門の戒壇は、律法的に妙法の大道義に聚り、日本を中心として世界の靈鎮を定むべく、事相の戒壇を世界中に唯だ一つ置て、根本道義的唯一制裁を以て、人類を廓清すべきものと豫期されて居る、即ち此三大秘法は、一の妙法を躰として、この眞理正法の躰に契合せる、道義的思想および其實行を、世界統一の洪範と決し、これに符合したるものを日本國と爲し、世界の爲に日本を中心として、正法の建立及び護持を、日本國家の天職と定めたのである。

●●●日の理想●●●



(二二) 先天的統一者

以上論じた所で見ると、道義的統一者といふものは、日本國の王統であると定まるが、他にも道義的思想で世界統一を行ふものが、必しも無とも言へまい、過去に無くとも、未來に出ないとも限るまい、さらば必しも獨り日本王統の專有物とする事は出来まいといふものが有らうも知れぬ、夫に付て何より諍ひ得られぬ一大解決を與へて置かうとおもふ、成るほど道義は日本の專有物でないから、いづれの國いづれの世でも普遍的道義心の、どこかに發生しないと云ふことはなからう、現に今でも我れは神より世界を統一すべく使命を帯びて、天命の歸せる統一者なりと公言して居るものもある、ロシアの如きは彼得帝已來その主張の下に、領土擴張を行つて居る、今の獨逸皇帝が、頃る魯帝を慰問した言にも、「神は我等と共に在り」と曰ふて居る、即ち基督教的道徳が、世界の眞文明だと自惚れて居るのであらう、今かりに基督教道徳が完全なるものとしても、それを以て統一しようといふものが、果して眞摯であるや否やが問題である、猶假りにロシアの國是たる神佑統一論が、不都合の無いものとしても、その執行者

たる魯國の主權者は、果して道徳的に行動して居るや否や、彼の野蠻極つた虐殺や劫略が、な
んで神の道徳であらう、神は一視同仁である筈だ、その神の意を體して世界統一を理想し且つ
實行しつゝあるものが、人種の偏見を基礎とした壓制邪曲はどうである、猶太人を虐殺し、支
那人を虐殺した暴行蠻態、天人ともに怒るが如き振舞はなんだ、あれが神の心か、基督教的道
徳とはさういふものか、常に見常に聞く所の魯軍の掠奪強姦等の暴狀はどうだ、異教異色のも
のにのみでなく、自國臣民に對する壓制苛酷はどうだ、身萬乗の尊貴に居りながら、三度の飲
食にも毒が這入て居はせぬかとビク／＼し、一寸出るにも警戒嚴かに身を警めなければ、吾が
領土宮庭も安堵て歩行の出来ぬといふ境界はどうだ、他を統一するどころの沙汰でないではな
いか、神がロシアに命じて世界を統一させるといふなら、なぜ大切なる統一者を、こんな怖れ
の中に置くか、それとも明かに「他の國を奪つて、おのが喰物にする爲めの統一」であるといふ
なら聞えて居る、苟くも神の意を承けて統一するとか、神の光りに浴せしむるとかいふのなら
ば、その神の光りの本家本元が、第一に光り榮えて居らねばならぬ、所謂神とか宗教とかいふ

ものは果して何か、要するに神に托し、宗教を假りて、おのれの慾を遂げんとする、ゴマカシ
主義なのであらう、基督にして靈あらば、神にして靈あらば、それ之を何とか言はんやである
畢竟いふと、根底が確かでない證據である、凡そ道義の眞實奉行者たるものは、眞理正道の躰
現者である、然らば眞理正道の不滅なるが如く、その躰現者も亦不滅でなくてはならぬ、これ
は理論の決てない、事實の見證である、誰でも諍はれない所で、所謂「論より證據」である。
眞理の不滅なるは、その勢力の不滅なるの謂である、否、吾人はその勢力の不滅よりして、理
躰の不滅を認め得るのである、而して勢力は必ず人に托して彰はるのである、即ち眞理正
道は、その躰現者によりて勢力を光顯し得るといふ道理である、故に一たび眞理正道を躰達し
たものは、眞理正道と共に永久でなくてはならぬ。
その永久の勢力把住を名けて、位といふのである、人間の歴史は、人間の記憶力を限度とした
小規模のものであるから、いつの世でも三千年か五千年ぐらゐの事蹟だけしか傳はらない、年
代の經つに隨つて、先ぐり／＼古い記憶や傳へが亡びて行くから、いつになつても三五千年が

太古のようにおもはれて居るのである、今明治の世も、この後四五千年の未來から見れば、種々の世變の爲め配傳が亡びて、『むかしく明治の時代といふ太古荒蕪な世があつた』と、今の神代の如くに言はれる時も來るのである、所詮個人の壽命の短いのに較ぶから、歴史は久しいやうにおもうのだが、つまり有限のものに違ひない、眞理正道の運行は歴史を超越して永久である、世界の出來ない前があるとしても、眞理正道は存して居るに違ひない、世界の無くなるのちがあるとしても、眞理正道は滅しないものである、然らば則ち眞理正道の躰達者も、亦天地に先ちての壽命があるに相違ない、人間の歴史ぐらゐは何でもないことである、即ちいつの世とも知れぬ時から、眞理正道の存在と共に存して居るのである、その永久永遠久遠の積累した功および徳といふものは、謂はゞ一つの株といふようなもので、途中から他が眞似ようと謂うても眞似ることが出來ないのである、その來ることの久しく遠いものは、その往く所も亦久しく遠いのである、譬へば山の影の水に映するに、山の高ければ高いだけ、水にも長く映るやうなものである、箱根へ登つたものは、有名なる蘆の湖の倒影不二を見たとあらう、之を繪と

(三十四)

しても、山の高量丈水中の影積を有して居る、道義的世界統一といふものは、單に理想主義ばかりでなく、その實行が永久的でなければならぬ、換言すれば、其實行者が、尠くとも人類の發生と共に、若しくは先だつて、既に已に實行者であつて、且つ人類のあらん限りの未來までも、永く實行者でなければならぬ、さういふ實行者によりて、世界は始めて靈光ある統一を成就することが出来るのである、前さにいふた轉輪聖王の王統は、即ちこの永久の位を有した、先天的統一者である、佛も壽命を以て功德を顯はして、久遠實成と



(三十五)

いふことを説かれてある、即ち久遠の因でなければ、久遠の果は無、溯ぼつて永久のものは、流ても永久である、水は山の高サだけの影を印する如く、悠遠の徳が積れて、始めて不朽の王統となるのである。

(三十六)

(一三) 偉大光明なる世界統一の宣言

史を案ずるに、神武天皇は、みづからその祖先を明かして神なりとし、且つ自ら道徳的世界統一の爲に建てられた王統の繼承者であることを宣言せられて、
「皇祖皇考、乃ち神に、乃ち聖にして、慶を積み、暉を重ねて、多く年所を歴たり、天祖跡を降してより、以て今に逮て一百七十九萬二千四百七十餘歳なり」とあるのみならず、みづからその實行の爲めに大に時機を待ち、一朝その時機の到達を察するや、堂々として起て道を布くべく、道統を擁護し、洪業を垂範せん爲に、先づ必要の地點を占領せんとして、日向を出て、大和へ東征をなされた、勿論武力を以て不廷を征したのである、
「法華經」に所謂

「譬へば強力の轉輪聖王の威勢を以て諸國を降伏せんと欲するが如し」

とあるが如く、その「強力」といひ、「威勢」といふのは、道義より發して道義を護る所の正しい力であつて、強奪劫略的の暴威暴力をいふのではない、而して神武天皇が東征によりて、いかなる事が顯れたかといふに、曾て一頁の説明書をだも發表せるに非ずして、道義の統一の高大なる宣言と、其實行の徳相とは、粲然として天の如く、煥焉として天口の如く、明々昭々として、世界歴史の上に印象せられて、些の惑ひなきまでに輝いて居る。
神武東征の事跡が語れる大道徳經は、尤も簡潔明了である、變的劫略の悪風習を打撃して、道義的統治の基を開き、神を敬し道を尊ぶの教として、祭祀を以て政治の根本と爲し、上乾靈國を授けたるの心を躰し、下正道を扶養して、人類を統一すべき洪範を子孫に垂れて、地上億萬年の光明をこゝに發揮したる、橿原奠都の幕開は、取りも直さず世界統一の序幕である。
神武天皇の事跡に於て、顯著なる道義的發表は、その詔勅と行動とを通じて、左の八項に歸するとおもふ。

(三十七)

- (一)「軍を旋して日を脊に負ひたる、日の理想」
 - (二)「戦ひの中に天地神明を祭る」天地一統の理想
 - (三)「無水の飴を以て仁義の軍たるを誓ふ」大平和主義
 - (四)「慶を積み暉を重ね」この靈功至徳實踐躬行主義
 - (五)「大人の制を立る義必ず時に随ふ苟も民に利あらば何ぞ聖の造を妨げん」との開發主義
 - (六)「鋒刃の威を假らずして、坐ら天下を平げん」との平和的主張
 - (七)「天業を恢弘し、天下に光宅せん」との大規模なる統一的主張
 - (八)「天に答へ正を養ひ、然る後ち六合を兼て都を開き、八紘を掩ふて宇と爲さん」との實行率先主義
- 右の中、第一は、日の理想で、我は日神の裔であるから、日の躰と一致せねばならぬといふ高潔正明なる大信念から來つた大道義心の發表である、第二は、戦ひ最中に度々天地の神を祭ると

いふのは、即ちみづからを以て天地と徳を同うしたるものなりとの自信に出で、事々に天理に背きてはならぬといふ至誠の發表したのである、第三は水を用ゐずして飴を造り、それで飴が出來あがれば、我れは刃に觸らずして坐ら天下を平げることが出来る、左もなければ吾が誠意の足りないのであるといふて、飴を造られり、それが出來上つたので、自ら歡んで吾れは我が理想を布くことが出来るものであると、自らも信じ、人にも信ぜしめたのである、即ち道義的統一の思想は、大なる平和主義なることを示されたので、所謂功を天地と俾うするの盛意である、以上は身を以て道義的統一思想を發揮せられたので、この高明なる思想は、次に列叙する所の、偉大明確なる宣言によりて、一層意義明確に萬世に輝いて居る。(已上躬行、已下宣教)

第四「慶を積み暉を重ねる」といふのは、「慶」は慈善である、「暉」は明德である、偶然の發作でない、根底深く、淵源遠き處より發して、萬世不變の主義となり、祖先以來これを血とし骨として、天地と共に恒久なるべく、積み來り重ね來つた不變の徳が、是れ我が王統の唯一生命なるぞといふことである、斯くの如き深遠廣大の祖猷が基礎となつて居る統治者は、渺くとも

この高潔なる大理想だけで、既に六合を掩盡し、世界を統一する天命が歸して居るではないか
 第五既に理想の源泉斯くの如く遠大なるが故に、その流末の變化、自由自在にして、苟も民を
 利し道に合することは、開發、進歩、利用厚生、用ゐざる所なく、該ねざる所なく、天地萬物
 おのゝ其所を得て、人文の善化美化、駁々として究る所なきに至らんとするのである、故に
 古來の陋習を破り、力めて風氣利用の開發に資し、獨り精神の開明のみならず、物質の進歩を
 も開發し、陋を去り便に就き、野を去り文に就くの趣向、太古に在りて既に範を垂れ、以て萬
 代開發主義の基を爲したのである、『穴居の古風を廢して、木材を以て家居を營む』の詔勅は、
 その事蹟に就いていへば、必ずしも驚くべき大發明といふほどのものではなからう、けれども此
 れが偶然の思付でなく、一の深淵なる進歩的理想より發し、而もそれがオインソレ主義の輕進歩
 でなく、一々道義に合するといふ深遠の思想から照準を取つての斷行であるといふに至ては、
 精神界物質界の兩面に於ける開明を一舉に啓發した、世界の最大文明思想といはねばならぬ、
 第六鋒刃の威を假らずして坐ら天下を平かにせんとの宣言が、いかに平和の大なるものであ

るかば、前にも言ふた通り、而かもこの大平和思想が、いかなる場合に發揮したかといふに、
 花に歌ひ月に對する平和の境遇に於て、弓を張り鋒を閃かす所の戰闘の中に於ての宣言
 であるといふに至て平和主義の一層大なるに驚かずばなるまい、第七「天業を恢弘し天下に光
 宅す」との宣言には、世界統一の大理想を示して、私慾の建國でなくして、天の業である、子
 孫の計を爲すにあらずして、子孫を擧げて道の護りとするのであるといふ、大道義心の事業
 的發動を明かにせられてある、天地の大、日月の明と一つなる大々的公正の帝業なることを知
 るべきであらう、第八既に國を建つること一家の私でないから、先づ自ら天が自己に徳を降
 し繼がしめてある、名と實とを全うし、而してその繼續をして益々永遠不朽ならしむる爲め億
 々萬々世の後までも、この天業正統の繼續者が、第一の主義と爲すべき「正を養ふの心」を弘
 し、さうしてその上で、國を建て統を垂れて天下に君臨する、それが天祖授國の神慮で、即ち
 日本王家の不朽家範であるとの意で、「上は則ち乾靈國を授くるの徳に答へ、下は則ち皇孫正を
 養ふの心を弘め、然る後ち、六合を兼て都を開き、八紘を掩うて宇と爲す」と宣言されたので

ある「然る後」の一語は、明かに建國立君を先とせず、道義の建立を先とするの意で、要するに正を護り道を弘むる爲めの帝業であるといふ義である、なんと偉大なる宣言ではないか、斯の如き明德公義の根底ある建國主義は、世界那れの國にもあるまい、世界の人類が、いつまでも之を知らずに居るといふのは、いかにも心外の事である、これを世界に知らせるのは、先づ第一に日本人の天職である、然るに日本人みづからが、此神聖なる建國主義を知らずに居るといふに至っては、實に沙汰の限りである、しかし神謨悠玄にして窺い難いものと、甚だ大なるものは小眼に映じ難いものと、尤も近いものが自己に視難いのとて、ラツかりして居るのかも知れない、故に須らく先づ眼孔を大にし、靈活の智眼を開いて之を視なければならぬ、こゝに於て、中古この靈國に日蓮といふ一の偉人を生じて、この一大天職を教法的に開宣された、是れ所謂道義的世界統一の指導者である、既にその實行者たる神武帝統の王家は、儼として六合に重鎮し、且つ之が神解者宣傳者たる日蓮聖師は出て、その遺教昭々として八紘に輝かんとして居るこの上は世界人類が、早くこの天運の大歸向を認知して、世界に於ける、日本建國が、果して

(四十二)

何の爲なりしやを覺れば、世界統一の天國は直ちに現れ來るのである、人類の至幸至福こゝに極るのである。

(一四)

日本皇統の萬世不朽なるは道義の實力より來る

世人は、如上の理由を翫味し來て、始めて日本國の『萬世一系皇統連綿』といふ事實が、偶然でないことゝ、それから此萬世不動の王統といふことが、世界統一の上に於て、重大の價値あることを悟らなければならぬ。

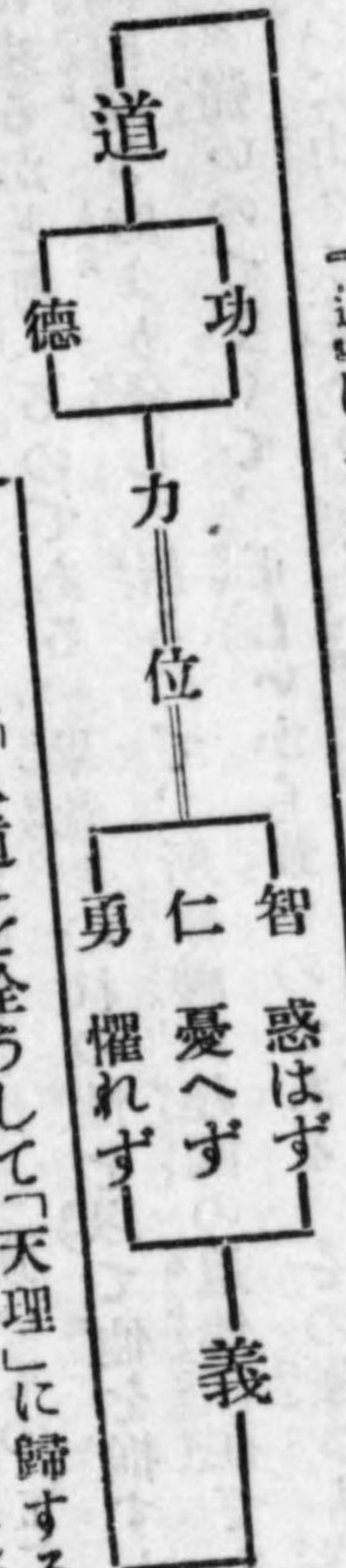
王統の持續といふことが、偶然の幸福であるが如く考へて居るような、淺薄な思想では、世界大平和の福音を意解することは思ひも寄らぬ、それこそ予が前きに曰ふた道を修めて功となり功積んで徳と爲り、徳積んで力となり、力積んで位となるので、その位の淵源が道より發したから、之を天業といふのである、道が既に不朽なものだから、その功も不朽、徳も不滅、その不朽不滅の功德が、力となりて光發し、その力を保任して『萬彙靈動の中心』となるものが位である、故にこの位は不朽不滅である由だと知ツたら、やがて此不朽の王統が即ち世界に於ける

(四十三)

道義的世界統一の主力であることを知らねばなるまい、世界に數多き萬國、一として建國の永久的なるものが絶えて無いてはないか、國が大きい小さいのといふようなことは、正邪の票準にはならぬ、頑石大なりと雖、ダイヤモンドの小粒には及ぶまい、且つ國境の大小は國連の消長に伴うので、擴げれば大きくなるし、削れば小さくなる、始めから永久に大きく始めから永久に小さいといふ定めはない、故に國勢の強弱、大小などいふことは、畢竟夢のようなもので、それを以て優劣の票準とするのは、蝸牛角上の諍に過ぎぬ、世には正理公道ほど堅固にして廣大なものはない、故に正理公道を躰して居るものは正確にして無限なる擴大力を有して居る、大きくしようとせば、いつても大きくすることが出来る、然れども不義不道の世の習ひに真似て、他を劫略して國慾を長ずる爲めの膨張主義と同様な方針を取るにも及ばないから、土境げずに居るので、且つどういふ意味で、曾て一寸の領土をも擴げる必要がないのである、土境こそ山海に劃られて境を爲して居るであらうが、道には關門もなければ境界も無い、凡人類精神の存する所、渾融一致して通達無礙のものである、道の上に建てられた國は、道を領土とするから、始めより無外の大を占めて居るのである。

(一五) 統一國民の勇武：： 黃人禍：： 金人禍

西洋人が、白色は優等の人種で、基督教は文明の宗教だと考へ込んで居るのは、畢竟、世間見ずの偏見である、日本人の勇武なのを見て、今まで無能の民だと誤解して居た自己の無智を省みないで、急に恐れ出して、こんな強い民は、今に吾々を責めに來はせぬかといふ恐慌を惹起して、例の「黃人禍」を頭痛に病んで、嫉妬を起し猜疑を長ずるのは、みづからの地味が見えてあつたのに氣が着かないからである、所謂「君子は義に喻り小人は利に喻る」の格で、國慾的理想以外、何ものも有たぬ、粗糲荒量の頭腦には、「強いの」といふと、直におのれの物でも取りに來るか考へるのである、畢竟おのれの性を以て他を推すからである、日本の勇武は、眞に淵源深き處より發して居るので、所謂神武建國の遺傳存在である、慾張ッて居るからアツカマシク強いのでなくて、正しいから強いのである、その強さも時ありて強いのでなくて、久しき養ひに由つて強いので、即ち道義の權化であるといふことを知らねばならぬ。



「道」は「天理」より生じて「人の道」となる

「義」は「人道」を全うして「天理」に歸する所以なり

天理の内容は大聖佛陀によりて、始めて完全に發揮され、日蓮聖師によりて圓滿切實に指導せられたのである、人界の究極を指示するの外に、佛も法もない、界外高妙の談道も、畢竟これを善導指南せんが爲めである、諸法實相も、一念三千も、要するにこれが爲である、事觀の妙法は、即ち天理の眞證にして人道の至極である、世界統一の一大主義が、古往今來無數恒沙の聖賢人の同一理想である、正しくその事實を體して、世に臨んで居るものが、事實の「世界主」である。

日本だの、天竺だの、東洋だの西洋だのと、小いさな規模の理想で、法界の根本を見出すこと

は出来ない、況して白色も黄色もあつたものではない、況や白が勝れ黄が劣るとは、だれが定めた筈である、若し強て優劣を論ずれば、「白」は幼稚なる色で、「黄」は成熟色である、「白」は単一であつて、「黄」は調和の色である、「白」は受光的で、「黄」は放光的である、「白」は銀で「黄」は金である、あらゆる色を調和した上に光りの生じたのが「黄金色」である、「白」は統一色で、「黄」は統一色である、畢竟するに「白勝黄劣」の愚見は、人種的偏見である、予は黄白紫紅の天地の好文であると考え、西洋人は身軀が大いから優等人種だといふ偏見もあるが、世には大きくて利なることもあれば、小さくて徳なこともある、大きいのに損もあるれば、小さくて利なることもある、身の大小は必ずしも人種の優劣の決勝點ではない、却て多くの場合に於て、小さいのが便利なきがある、現に軍人などは小さい方が良く、徴兵に大きいのを採りたがるのは間違つて居る、今日の戦争は體力よりは智識の争ひである、偶々身軀の大きいのは、行動に敏活を缺いて、その上敵彈を受ける面積が多い、一人で一尺づゝ大きければ千人で千尺だけ危険の度が多い、小さいものはこれに反して、一尺小さければ、千人で千尺

だけの安全を占めて居て、而かも攻撃力は同してあるから、それで敵の危険點を利用する時は、つまり二千尺の先勝實數を有して居る、その上すべてが経済的で勝つから、小さいのは寧ろ誇りである、勿論小さいにも程があるが、日本人の今日の普通尺は、すべての點に於て、無駄を省て有要の實積が存した身長である、大きいのは無益な部分が無駄に存して居るからなので、猶蠻族の風が遺つて居るのである、智識鋭敏、勇武靈活、日本民族の如きは、世界に比類なき進歩的民族であることを知らねばならぬ、故に予は日本人の寸尺を以て、大に過ぎず、小に失せず誠に中和を得て而かも實用無限なる世界統一の民族として尤も恰當の身量であると斷し、

前の「統一色」に例し、之を稱して「統一尺」と名くるつもりである。然るに日本民族の統一的主張は、卑劣な危険な、呑噬主義でなくして、人類の平和と光榮の爲めに建てられた、統一族であるのだから、西洋人たちも、宜しく恐れずに親しむべく、忌まずに敬すべきものである、それを疑心の暗鬼から、陋劣なる恐怖を描き出して「黄金種」など、憎へて居るのは、をかしいほど氣の毒である、この黄金人種たる日本民族は、いまに彼等の爲に

偉大なる幸福を齎らして、世界に光臨して行くのだから、彼等は須らく「金人福」とも稱して、早速彼等の「辭書」へ此一語を追加するがよいのである。

宗教的偏見より割出したる思想は、常に基督教は文明教である、其他の教法は、すべて野蠻であると誤解して、非基督教國は、即非文明國なりと速断するのみならず、實際上にも其构子定木て他を扱はうとして居るようだが、怪しからんことである、要するに彼等は、基督教以外の宗教を知らないからの誤想である、他は姑く置き、日本に發達した佛教の眞價が、今の西洋人には未だ解らない、彼等は宗教とさへ言へば基督教の事とばかり考へて居る、爾いふ世間見ずの偏狹な考へから割出して、日本までをも非文明國だと、自分免許で究めて居るのは、なんと憐しむべき思想ではないか、日本には彼等の思ひも付かぬ、世界統一の大福音を傳へた、最勝無上の宗教が建設せられてあることを、彼等が今にも知つたなら、定めし膽を潰して迷夢を醒すであらう、宗教に就ては別に詳論するから、こゝには略して置く(さし當り之を研究せんとすもふものは、予が著作の「本化攝折論」および「宗門之維新」等を讀むが可し)。

其他山海の景勝、氣候風土の淳良、すべてに於て世界の靈美を極めて、古より他國から一の仙境と想像され、渴仰の的となつて居るのは、皇統の萬世不朽、國民の忠勇靈武と共に、明かに世界統一の要素を具備して、一點の遺憾なき、世界の柱石、人類の靈鎮といふべきである。天運の歸すること、斯くの如く至大周到なるは、決して偶然でない、全く道義的統一の使命を帯びて地上に君臨した轉輪聖王家の、據て以て天下に光宅すべき靈土であるからである。

(一六) 萬事を抛て唯だ日本國を研究せよ。先づ「日本國」を研究せねばならぬ、紛々たる哲世界人類のすべては、何事を研究するよりも、徒らに紛々擾々へのポ理屈ばかりが嵩じて、いと馬鹿な學宗教、蘭菊美を競つて、思想議論の花は八重甘重に咲き亂れても、人生の究極問題に向つて畢竟何等の効果を與ふるでなく、徒らに紛々擾々へのポ理屈ばかりが嵩じて、いと馬鹿な人間を、日に日に馬鹿にしてしまふ、人は理屈の達者になるのを恰例になつたのだと誤解して居るが、人間の問題は實際といふことにある、その實際を知つて、之に處する方法を見出さうとして、種々の學問や理屈は入用となつたのである、若し學問理屈の爲に實際を忘れてしまつたなら

らば、人は學問によりて新たに愚に墮したものと成る、今の理屈界は、大むね此病弊に陥て居る、實に慨歎の至りではないか。

日本人みづからが、自己の國を知らずに居るのだから、西洋人の知らないのも、無理は無いがさりとして何時までも、これを知らずにも居られまい、若し之を知ること一日遅ければ、一日人の生の幸福より遠ざかるのであるから、その日本人たると西洋人たるとに拘らず、速かに一大覺醒を發して、此天機の大消息を窺はねばならぬ。

予は終りに臨んで、一の緊要なる忠告をする、世界各國の帝王および政治家、乃至學者宗教家等は、世界究極の平和、人類最終の幸福のために、みづからの宗教學問政治戦争の一切萬事を擲て、「日本國は何の爲めに地上に建てられしや」を研究するが可い、釋迦も耶蘇も、それで一遍に埒が開いて了らう。

これ丈話しをしたら、予は元へ立歸つて、日本人に復しても可らう、日本人だから、日本最負をすることも思はれると、折角の正義公道を、僻さまに偏解されうかの虞れがあるから、

暫時國籍を除いて赤裸々となり、世界人類の一員たる見地で、世界の人に成代り、人類正當の要求の聲を代表して、此論旨を叙べたのである、いて此上は靈的日本の天職を發揮して、世界統一の大福音を、天地も震へと、堂々大呼して、六合の闇を破らうよ。

(五十二)

『世界統一の天業』を仰し了りて、彼の蠢々たる人類が、眼界ひとへに山海にかざられて、天日の大なると、そが恵みの廣きをも知らず、漫ろに「黄人禍」の鬼胎をいだきて、心と暗鬼を生じつゝ、苦みの海にたゞよへるを歎きて、
『地に種ありと雖、日に非ずんば惠まず』の聖語を思ひ合はせ、あはれ疾く目醒めよかしといのりて………(田中智學)

群榮萌一日、梅菊百花芬
人種何争色、白黄天地文

咲競ふ花いろ／＼の人くさも
みな天つ日のひかりなりけり

勅語玄義

田中智學居士述

勅 語

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツルコト深厚ナ
リ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥美ヲ濟セルハ
此レ我カ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス
爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉己ヲ持シ博
愛衆ニ及ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ德器ヲ成就シ進テ
公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義
勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ如キハ獨リ朕カ忠
貞ノ臣民タルノモナラス又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン
斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ俱ニ遵守スヘキ
所之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス朕爾臣民ト俱ニ
拳々服膺シテ成其德チ一ニセンコトヲ庶幾フ

目論 意篇

○先づ豫め讀者と約せん○
勅語の御文○玄義總説○教
育は道育なり信育なり○教
育の主體は忠孝なり○忠孝
主義は 皇運に朝宗して存
立す○世界統一の力○大義
名分の教相………附言

勅語玄義

田中
智學

文字布教の洪利は血性文字
の威力に待つ正義の普及尤
急なると共に文筆傳道の一
新紀元を開かざるべからず
吾人は此に於て正義の源泉
なる眞理正法の妙理を開發
して勅語玄義の一篇を出す

文字布教の洪利

◎文字は不滅なり普遍なり共通な
り覆思再改の利あり千里飛行の便あ
り文字布教は言説の利に倍す

血性文字

◎熱誠なき文字は粉飾なり偽巧な
り人を悦ばずべきも感ぜしむべから
ず況や之を動かして以て邪を去り正
に就かしむべけんや言々信仰より發
し氣節より成る之を血性文字といふ
隔るるもの成靈化を受く

傳道の新紀元

◎今や言論弘布の時代去りて文書
傳道の新時代に入れり人物乏少と資
力の不備なる時代に於ては文筆を中
心とせる傳道を興立すべきなり彼の
言説傳道の過誤多く開延に就ての失
費多きに比し安全有効なるは勿論一
枝の筆天下を動す亦文明の戦也

正義の普及

◎正義は正氣の母也上理に符し下
情に合す之を正義といふ正義を以て
力と爲す之を正氣といふ國家民生は
この氣力によりて維持せらる天殃人
禍は常に正氣の缺坎より生ず正氣充
實せしめざるべからず正義普及せさ
るべからず

勅語の玄義

◎正しき義は深き眞理の淵底より
發す其源泉を汲み本根を尋ねずして
徒らに義を葛藤に求めんとするも終
に得べからず所謂眞理とは妙法也
釋尊之を説き 天祖之を建て 皇宗
之を體し 聖祖之を唱ふ「教育勅語」
は妙法の「人間譯」なり表に人道を説
き裏に正法を包む文底秘沈幽玄の妙
義默して之を存す今これを開て正義
の淵源を知らしむ「勅語玄義」是也、
願くは國家の正氣これによりて開發
伸張せん

勅語玄義

智學 田中巴之助 謹述

先づ豫め讀者と約せん

教育勅語は、教育そのものでなくして、教育の大本であるから、國家の命である、學校では
かり講ずべきものでなくて、國民のすべてが、日々夜々に憶念し遵奉して、身に實行し、世
に實現せねばならぬ大經典である、されば家ごとに一本を掲げ奉り、人ごとに日々捧誦して
心と身とに讀むべきものであるとおもふ、願くは此篇を讀んだものは、即日からでも實行し
てもらひたい、これが等閑に附せられてある様では、眞に國家前途の一大事である、予は叫
ぶ！ 此書に觸れたる者は、實行の前驅として、先づ 聖勅の全文を掲げ奉ることより始め

たまへ、若名筆を撰ぶ暇がなければ、取敢へず予の拜寫したるものを頒たう、遠慮なくおん申し出てくだささい、書物を空論扱ひに讀む癖が世の久しい病だから、予は議論の前に、これから先へ話してかゝる、全躰教育勅語を世界第一の貴重なる經典たといふことを知らないものが多いから、日本の國民の發達が遅いのである、それといふのも、勅語御文底の深義を發揮するものがないので、勿躰なや、普通の書物並に解釋せられて、乾燥無味なる器械的の道徳談や、御役でする修身鼓吹に、何の味識も感化もなく、兒童は無意義に成人して丁々後は、形式的に敬意を捧げる一種の式文だと考へられて居る様な始末だから、眞に國家の一大事である、依て予は今その玄義と

告 獎

予は茲に國民に獎告す、日本國民は家ごとに勅語の扁額を奉揚し、朝夕これに敬禮して、日々これを捧誦せよ、而して後、行住坐臥これを心と身とに讀めよ、此事は國家護持の一大事なり、此篇を讀みたるものは直に之を實行せられんことを望む(冊尾廣告參看)

(四)

いふて、勅語の御文底に潜み居る深重の妙義を摘發して、眞に尊貴なるもの、味ふべきもの、高いもの、大いなるもの、ありがたいもの、捨てられぬものといふことを知らしむるが肝要だと考へて、こゝに勅語玄義を述べるのである、讀んだものは、能く味つてくだささい、そうして解つたら、前に掲げた予の獎告から實行してください、至囑。

一 勅語の御文

勅語の玄義とは、『勅語の御文底に潜みて居る幽玄なる深き義意』といふ事である、只文上の解しただけなら、既に小學校でも之を講じて居るから、今更ら事新たに人の耳目を煩はさずとも、なべての人は承知して居るであらう、今こゝに説き出す幽玄の深義は、畢竟この勅語聖文の精神を發揮するので、それも通常の會釋でなく、或る高遠なる大理想より照らし來て、之を開顯するのである、(開顯とは事物の中に深く含まれて居る妙處をば、その遮り覆はれて居る皮を剝いて、その淵底を露はし出して、無限の活動を起させるの義)

(五)

予は今の玄義を説くに當りて、先づ一通り勅語の御文を解釋し、併せて御文段を割けて置く必要があるとおもふから、極めて簡単に之を述べることに致す。

(御文相の意釋左の如し)

朕惟フニ。吾が皇祖皇宗、國ヲ肇ムルコト宏遠ニ、徳ヲ樹ツルコト深厚ナリ。吾臣民、克ク忠ニ克ク孝ニ、億兆心ヲ一ニシテ、世々厥ノ美ヲ濟セルハ、此レ我が國體ノ精華ニシテ、教育ノ淵源、亦實ニ此ニ存ス。

吾が皇祖たる天照皇大神を始め奉り皇宗神武天皇等乃神乃聖の御先祖がたが國を啓き肇めさせたまへること一朝一夕のことに非ず、その由て來ること宏久遠大にして、これが爲に積ませられたるおん功績は、あだやなるかのことにあらず、又國を肇御すに就て、上は天徳を奉りて自ら眞理を行はせ給ふ御自徳、下は民衆に蒙らせたまふ文武の御徳政、一日片時も間斷なく樹て植ゑさせられたる徳風の深大至厚なること、史上明々万世を照らし其恩實今に儼然としてこの堅固靈明の國體と現はれて居るにても知るべし、斯るめてたき國體に育らし世々の吾が臣民はいづれも皆この君徳に化せられ國粹に孚應して、自然と國體の忠孝正義を體現して、教へれどもおのづから忠孝の心厚く、國中の人民期せずして皆一つ心になりて代々吾が國體の美風を完うし來れり、抑もこの忠孝が國本となれ

る吾國の手風は、全く吾國先王の遠功深徳が民の血となりて國美の遺風を爲したるものにして、是れ畢竟他より教へて然らしめ、矯めてこゝに至らしめたるものにてはなく、元來の國の姿が「心にあ」となりて現れたるものなれば、即ち國體の精華といふべきものにて、この國體の精華は、やがて過去にも久くしてに民の心を導き來つて民風國俗の精神となれるのみならず、將來永遠の後までも、民心啓發の基本となり國家教育の淵源となるべきものなれば、現在に於て國民の向ふ所を知らしめ、將來吾が國光を宇内に掲げて、祖宗先王の神功聖徳を六合に輝かして、普く世界人類をこの偉大靈明の道義によりて救ひとらせ、人類究極の大平和を地上に建設する所の大徳教眞文明の教育も、これを基礎として立つべきなるぞ、今俄かに議論思案によりて思ひ到り考へ探りて立てたる苟且の議論主義にては無きぞ、人爲ならざる天啓垂範の、而も血より血に傳へ、心より心に融し、身より身に享けて、事實の上に立てられたる、世界唯一の道徳的國體なれば、吾國の教育は、その體すてに諸の論議紛争を超越して、無限の尊貴と威力とを有せる先王の道なり事跡なり、これを種として咲き出でたる美しき花が吾が民風にてあるべく、それより結ばるべき果實が道徳的世界統一の最終目的となりて、祖風を輝かし、普く宇内の民生を救う所の國性、それを發揮長養するが國家教育の本旨なるぞとの聖慮を述べさせたまへる御文段なり。

爾臣民。父母ニ孝ニ。兄弟ニ友ニ。夫婦相和シ。朋友相信シ。恭儉己ヲ持シ。博愛衆ニ及ボシ。學ヲ修メ業ヲ習ヒ、以テ智能ヲ啓發シ。徳器ヲ成就シ。進デ公益ヲ廣メ、世務ヲ開キ。

常ニ國憲ヲ重ジ、國法ニ遵ヒ。一旦緩急アレバ義勇公ニ奉ジ、以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スベシ。是ノ如キハ、獨リ朕ガ忠良ノ臣民タルノミナラズ、又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン

（八）
すてに祖宗先王の血で傳へられたる神功聖德の薫化が民の血となり骨となりて世々の美を累れ來りたる吾國民にして、今も猶古昔のその如く、糸もみだれず先天的忠孝の吾が民なれば、現に之を實行するは勿論、いづつに續擲げ、いや昌えに昌え傳へて、この道の光りを大にせすばあるべからずとて、現在の吾等に對はせたまひ、陛下無限の德光と大威力とを以て、端的に親しく「爾臣民」と對告を指させたまひての懇懇の御勅教はそも何事ぞ、上の神功聖德より發したる忠孝の大道を解剖詳訓したまひて、先づ倫理的に「孝」「友」と「信」の四徳を示して「父母に孝に兄弟に友に夫婦相和し朋友相信し」て人倫道德の根基を固め、すてに人たるの道を全うし、家を爲すの務を齊へたらば、次に社會的の道徳として、自他の相對に約して、處世的道義を示され、「恭儉己れを持し、博愛衆に及ぼし」て、社交の徳風美を發揮せよと訓へられ、かくて人道の本領、ここに確定したる上は、功を擲げ徳を弘むる本能的任務として、開發的に人文の開明を促し、「學を修め業を習ひて智能を啓發し徳器を成就し進んで公益を廣め世務を開くべく、國家有爲の人材とならば、この靈國に生を受け、この神州の民となりて、道義の民衆としての天職を展ぶる能はず、徳や、智や、能や、才や、みなこの一大道統の散体力となりて、統一民の血肉を

（九）
經緯するものぞとなり、斯くの如く人倫として、家庭として、社會として、人類として、おのゝその徳を全うして道に合したる全體を提げて、之を結ぶに國家的觀念を以てするにあらざれば、その徳行道義もいつしか放漫に流れて、不知不識の間に倦廢退却することなきを保せず、故にその衆徳を束れて、國家の威力の上に存立せしむるを要す、是れ常變の二道に約して報國心的状態に結び成せる所以なり、即ち「常に國憲を重じ國法に遵ひ」とは國民の常務なり、平和的勤王情操なり、「一旦緩急あれば、義勇公に奉ずる」は、變に處する場合の勤王情操なり、是れ事變によりて俄かに發生するものにあらず、平素に健存して平かに行渡れる國民性の意氣なり、只一旦緩急あるに際し、その普遍充溢の特性が一時一處に集中勃發して炎々烈々の義勇となるなり、この義勇奉公の大勤王心は、常に國憲國法に恭順する美しき忠君の情操より來り、その忠君の情操は、開發進取の智徳涵養より來り、その智能徳器は、恭儉博愛の徳操より來り、その徳操は孝友和信の情美より來る、而してその一切の徳風美風は祖先已來國の主義と共に展轉發生したる所にして、その最大根本は、皇祖皇宗の功業徳化にり學生したるものなれば、國民の唯一目的としては何よりも何事よりも、この國體の中心力たる、又わが民風國俗の根元たる、天壤無窮の皇基を守護し奉るより外あるべからず、「孝友和信」も之が爲にし、「恭儉博愛」も之が爲にし、「學業智能」も之が爲にし、「公益世務」も之が爲にし、人としての一切、家としての一切、社交の一切、人類の一切、すべて皆この「天壤無窮の皇運を扶翼し」奉るために要するものならざるべからず、是の如くにして始

めて、日本國民の眞面目を發揮し得るなり、眞の日本國民となり得て、始めて陛下の爲に忠良の民たることを得るなり、陛下に對し奉りて忠良の民たることを得るとともに、始めて國民各自の固有性を發揮し得るなり、得るなり、陛下に對し奉りて忠良の民たることを得るとともに、始めて國民各自の固有性を發揮し得るなり、吾々先祖の遺風を繼紹して祖先にも無上の孝を完うし得るなり。

斯道ハ。實ニ我が皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ、子孫臣民ノ俱ニ遵守スベキ所。之レヲ古今ニ通シテ認ラズ、之ヲ中外ニ施シテ悖ラズ。朕爾臣民ト俱ニ拳々服膺シテ、咸其德ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ。

上に擧げたまへる忠孝の大義を一括して「斯道」と稱し給ふ、これ實に何派の學說でもなく、何人の主張でもなく、此國の體まと共に、吾が祖宗自ら行せたまひて後世子孫の導きとしたまひたる遺訓なるゆゑ、代々の皇孫は言ふまでもなく、此國と切つても切れぬ臣民は、相與に遵ひ守らばならぬ先天の大法にして、時代によりて變更すべき不堅實なる道にあらざるが故、古今萬世を通じて變らず、これ吾國固有の美風なれども、一國偏執の邪曲にあらずして、天地の公道なれば、いかなる國に施しても差支なきのみならず、元吾國はこの稱小なる一島國を目的として、道義的建國を爲したるにはあらず、世界の人類をすべて此の正しき道によりて救はんとして、先づ此國に人類歸着の要道を垂範したるものなれば、洋の東西を問はず、人種の黑白を論せず、凡そ天日の照らす極み、人類の生

息する限りは、皆この道の光りによりて救ひ送ぐべく、道義的統一の皇統を擴張せねばならぬ、この無限なる力が即ち世界人類の護りなれば、朕は爾等臣民と俱に、祖宗の御心を相き奉り、拳々服膺して此大なる道に入り、此の大なる徳に住して、上下一致、異體同心に、此大道徳の實行者とならんことを日夜第一の心掛けと爲せり、爾等臣民も朕と同じ心になりて、朕の思ふ通り爲す通りに、道義的國民の實を擧て、吾が建國の天職を全うせよとの聖意を以て、實行道徳の大範を垂れたまふ、德音廣大、聖意天の如し。

以上略して御文相を通釋して置たから、次に御文段の節要を述べて、深義淵釋の下地といたす、先づ御文段は、大分して三段になつて居る、第一段、初より「實に此に存す」までは道の由て來る所を明かしたまふ、これは過去に溯て、その淵原をお指しになつたので、經典の三段分文でいへば「序分」である、次に「爾臣民」より「爾祖先の遺風を顯彰するに足らん」までは、現在に約して正しく忠孝の大義を明示したまふが故に、「正宗分」である、次に「斯道は」より終りまでは、未來に約して、實行を獎勵したまへる所にして、即ち「流通分」である。(篇末圖表参照) 附て云ふ此篇末に「文相」、「文段」、「意科」等七表を附記したのは、世間往々御文義を淺解する風があるようだから、純乎たる經典的解式を用ゐて、輕擧の妄推を防ぐの微意である。

二 玄義總說

初めに勅語の大精神を總論して、後に別釋を述べることゝいたさう。
教育とは何だ？、智慧を開くことである、智慧とは本分を知ることである、世間で智慧々々と
いふのは、智識才能を混じていふから、智慧の眞實體が判らない、眞の智慧といふのは、善惡
邪正を知り分けて、おのれの依るべく行ふべき道を辨へ、且つ能く其本分を盡すことである。
本分の教とは、忠孝である、忠孝といふことを完するに依つて、美しく本分を盡し得るのであ
る、忠孝は一人の倫道徳であると共に、それが即ち眞理であることを知らねばならぬ、元來理
と情とは時に疏通し難いもので、やゝもすると理に従へば情に遠く、情に就けば理に背くよう
なことが、この複雑極まりなき人生の常態である、それを調和するには、無理にひッ付たので
は行かぬ、その根底に存して居る一致點を求めて、その上から調和して行かねばならぬ、畢竟
情と理との相反して居るといふことは、根原的觀察を加えないで、その相の兩立した末から看

た話して、分界の末に着して根本を忘れたので、是は「分」のみを知つて、「本分」を知らない
のである、本分とは眞理そのものゝ分布した當相である、忠孝が即無上の眞理であるといふこ
とは、世の倫理學者や、道學先生などの、夢にも知らざる處で、この一大主張は、佛教の眞髓
たる法華經本門壽量の妙説より生じた本化教門の極談である。
忠孝國本の主義！、これ此教育勅語の大精神である、忠孝を説たから、忠孝論とばかりは謂れ
ない、忠孝が一切道徳及び人事の根元だと説いたから、此説が尊嚴限り無いのである、それが
只一種の理論でなくして、「事實」であることを示されたのが、此の勅語の最勝道徳教たる點で
ある、事實とは何ぞ、吾が 皇祖 皇宗の建國の大事功と、それを經營せられたるすべての徳
行が、宏遠且つ深厚なるは、これ理論にあらずして、事實である、その事實より日本民族の忠
孝は發生して來たのである、故に皇化の薰する所、民これに聿遵したのであるから、區々の議
論や説明が附隨して居ない、生一本の「生のまゝの道」であるので、誰にも異義異見の衝突がな
く、億兆心を一にして世々その美を濟したのである、億兆が心を一にするとは、億兆相互に一

致したのてなく、皇室を票的としてこれに一致したから、だれもく皆同一心になつたのである。忠孝は心の華でなくして、「心」そのものであつた、忠孝は人の行ひでなくして、「人」そのものであつた、それが吾國固有の國風である、何もものにも動搖されぬ、素直な上代の民俗は、理窟も何もなく、自然と忠孝であつた、是れ畢竟皇祖皇宗御代々の徳風徳化が即ち國の風となつたからである、これを「神隨」の道と稱して、日本建國の大精神としてある、人王の世になつて著明なる事蹟訓誡として顯はれて居る 神武天皇の御宣言施政に徴して之を證するのが、一番手近いようだから、それを擧げよう
上ハ則チ乾靈國ヲ授クルノ徳ニ答ヘ、下ハ則チ皇孫正ヲ養フノ心ヲ弘メ、然後、六合ヲ兼テ以テ都ヲ開キ、八紘ヲ掩ヒテ以テ宇ト爲コト亦カラザラム乎。(日本書記二十七)
此の詔勅は御即位の前々年、檀原箕都の聖意を決したまへる時の御宣言であるが、此に「乾靈國を授くる」とあるのは、即ち斯國が人爲の私に要したものでなく、天祖が民生を救ひ護るべく、道義の保護の爲に建國立君を命じたまへるものであるといふ公明正大の思想を言ひ彰し

のである、既に天神の吾れに國を授けたまふや、道義の保護の爲であるとして見ると、この建國の精神を、どこ迄も貫かねばならぬ、故に「下は則ち皇孫正を養ふの心を弘め」と宣言なされたとある「徳」と、「養正之心」とある「正」とは、相照應して一氣である、天にありては「徳」といひ、人に在りては「正」といひ、性に約しては「徳」といひ、義に約しては「正」といふので、人間の上は、翻譯すれば忠孝の大道である、この忠孝は、吾々の處世的義務としての「遮制的道徳」でなくして、その本原天より出たる性の理である、この理即ち事實である、その光りは常に活氣ある事功として現はれて、「徳行」とも「徳政」ともなつて居る、その事實の歴史と實體とは即ち國である、故に國即ち忠孝である、「忠孝の活きたの」を國といふので、「國を肇むること宏遠」とは「事功」に就いていひ、「徳を樹つること深厚」とは「修徳」に就いていふので、「功」は「因」、「徳」は「果」である、功の因あるが故に徳の果がある、徳の果が又因となりて、化育となり薫習となりて、凡そこれに寄るもの觸るものは、皆忠孝そのものと化して了ら、これが「不言の行」「不治

の化』といふので、是れ日本固有の國風である、神武天皇已來 崇神天皇までの御代々は、正しくこの皇國の手ぶりが完全に行はれたものに違ひない、降て 崇神天皇の御に至て、時勢の一變化を來し、始めて『教化』といふ名目も起り、理義を分けて事物を正すの政治を啓かせられた、これは後世の亂雜を整理すべき自然の準備である、その已後に於て、佛教やら儒教やらの道徳的理義が外國から這入つて來た、是は、其の所説の理義が、この日本國の國體と符節を合はして、この國體の精華を理義的に發揮すべく、眞理の天然作用、國體の威徳で世出兩聖の道徳教を引寄せたのである、故にその根幹花實の因縁に相應するように扱ひさへすれば、人類の幸福となるのであるが、儒佛二道を學ぶものが、その空理屈のみを覺えて、本體を忘却したるのだから、佛菩薩だの天だのと、肝心な歸着點までを空論的のものにして、道の實體が近く人生の血の上にいることを忘れたのである、儒佛渡來已後、この邊の消息を察知して末代の爲に惑ひのないように、確乎不拔の斷案を下して、遠く後世の符合を待たれたのが、聖德太子で、太子は日本固有の道を「根」とし、儒教を「花」とし、佛教を「果實」として、三道の融合を示されて

ある、この「根」といふことに眼を注がねばならぬ、聖德太子の人格は、帝王種であると共に佛敎家、政治家、學者、思想家、詩人、美術家、工藝家、武人、外交家である、斯くの如く衆徳衆能を一身に聚めて、天下後世の眼目となられたと共に、その人格の上に能く國粹を發揮され、而かも儒佛二道の精神を調和して、日本固有の道に還元攝歸されてある、「無爲の大化」より、一轉して「文教名分の時代」となる場合に臨み、印度支那の文明が入り來つて、理義言説の供給を齎らしたのは、とりも直さず儒佛の二道が、殆ど日本王道の爲に建設せられてあつたやうな蘊梅で、而かもその呼吸に投合して、日本王種の中より、聖德太子の如き調整的大能力者が出て、道と理義との融會を完了したといふのは、いかにも先天の約束があつたやうである、此點に於て、聖德太子は國體の精にして、即ち皇祖皇宗の理義的「聖化身」である、忠孝の事實は、印度にも支那にも無い、分にはあつても、其完全の正體がない、無いから彼土の聖人は頻りに其名と徳とを稱して、これを再現しようとして掛つた、日本では説明推究しないで、國即忠孝、人即忠孝であるから、それを「教」とも「道徳」とも知らず、何とも思はずして當り

前だと思つて居た、今でもその氣味は確かにある、支那でも印度でも乃至今の西洋諸國でも、第
他の事は姑く置いて、忠孝といふ問題で、其國柄を試験したら、一つも及第するものは無い、第
一儒教の自家たる支那でも、個人には一分の忠も孝もあるには相違ないが、國としては皆無て
ある、開國の理想がない、「成行の儘に團結した國」である、強力者の押領した領土を、國と名
けたのである、故に他に強力者が出て来れば、直ぐその方へ奪はれる、國が替る、永いか短い
か、先さまお替りて、還た他の國となる、いつでも初代は聖人で、終りが暴君か暗君と相場が
究つて居る、既に人の國を奪つたのだから、それで得た國は即ち不忠國である不孝國である、
新に興つた國には、いくらかそれ相應の理由も主張もあるであらう、けれども夫れは理窟であ
る、一たび地上に建てられた君主がある已上、その君主が忠孝の當體であるなら、民衆も俱に
化せられて、忠孝の民となつて居らねばならぬ、然るに同一人種中より之を滅すものが出る
いふのは、その者の不忠不孝といふよりは、國がすでに非忠非孝の組織になつて居るから、注
文通り不忠不孝のものを産み出したのである、此點からいふと、國初くの所謂古聖先王なる

者は、即ち不忠不孝の先祖である、故に前代の忠孝を破壊して、復た後の不忠不孝者を待ち、
切々略々相侵し相凌ぎて、甲謝し乙代り、乙仆れ丙起き、そのたびくに國土民風が類化して、
遂に今の支那や印度のようになつて了て居る、是れ何の故ぞと一考して見るが可い、忠孝の理
窟は開けて居ても、それが理論で、事實でないからである、個人の上には多少植わり着
て居ても、國家の精神とも力ともなつて居ない上に、忠孝といふ意味が、淺薄に有限的に意識
されて居たので、根底が深くない、深くないから隨つて堅くない、堅くないから大きくない、國
は大きくも、國たるの眞價がないから、厳しく言へば未だ國を成して居ないので、人類に對す
る教としては兎に角、國家としての教は成立して居ない、國家そのものが全然非忠非孝の體で
あるから、幾ら國民に忠孝を強ても、精神的に植ゑ付けることが出来ない、其を只器械的に強
むたものだから、形式的忠孝となつて、極完全な部分でも、「君臣」とか「父子」とかの後天的恩
誼に對する人情性の忠孝だけで、先天的道義性の大忠大孝は曾て以て存在して居ない、その所
謂忠孝は空間的にさへ堅實でないのだから、時間的に恒久なるべき道理がない。

吾國の忠孝は、すでに皇祖皇宗の肇國といふことが、即ち忠孝の現れたので、これを以て治世の神髓と爲し、天を尊び神を祭るといふ報本反始の形教を以て忠孝の起點として、任運の大教化を垂れ、天地を貫き神人を和して、政道人事の一切すべて是れ忠孝の發現となつて國を成して居る、事々に神を祭るといふのは、人間の事は乃ち神の事であるといふの意思であつて、これが百般の事に私を離れた現證である、故に國家の政務をも「まつりごと」といふのは、神人威應の道機より外に國の事も人の事もなないといふ趣意である、神の心を人の事として翻譯すれば即ち忠孝である、故に一寸でも之を離れたら天も壞れ人も亡なるものとして、萬事を一貫すべく忠孝的組織によりて國家を建設せられたのである、故に國初已來祭祀に重きを置かれて居る吾國風は、實に神國の稱に背かず、娶るにも耕すにも、戰ふにも和するにも、都て祭祀を以て基礎としてある、畢竟この國俗たるや、即ち人事の凡てが天神と徳を合せることに傾注して居るのである、是れ即ち天と徳を一にしつゝある心象の發作である、天を敬し神を祭るといふのは忠孝の至れるものである、「報本反始の情」即ち忠孝の基本である、是が神祖の御心、御心

は即行實、行實即ち國事、忠孝の天徳即國と彰はれて、「國即忠孝の姿」であるのが、宇内の道徳に先つてその源泉となり、宇内の文化に後れて之を吸收し調和して、遂に世界を道義的に統一すべき運命を負へる吾が日本靈國の國體である、これ教育の精神、本勅教の旨歸である。

三 教育は即ち道育なり 信育なり(名立義)

世に教育勅語と稱し奉るは、吾國教育の方針を御垂訓あらせらるゝに就ての詔勅であるから、斯く稱したのであるが、其方針を御示しになるに就ては、先づ教育の大本を定めなければならぬ、教育の大本とは何ぞ、即ち忠孝國體の正義である、忠孝と神との關係である、智識も才能も藝術も經濟も、治國處世の一切は、すべて忠孝より發生するものであるといふことを訓へねばならぬ、忠孝は徳の體である、智能の本である、忠孝の本源より出でたる萬事でなければ、國家の經營は出来ない、日本國は國家が忠孝的組織に出来上つて居るからである、故に教育の大本をこゝに定めねば、國體と相應した人間が出来て來ない、苟くも國體と一致した民を造る

忠孝といふことを、一般道徳の並に解して、單に忠臣孝子の事蹟を擧げて、忠をすゝめ孝を訓ゆるの類は、全く吾國體の忠孝を味識理解せざる思想である、零細なる修身談的忠孝を以て、

教育勅語を解し去らうといふのは、全く一の誤謬である。この誤謬を根底より救ひ出さずば、國體の精華としての忠孝は、決して顯れない、「仕入れの忠孝談」では、國體の眞意義が發揮されない、若し國家が國體と一致せざる思想の下に、知識や道徳を修めようとするならば、小にしてはその道徳を堅實にすることが出來ず、大にしては遂に國家を誤るに至る、一面には彼の淺露にして危険なる社會主義などの勃興となり、一面には無意義無理想の器械的國家主義や、輕薄幼稚なる忠君愛國論の最負の援倒しとなりて、雙方から國運發達の前途を妨ぐるが如き妄現象が、常に恒に國を煩はしつゝあるのも、畢竟はこの教育といふことを誤つたから起つたのである、學校でも、家庭でも、國家でも、都て道徳に關した思考が、器械的になつて居て、忠孝を精神的に啓發することを忘却したからである、故に予は今此迷妄を救う爲め、勅語に於ける左の「名義」を列擧して置く。

- (一) 教育とは徳教化育の義なり、諸の知識藝術等苟くも人智開發の諸機能は、すべて忠孝徳化の精神上に築き成されたるが、日本固有の教育法にして、而かも世界萬國に超越したる最進歩の無上教育法なり。
- (二) この教育は、日本にして始めて之を言ひ、且つ行ふことを得べし、其故は、皇祖皇宗の宏遠なる建國と共に久しき實踐躬行に因りて、固有國風となりたるものなればなり。
- (三) 國君之を行ひ、國民之に和して、すてに年代悠々の積累氣習となり、君徳民風は、國家といふ有形組織の上に結ばれて發達したるものなれば、國性國體國相、即ち忠孝の事現なり、故にこれが名分票示の權能も、國を代表する君主によりて定めざるを得ず、即ち普通君權已上の權能より發せる教化垂訓を以て國民率遵の準的となす、是れ教育勅語の文言的價値なり。(陛下は吾々の君たり父たる上に更に師にたまはします)
- (四) 教育勅語は、直に忠孝國體の福音を宣説して、近くは吾國の天職を發揮し、遠くは世界人類の道徳觀に、最後の歸決を訓へたる、世界第一の最も完備明確なる人倫道徳の大經典なり。

四 教育の主體は忠孝なり(體立義)

「教育の主體」は何ぞ、即ち忠孝である、忠孝とは何ぞ、國家的人倫道徳である、國家的人倫道

徳とは、忠も孝も個人を本位とせず、國家といふ一つの大きな、明確なる、且つ永久なる、聚合力の上に結ばれたる人倫道德といふことである、忠も孝も世界萬邦の聖人賢人によりて、縦横無盡に説かれてはあつたが、國家の組織に接合された忠孝といふものが、吾が日本の外には曾て無いのである、隨て吾國性の忠孝は、その形式にも内容にも、大に卓絶した特殊の點があるのである。

「忠」とは義の上に立つた道德で、「孝」とは情の上に立つた道德である、故にその情と義との根本的調和を意味しない、離れ々の忠孝は、義と情との衝突した場合には、どちらか成立しなくなる、所謂「忠ならんと欲すれば孝ならず、孝ならんと欲すれば忠ならず」などといふことは、「所謂仕入れの忠孝觀」から生じたので、日本人の言ふべきことでない、然るを吾國でも、古からそれで可いと心得て居る者がある、それは忠孝國體の本旨を知らないから起つたのである、即ち支那製の忠孝を日本に直譯したからである。

日本建國の體たるや、「萬世一君四海一主」の組織で、君も民も、都て忠孝道義の奉行者として、

天より降された神聖なる道德事業の實行者保護者であつて、只之を繼承し統轄して中心となり、上は天に享け、下民衆を統一して行く所の代表者が、即ち皇上帝である、今の皇上帝は即ち古の皇祖である、今の人民は即ち古への神民である、唯時代の經過があつて、祖先と子孫との異りはあるが、その體は、依然建國の主質たる道義保護者として建てられた君なり臣なりである、個々の人が、個々て存在せずして、皇上を通じ、國家に結び付けられて、存在して居るのである、即ち個々の父母も、個々の兄弟も、朋友も郷黨も、人間も動物も、天地も、山河も、一切の事物は、皆この道義の實行者たるよりは、今一重嚴かに保護者たるの意味に於て、存在して居るものとして觀察したのである、即ちその實行保護の中心たる皇上帝國家に朝宗して存在して在る、北辰その所に居て、衆星之に共ふが如き意味の存在である、この故に皇上帝國家を離れては、父母もなく、兄弟もなく、乃至は自己もない、すべての人道の榮は皇上帝國家の榮として存して居るの外、決して個々の存在を認めないのが、吾國體の精神なり忠孝の本義なりである、普通倫理で意味された忠や孝よりは、勿論容も大い、間口も廣い、與行も深い、忠

孝を以て一切の道徳を統綜するのである、此義を發揮した思想の系統は、『神代の卷』『梵網經』
 『法華經』『聖徳太子』『日蓮上人』さては此の『教育勅語』の聖意等によりて顯れて居る、いく
 ら父母に孝養を盡したとして、父母の依て立つ所の本を忘れては、根なし艸の水に漂ふが如き風
 情で、眞の孝でない、忠も亦その通りである、分の忠、分の孝、即ち局部の忠孝は枝葉である、
 根本の忠孝が確立せざれば、人類の道徳は根本的に破壊せられて了うのである。
 根本の忠孝とは、『個人的忠孝』を國家に結合し、その性情を淵源して眞理的發作と爲したる道
 徳觀である、孝の大なるものを忠とし、忠の大なるものを孝とするのである、梵網經に「孝を
 名けて戒となす」と説かれ、「一切衆生の男女を吾が父母と觀ぜよ」との大訓は、正しく天地法
 界を父母とするの大觀察より來る、無限の道徳思想である、かくの如き洪大悠久なる「慈悲の觀
 念」より出た忠孝が、即ち一切の道徳の根元となるのである、個人を基礎とした忠孝では、か
 かる大思想と一致することが出来ないから、やゝもすれば道徳と道徳と衝突して、その反動が
 却て罪惡を生じような奇觀を呈することがある。

日本の皇室は個人的君主でなくて、國民の全體を綜合した道義力の中心表現である、民の爲に
 「君」であると共に、亦大なる「父」である、民衆教化の淵源であるから「師」である、而して其
 君は、君主それ自身の君主でなくて、天と民との徳を代表把持した位であるから、君は即國で
 ある、故に君に對する忠も、父母に對する孝の一層嚴格にして大なるもので、決して異種のも
 のでない、孝、友、和、信、恭儉、博愛、學業、智能、公益、世務、遵法、奉公のすべてが、
 皆この偉大壯嚴なる國體的忠孝によりて把持せられて居る、これが普通倫理の意匠と異つた點
 で、此思想は日本國の國體説と、法華經本門壽量の深意との外にはない、故に日蓮上人は、
 法華經の眞意義に依り、「國の成佛」を以て人の成佛の大成と爲し、普通道徳以上の深義を以て、
 忠孝の根本義を開顯して、法華經を内典の孝經と定め、「忠も亦孝の門より出づ」の道理を擴張
 し、國家的意味の孝にあらざれば、眞の孝にあらざる旨を示し、「父母を捨てて王に參るは孝の至
 りなり」と斷じ、且つ世を安んじ國を安んずるの外に忠孝はないといふ、一刀兩斷明快を極
 めたる解決を垂れ、法華經主義によりて國家的忠孝を叫ばれたことである、即ち文永八年九月

内管領頼綱に與へた書に

「世ヲ安ンジ國ヲ安ズルヲ忠ト爲シ孝ト爲ス」(「昨日御書」縮刷遺文六八)

とある、なんととさつぱりとした斷案ではないか、この遠大悠久にして深淵限りなき大道徳觀から湧き出た忠孝主義は、法華經が根源であるから、上人は極力法華經を以て、日本國體の性命であると主張し、「善につけ惡につけ法華經を捨つるは地獄の業なるべし」と喝破されたのである、この主張を堅持するものは、正しく國家の柱石であると絶叫して

『善ニツケ惡ニツケ法華經ヲ捨ツルハ地獄ノ業ナルベシ、大願ヲ立テン、日本國ノ位ヲ讓ラシ、我レ日本ノ柱トナラン、我レ日本ノ眼目トナラン、我レ日本ノ大船トナラン等ト誓ヒシ願ヤブルベカラズ、(開目抄)縮刷遺文八六)』
願ヤブルベカラズ、(開目抄)縮刷遺文八六)』
論議説明に先ツて、あり／＼實際の

事實となつて、先天的國是として儼存して居るのが、此日本國である、故に法華經の思想は、特に日本を賞揚し解釋したようなもので、法華の深理と日本國の事實と、先天の契合斯くの如き上は、この妙經を、日本國體の精神的解釋として、こゝに世界第一の幽玄偉大なる道徳思想が興立せられねばならぬ由である。

忠孝は「心的徳想」の謂でなくして、すでに事實である、事實の直現したる日本國である、先天的忠孝の實現が國である、皇祖皇宗の功と徳とが結晶して現出したのが國である、故に國は即ち忠孝である、而かも亦國は君を以て體とし、君は道を以て體とし、道は徳を以て體とし、徳は理を以て體とし、理は事を以て體とし、事は人を以て體とし、人は國を以て體とする、その所謂國は、忠孝の形現である、篤く論ずれば忠孝は國性であるのだが、歸本して「忠孝國體」といふのである、この事理物心の展轉相生、本末究竟して、融即一如、聊かも道と離れないのが、吾建國主義より見たる日本國で、國體即道徳また即真理である、社會主義の國家主義のと騒ぎ廻はすような輕躁者には、かけても思ひ至らぬ靈活無限の妙義である。(圖表参照)

五 忠孝主義は 皇運に朝宗して存立す(宗立義)

國體がすべてに忠孝であると共に、國家經營の主義も亦忠孝主義である、而してその所謂忠孝は根本的忠孝、國家的忠孝であるから、皇室を中心として、國家經營の意義を確定して行くのが、忠孝主義の實行である、道徳人事の一切を回らして、皇室を扶翼莊嚴すべく、皇室を國家人生の根本機關とするのである、父母に孝行するの、兄弟夫婦朋友の道も、皇上國家を離れての意味では、孝友和信にならない、恭儉も博愛も學業も智能も公益も世務も、すべて皇徳に一致すべく、皇徳を輝かすべく勉められて行くのでなければ、根のない道徳であつて、中途にいろ／＼の衝突を生じ矛盾を來して、經國の上にも人生の上にも、究極の益を成すことが出来ないことになる、それは彼の支那人を見ても知れる、支那人は孝貞の道は比較的發達して居るようであるが、その孝貞といふものが、個人的道徳を基礎として立たものであるから、その道徳が國家の力とならない、國家はいつも非忠非孝の當體で、人間だけに忠入れ孝な

れと教へても、人の依て立つべき國が忠孝の性質に背反して居るから、根底ある忠孝が成立しない、故に國家の亂離衰頹今日の如き光景で、國家は多くの孝子貞婦を有しながら、その孝子貞婦が、個人なり家庭なりの上では、孝子貞婦となり得ても、國家に對すると忠君愛國者となることが出来ない、是れ即ち忠孝が隔離して居るからである、隔離した忠孝ならば、忠も忠にならず、孝も孝にならず、隨て人類一切の道徳は、都てが破壊されて了う、國家といふものは、人衆結合の一の約束點であるから、國家が道徳の體になつて居らぬときは、個人の道徳も肝心の依る處が浮いて居る爲めに、確立安住することが出来ない、尤も利慾の爲に成立した國家は、今こゝていふ國家とは全然別物である、國家の要素は、歴史、人民、法律等のそれ已上に固有道徳がなくてはならぬ、あとから付けた道徳でなく、國と共に存在して居る、否、道徳と共に立ち共に存し共に發して居る國でなければ、眞の國家とはいへない、予が此篇に於ていふ所の國家は、彼の「部落の大なるもの」を指して言ふの意でない、「道の結晶したもの」を國家といふので、特に此日本國體の上でいふ國家なる意義は、全くそれである、一切の人事道徳すべて國家を

起點とし又終點として立つ所の國家的道義は、即ち忠孝國體の現れたる活動である、その主義行動としての忠孝は、いふ迄もなく國家の中心たる 皇上に聚り歸して居らねば、その人事道徳は、支離滅裂して灰斷的狀態となつて死して下う、道徳的意義が死したならば、その國は精神的に滅びたものである。

孝友和信恭儉博愛の倫理社交も、學業智能廣益開務の開發活動も、一切萬事勤王忠君の大義に包まれて、皆その根底の意義を有して生きて來るのである、例へば親に事へるにも、陛下の親に對する義務とばかり思はず、是れ 陛下の御教を體して孝養をするのである、陛下の御光りに於て、先王の遺訓を格守するのである、若も父母に不孝をしたならば、父母に對して罪を得るの前、陛下に對して罪を得るのであると考へて、父母への孝を盡くしたならば、その孝養には普通倫理の徳操以外、更に大なる高い意味と、非常に威嚴ある意味とを帯びた、大孝となるのである、是れ國家と個人との融和結合した狀態の道徳である、又吾が見を育てるにも、自分の見であるから可愛といふ前に、これ 陛下の御民であつて、今自分がその親たるの

故を以て、お預り申して養育するのである、若し粗忽があつて悪いものに育て成したら、國の禍を造るのである、陛下の御委託に背くのであると、這般に考へて見を育てたならば、國の中にも、國家といふ大なる風が吹き薫り、堅實壯雄の氣風を養ひ得て、人生の意義を大にすることが出来るのである、乃至隣里郷黨に處するもの、社交國事を理するもの、この意味を離れてはならぬ、殊に農業なり商工業なりの根本的觀念には、是非ともこの大思想が存在して居らねばならぬ、『業務を營むのは、吾身を養ひ榮耀をする爲で、その報酬に租税を出すのだ』といふような考で、いくら民業が發達しても、國の榮えにはならない、『個人が富み榮えれば、それがやがて國の榮えだ』といふ理窟は、吾國には斷じて通用しない、形式の上では爾う見えても、その富には國家といふ精神が籠つて居ないから、意義ある富でない、吹けば飛ぶような富である、浮雲の如きものである、國家としてはそんな富に満足は出來ない、譬へば拾つた金で他に振舞う様なもので、心あるものは爾る響應を陋しとするであらう、予は吾國の商人が、この第一用意を缺いて居る爲に、その商業の規模が堂々として居ないで、目先の小々な利慾に眩惑し

て、國の汚辱になるような粗製濫造を敢てして、國家永遠の信用を傷けつゝある多くの惡例を見て、常に慨歎して居るのである、是れ畢竟天壤無窮の皇運を扶翼すべく、民は公德私徳を修め、業を執り職を行ふものぞといふ、第一の根本安心が缺けて居るからである。

君民一致といふことは、忠孝を主義化して、國の風氣とする上に於て、第一の必要條件である、國民がすべての事に、陛下の大御心を體して、それに一致すべく行動する時は、幾億萬の民があつても、一人の心であるから、その力と光とは無限の靈威を以て、世界に臨むことが出来る、個々の道徳や事業が、皆大なる道義の開顯を経て、一舉手一投足も、大道徳の使命となり、一紙半錢の貨も、大道徳の體となりて、人は國と共に成佛する、是が忠孝主義の宗要である。

六 世界統一の力(用玄義)

日本の國體といふと、彼の輕浮者流は、忽ちに早合點して、『偏狹なる國家主義が』といふ、彼れ等は物の幅のみを見て、その深さを見得ざる豆大の眼光で、輕々しく宇宙の玄秘を妄議する

のだから、理解力すら満足でない、況して味解力のあるべき筈がない、如恁ものに國民の頭腦を採毀はされるから、人に深淵の理想が無くて、惡に亡びるよりも愚に亡びるが如き、世の禍を醸すのである、所謂大小は形であつて、力ではない、靈氣靈力は、その容積より打算すべきものでない、又日本の使命が世界統一にあるといふことは、建國の最初に定つたことで、却て國民が永く忘れて居たのである、この廣い世界の中に、那處かに此世界を統一すべき運命が、神秘的にか數理的にか存して居ないといふ道理はない、否、道理どころでなく、寧ろ事實に於て、すでに其運命を示して居る、それが解らないといふのは、解らない方が無理なのである。

轉輪聖王は、人界のすべての國を統御すべき王種で、それは人道の保護者であるといふ思想は、古くからこの世界に傳つて居る思想ではないか、然るにその事實は、世界萬邦中、ひとり此の日本國に存して居て、幾億萬年の往昔とも限り知れぬ時分から、神功聖徳を累積した王種であつて、その垂統が綿々として絶えず、人間の視界に入りてからさへ、既に二千五百有餘年の久しき、只血統ばかりの傳紹でなく、道義の實行保護を以て、代々傳統の主眼」と定められ、道

と共に恒久不變なる王統を垂れて、今現に地上に在りと聞いたならば、世界中の人は、何事を措いても、先づ此道義の保護者たり、世界主たる、輪聖王統の垂迹地なる日本國體の眞價を研究して、人類の頭上に掛れる、「世界統一」といふ運命の歸着を決定せねばならぬ筈ではないか、西洋の人には随分深遠な思想を有したものが、往々あるから、事によると日本人よりも先きに此の點に氣がつく者が、出て来るかも知れない、日本人のくせに、自己の國の性質も特長も能く解らずに、一も西洋二も西洋と、お髯の塵を拂て平氣で居る様な輩は、これ一轉すれば露探的人種であるから、殆ど論外であるが、予の甚だ遺憾とする所は、諸の佛敎家、教育家、政事家、學者等が、例の淺薄なる思潮に驅れて、此玄秘を解し得ない一事である。日本が世界を統一するといふことは、日本の幸福といふよりは、統一される世界の究竟の幸福である、世界に終局の大安心を與ふるため、世界人類を悦可すべく、思想の歸着を獲さすべく、一日も早くこれを叫んで、救世の大福音とせねばならぬ、若し彼のロシアのような主義で、世界を統一するといふことが……遂げられる筈のものではないが……一日でも人間

の頭の上で、そんな音がして居ては、世界人類の頭腦に不快の念が絶えないで、心から鬼を出して居なければならぬ、それほどまででもないでも、彼の國慾主義の種々に頭面を變へた、諸強國の膨張的態度、即ち准ロシア主義とでもいふべき慾想が、人類の頭上に横はつて居る限り、地上の列國は、これが爲に軍備を講じ、戰鬥力を充實せしむるに汲々として、憫むべし無辜の民は、常にこれが犠牲となり、多くの民財は、この殺人器の貢に徴されて、夜もオチくと枕を高くして寐ることが出来ないといふ、現身の修羅界、心の餓鬼道は、世に絶える間がないのである、苟くも高尚なる道念を有したものは、新たに計つてなりとも、この慘たる罪惡の境界を救はうと考へねばならぬ場である、況して矧んや疾く既にその救濟機關が備つて、儼として地上に存し、その使命を立證して居ることが解つたならば、一齊に此で主張の下に渴仰拜跪して、一日も早くそれが擴張を計らばならぬ筈である、孔子は「天」と言ひ、基督は「神」といふ、俱に一種の空想に過ぎない、然るに吾統一主義は、國である、人である、事實である、即ちその靈能の聚中した力である、地上のものにして、窈冥虛冲のものでない、眼前の境界である、

た、けば音のする實物である、それが今、まのあたり人類の頭上に在て、最終の安樂を與へんとして居るのである、哲學者も、宗教家も、政治家も、軍人も、皆來て此の福音の宣傳に従事せねばならぬ、予は前に、此の事に關し各國の帝王大統領學者宗教家政治家等に對ひ「唯諸事を抛て、先づ日本國を研究せよ」との旨を告げて世界統一の福音を宣示した（拙著『世界統一の天業』を見られよ）是れ實に今日世界中のあらゆる問題中、一番の大事である、忠孝は、一國の專有理義でない、全人類の最終歸着點たる、極めて高尚なる人類の觀念である、人は忠孝を全うするに於て、人間の最大美を發揮し了つたのである、故に今その忠孝を國體として居る日本は、人間道徳の依止處としての國體を有して居るので、この正義を把持したのは、世界人類全體の運命を手に握て居るのである、この力用を意味しない、忠孝主義ならば、通用せざる貨幣を有して居ると同様である、天壤無窮の皇運が、すでに世界統一といふことに邁進すべき使命天運を有して居るのである、その力用を發揮すべく、忠孝を實踐するのが

吾國民の天職である、干戈や政略といふのではない、商業や經濟といふのではない、世界統一といふ壯大の意味を帯びて、人の手本になるように、完全なる忠孝の實踐者となるのである、世界思想の先驅を爲し、天下萬世の師導となるべく、國體を輝かし國性を發揮して行くのが、大和民族の大力用である、「之を中外に施して悖らず」とは、姑らく消極的部面から、順に世界統一の洪謨をお示し遊ばされたもので、其必然的氣運の命する所、必ず積極的意義の忠孝徳化が、快活靈妙なる力となつて、世界を信服せしめねばならぬ筈である、忠孝國の民は、即ち忠孝人種である、忠孝人種の力は、終に世界を靈化せずば止まないものである。

七 大義名分の教相(教玄義)

名正しく義明かにして、始めて理に適ひ物に應ずることが出来る、その次第順序を、秩序的に意識せしめ、趨歸せしめ、安住せしめ、行用せしめるのが、教相分別の趣意である、教育勅語は、天皇の威力と徳光とを文字に化し、理義に顯はして分別指示せられた國民道徳の大本である

● 其教式は全く「大義名分」の指南であることを心得ねばならぬ、徳そのもの、内容は眞理である、眞理はみづから眞理を説明しないから、此を人間に行はうといふには、「義」に約しての道を示さねばならぬ、即ち「教」である、既に忠孝主義の當然有する作用が、道義的統一に在るものとすれば、この意味に於ける國民平素の指導方針を確定せねばならぬ、幟じるしの無い戦は出来ない、票的のないのに矢は放たれない、照準が狂つたら銃砲は用を作さない、國體國性に契つた理想を争生せしめて、國家教育の方針とするに就ては、必らずその票準としての義分を明かにせねばならぬ、所謂大義名分である、その形式は秩序を正すにある、徳を以て教とせず、義を以て教とするのが、名分主義の着眼點である、徳は體であつて教でない、徳をして完からしめんとするには、義で進退して行くのである、義とは宜なりで、その宜しさに適ふの謂ひである、乃ち秩序の差排である、その區々の理義を避けて、根本の理義に従ふのが大義といふ事である、「大義」は必ず「名分」に由て定まるのであるから、名分を等閑にしてはならぬ、これが一つ狂へば、教の内容も、道の内容も、みな相違して飛んでもないものになつて了う、

今の世は、何故かこの名分を尊ばない、或ひはこれを以て一種の野蠻思想かの如く思つて居ようだ、怪しからんことである、名分の重んずべきことを知らないのが、即野蠻思想である、タトヒ善ナリトモ義分アタレリトイフトモ先ツ名タイムベシ(縮刷遺文六六)

一切ノ物ニワタリテ名ノ大切ナル也(縮刷遺文二八七三)

と 聖祖は訓へられてある、教の大方針は名から起るから、名が錯亂すると、天地顛倒し、東西相失するに至るのである、今日學校に於て師弟の道が行はれないようになつたのも、この名分の教を放却したからである、西洋理屈の疊的方面を嬉しがって持ち込み、骨を折て國風の美點を汚した結果である、法律政治の上にも、この名分を錯つて居ることが多い、昔時は天皇のおん諱は冒さないものになつて居た、今ではその制を解いた、一寸見はいかにも公平で道理らしい、けれども國家秩序の紊れは、斯る處より來るのである。

名を尊ぶのは義を重んずる所以、義を重んずるのは理を守る所以である、名が浮いて來ると分を侵す、分を侵せば義を破り、義が破れて理に背く、之を邪見とも邪法ともいふのである、そ

れを正すのが教である、この大事を閉却して教育を議するものは、宛も照準を無視して銃砲を放つようなものである。

この教育勅語にある道理は、何人の口から出ても尊いものには相違ないが、特に吾等の爲に尊厳無比なる陛下の御宣教なるの意味に於て、その尊重の度が一層深い、更に世界統一の神徳より發した、久遠の御聲であるといふに於て、又更にその尊さが深い上に無限に大きくなるのである、國民として遵奉すべき名教であると共に、世界的寶典として一言を残すことがある!!! 服膺すべき大修多羅である、予は此論の終りに於て確然として一言を残すことがある!!! この教育勅語は各國の國語に正譯されて、世界萬邦の帝王大統領の宮殿と、その國中の寺院教會堂に奉掲さるゝ時が道理及事實の必然として、將來きつとある、遅いか早いかは、予の豫じめ測る處でない、之を早くすると遅くするとは、一に日本國民の、この勅教に對する信仰行用いかにある、然れども其正しき起點は、ほゞ左の機運が發生した時からであらう

△常路者が教育は信仰なりとの義を曉りたる時(これ一)

△日本國民が法華經を日本の精神なりと知りたる時(これ二)

△坊さんが佛法を信じ教師が勅語の眞意を味識したる時(これ三)

△商人がペテンを止めて商業道德を理解したる時(これ四)

△議員が頭を下げて撰擧を頼まなくなつた時(これ五)

予は死んでも此言は世に残つて居る、若し予のこの確信が外れたら、予が死後の墓を發いて、わが枯骨を拵てもらはう.....(畢)

○附言

本篇は頁數に限りがあるので、十分に意を盡すことが出来ないから、讀者は是非、此論の缺を補ふべく、予が昨年の論述に係る「世界統一の天業」を一讀して、本論と參考して下さい、尙又この一大主張を明確に意味するには、予の發行に係る月刊の雑誌「妙宗」(毎月一回六日發行)を續いて讀して下さい、そうすると、いつとなく、此大福音が會得出来る、尙更に進んで此大思想の源泉を汲うとならば、必ず

『日蓮聖人遺文全集』(本冊の末に案内あり)を細讀して、大に研究せられんことを、國の爲め、人の爲め、度々諸君に勸告いたします。

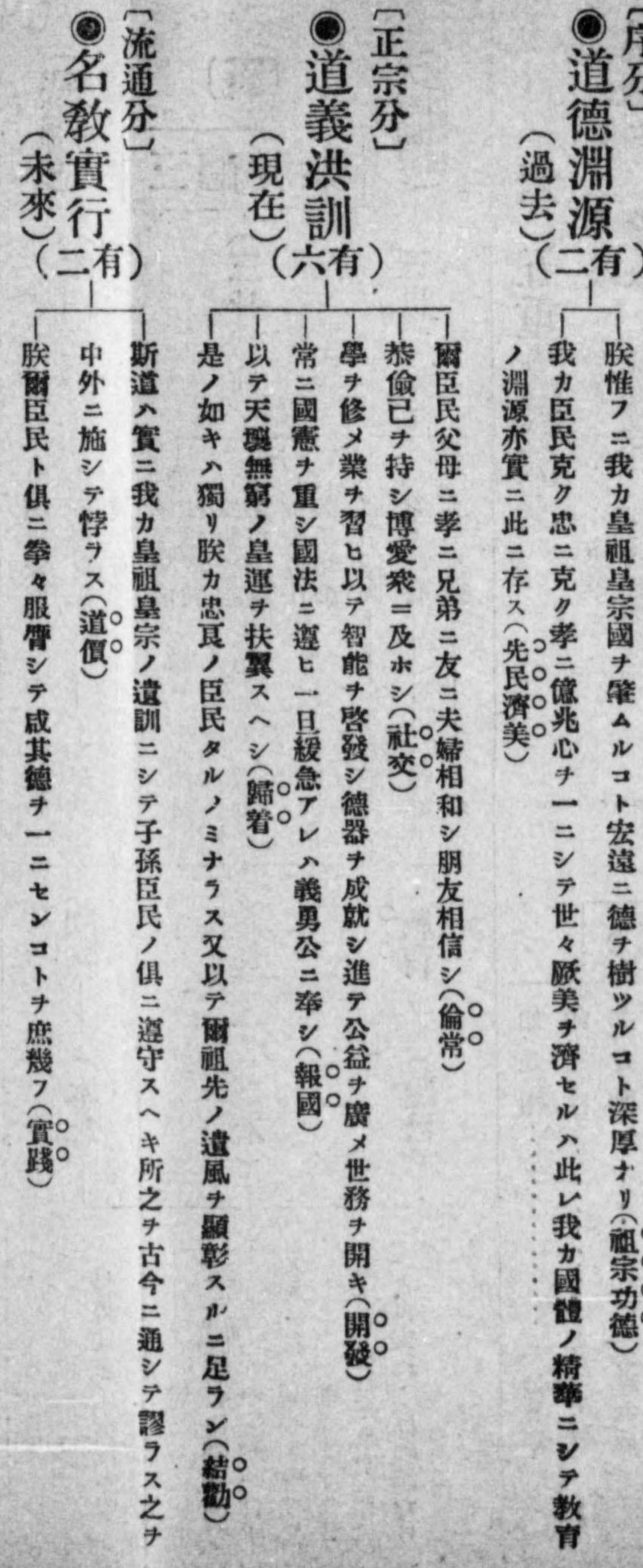
『勅語玄義』の第四版に臨みて

- この書は日本國を復正活動せしめんが爲にものされたる所の醫國の書なり
- 明治三十八年七月十六日に全國の上流社會八萬四千人にこの書を送りて國家の爲に熟讀を奨めたるは『國諫同志義會』の會員なり
- 本書を讀みて始めて勅語の眞意を領し本書の獎告に遵て勅語扁額を請求し來りたるもの既に數千人に達せり

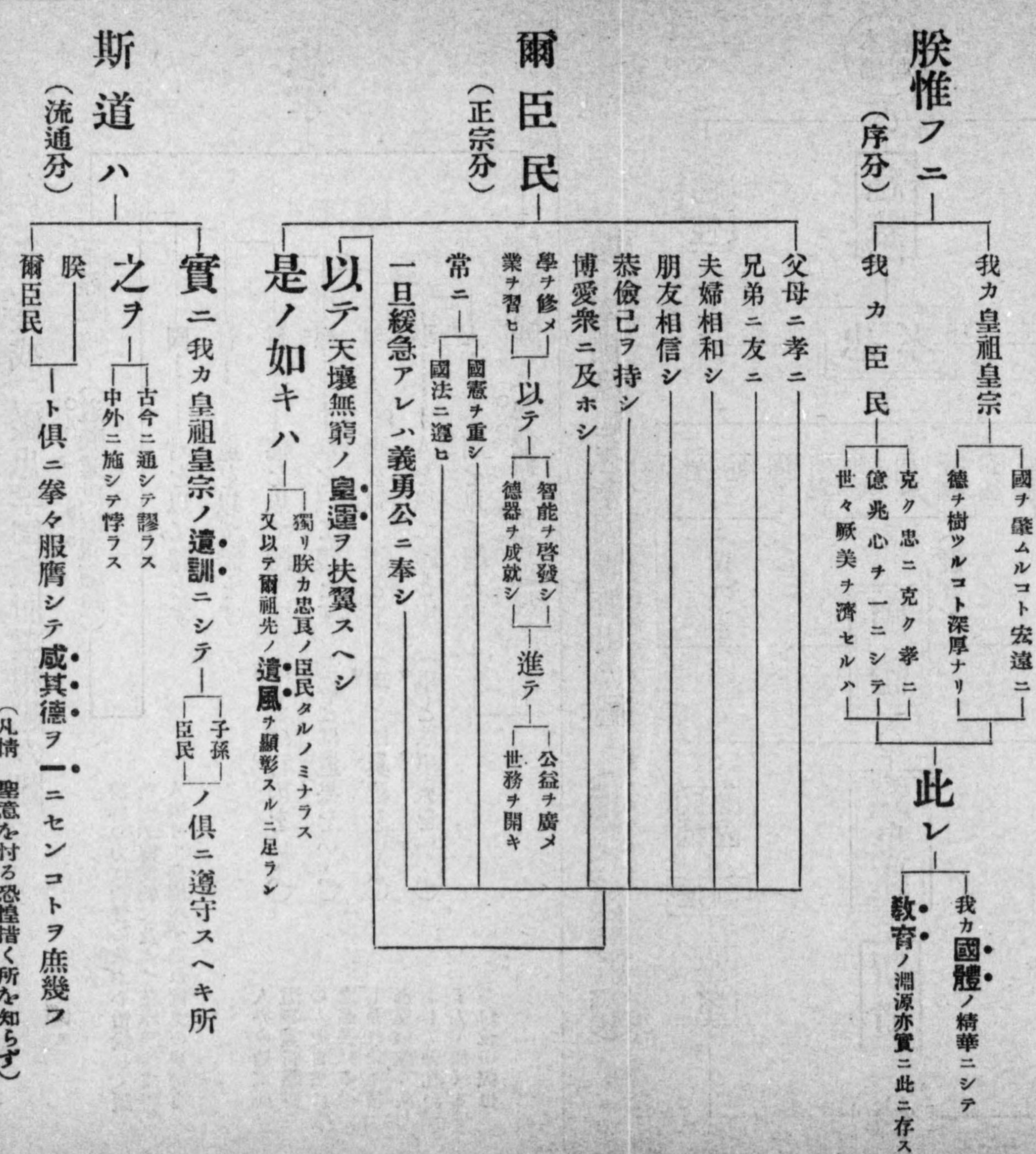
勅語玄義講式圖表

(項七) ●御文段分科 ●御文段意科 ●乘戒相生 ●本佛緣起 ●三德秘藏 ●玄義依文 ●國土十如是

(一) 御文段分科



(二) 御文段意科

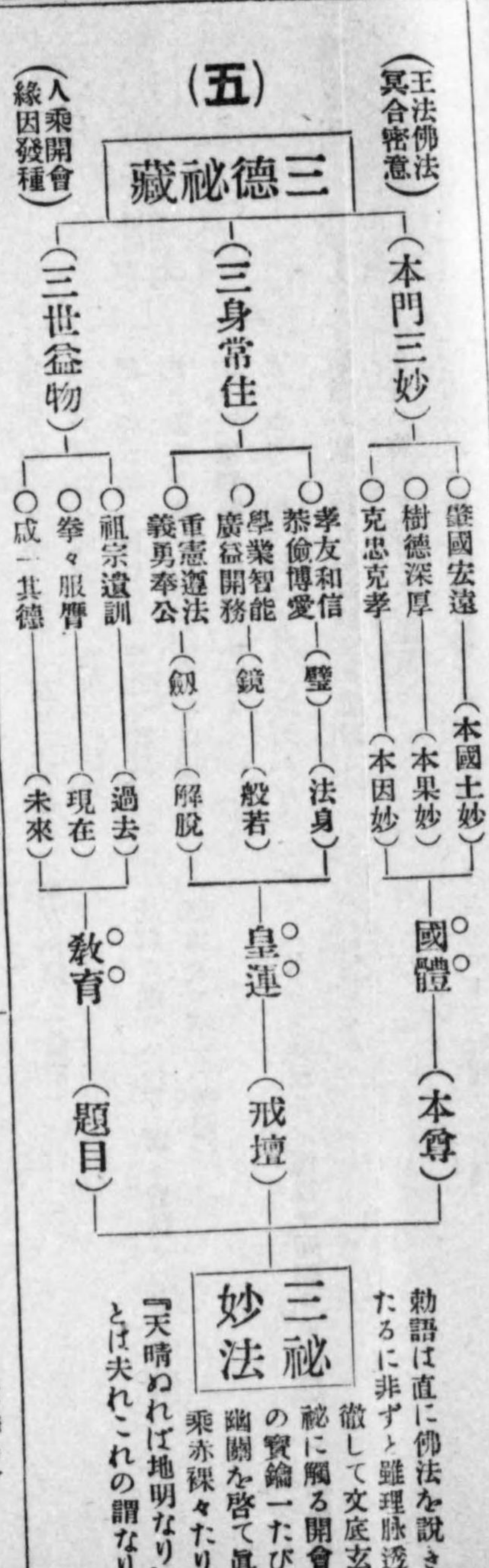
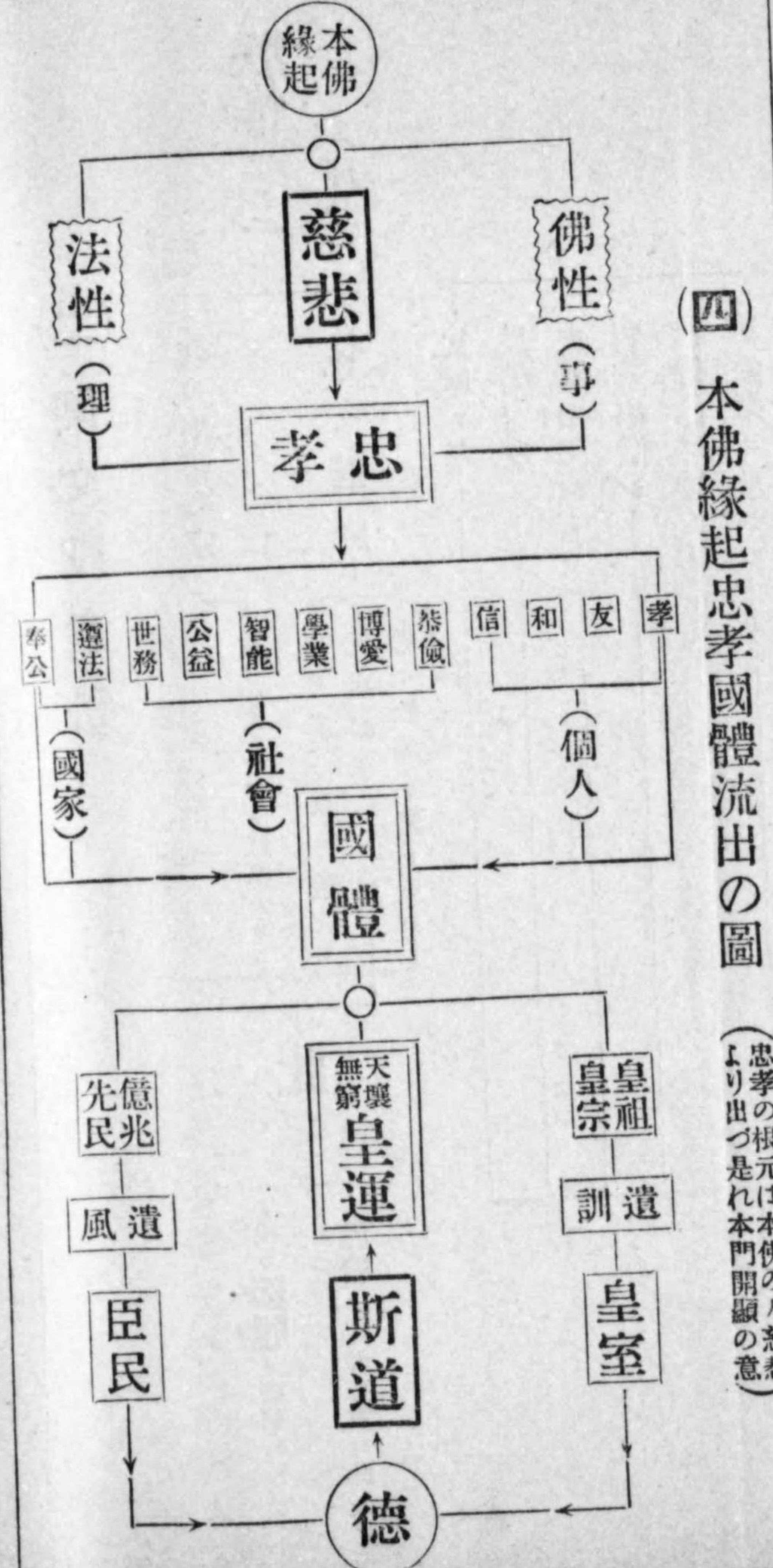
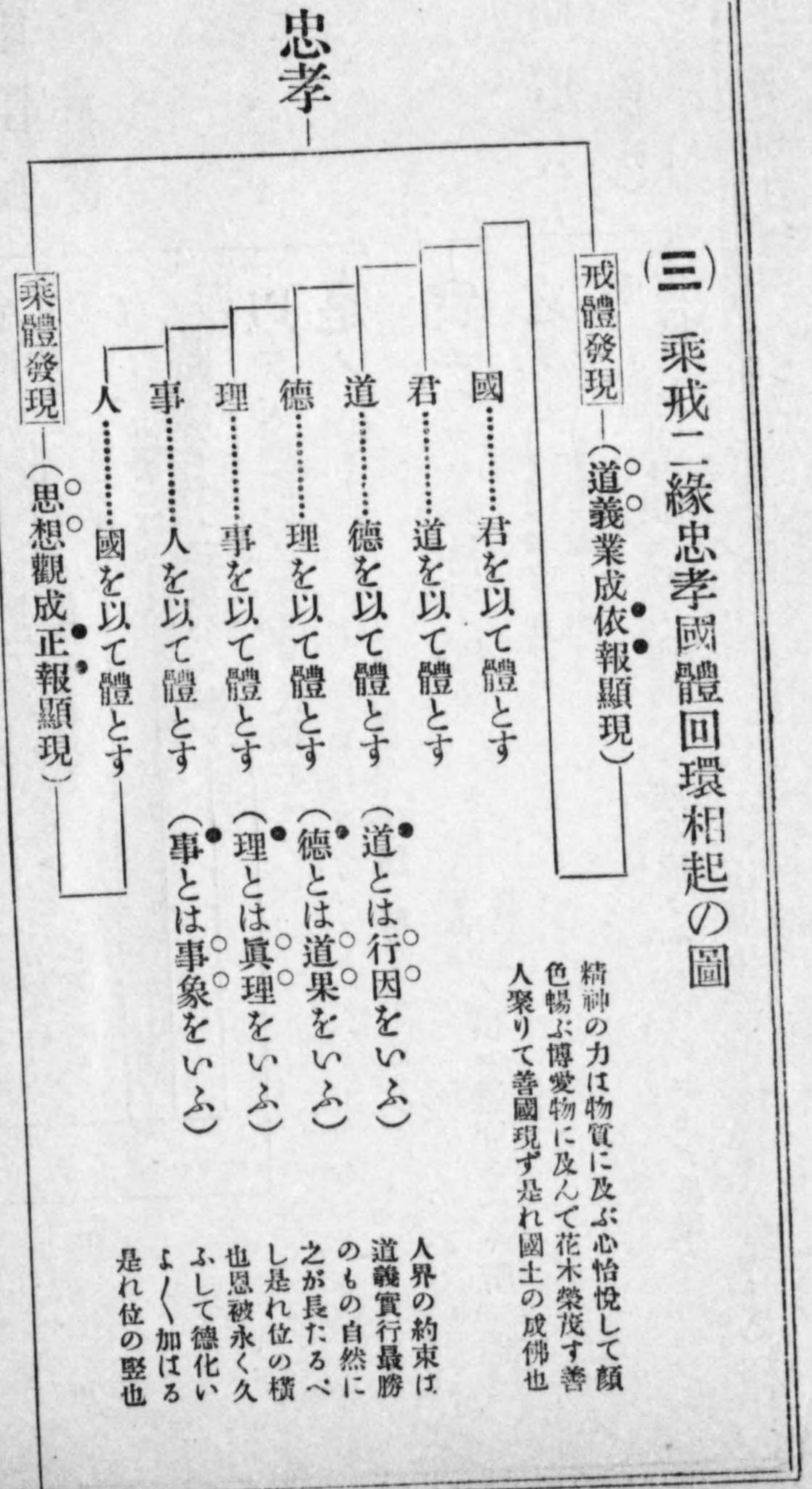


(よせ照再と表圖此て讀を文本し照と文本て看を表圖此)

(裏面注意)

(凡情 聖意を付る恐惶措く所を知らず)

(よせ照再と表圖此て讀を文本し照と文本て看を表圖此)



(六) 五重玄義依文

△名玄義 御文 教育……忠孝
 △體玄義 御文 克忠克孝……國體精華
 △宗玄義 御文 億兆一心……扶翼皇運
 △用玄義 御文 古今不謬……中外不悖
 △教玄義 御文 斯道……遺訓……遵守

○國○德○國體○祖宗○臣民○忠孝○教
 育○皇運○遺訓○遺風○古今○中外
 △安遠△深厚△一心△濟美△精華△淵源
 △扶翼△顯彰△遵守△服膺△不謬△不悖

(七) 是如十國妙

如是相	大義名分
如是性	忠孝主義
如是體	忠孝本理
如是力	天壤無窮
如是作	世界統一
如是因	克忠克孝
如是緣	億兆一心
如是果	皇室
如是報	國家
如是本末究竟等	成一其德

(々云作力體性相土國善)

宗綱提要

田中智學居士述

(私)圖私科擬推恐慮至深……田中智學拜記